

國學院大學研究開発推進機構 日本文化研究所年報

Annual Report of the Institute for Japanese Culture and Classics
Kokugakuin University

第13号



令和2年(2020)9月発行

もっと日本を。もっと世界へ。

【表紙写真 (Cover Image)】

那智山瀧見寺廃寺

(和歌山県東牟婁郡那智勝浦町)

撮影：ノルマン・ヘイヴンズ



伊豆諸島・三宅島の近影（東京都三宅島）



新川祖師堂御会式の万燈
（東京都三鷹市）



堀之内妙法寺の山門前景
（東京都杉並区）



グエル公園 (スペイン バルセロナ州)



コロンビア大学図書館
(アメリカ ニューヨーク州)



ハーバード大学図書館
(アメリカ マサチューセッツ州)

國學院大學研究開発推進機構
日本文化研究所年報

第13号

目次

【プロジェクト活動紹介】

1. 「デジタル・ミュージアムの運営および日本の宗教文化の研究と教材の国際発信」
平藤喜久子…… 1
2. 「『國學院大學 国学研究プラットフォーム』の展開と国学史像の再構築」
松本 久史…… 5

【2019年度のトピック】

1. 国際研究フォーラム「21世紀における国学研究の新展開 国際的・学際的な研究発信の可能性を探る」
New 21st Century Developments in Kokugaku Studies: Exploring the Possibilities for Disseminating International and Interdisciplinary Research] …… 8
2. ワークショップ「生活の中で直面する世界の宗教文化——食・服装・忌避などへの理解」 ……11
3. 国学研究プラットフォーム公開レクチャー ……13
 - ・第1回 荻原 稔氏「井上正鐵門中・禊教と国学」概要 ……14
 - ・第2回 高野奈未氏「古典注釈学と国学—賀茂真淵を中心として」概要 ……16
 - ・第3回 伊藤 聡氏「近世における中世の〈創造〉と古代の〈発見〉」概要 ……18
4. 井上順孝名誉教授のアメリカ芸術科学アカデミーの会員選出について ……20
5. *Kokugakuin Japan Studies* の創刊 ……21
6. *Religious Cultures in Asia: Mutual Transformations through Multiple Modernities* 刊行 ……22
7. 日本文化研究所公式ウェブサイトおよび Shinto Portal 等の開設について ……23
8. 国学研究会・社家文書研究会 ……24
9. 2019年度のCERCとの連携事業について ……25
10. 出張報告「研究事業『國學院大學 国学研究プラットフォーム』の展開と国学史像の再構築」による史料調査」 ……27
11. 出張報告「35th BIENNIAL ISSR CONFERENCE BARCELONA,2019 (国際宗教社会学会バルセロナ大会)」 ……29
12. 出張報告「International Workshop “The Idea of Antiquity in Modern Japanese Religious Culture”」 ……30

【研究論文】

1. 「近代神道における「学」的实践の位置
—國學院大學を中心とする神道青年運動の展開過程を例に—」 木村悠之介……31

2. 「明治期実行教の組織形成における漢学者・国学者
—教師養成制度を例に—」 今井 功一……55

【スタッフ紹介】 ……68

【出版物紹介】 ……85

【テレビ放映・番組紹介】 ……87

「デジタル・ミュージアムの運営および日本の宗教文化の研究と教材の国際発信」

プロジェクト責任者 平藤 喜久子

1. プロジェクトの概要

本プロジェクトは、2016年度から2018年度まで実施された「デジタル・ミュージアムの運営および日本の宗教文化の国際的研究と発信」の後継的な位置づけのプロジェクトとして2019年度にスタートしたものである。

プロジェクトを中心に研究開発推進機構で構築してきた「國學院大學デジタル・ミュージアム」(<http://k-amc.kokugakuin.ac.jp/DM/>)について、研究開発推進機構の情報発信の有機的連関を図り、日本文化研究所が蓄積してきた研究成果や学術資産、研究開発推進機構によって実施されている研究成果や各種のデータベース等をデジタル化し、主としてインターネットを通して国際的に発信していくものとして運営していくことが一つの大きな柱とされ、学内の学部・大学院で構築したデータベース等を横断的に公開することにも対応することを目指している。また、21世紀COEプログラム関連事業として構築したEncyclopedia of Shinto（以下EOS）を拡充させ、神道文化に関する国際的なポータルサイトの構築も引き続き行う。さらに神道および日本文化研究の基礎資料の翻訳、教派神道関係の収集資料の公開など、プロジェクト独自のコンテンツの充実も図ってきた。

デジタル・ミュージアムの機能を、広く大学教育において活用できるものとするための取り組みも行い、スマートフォンを使用した場合の利便性の向上や、動画配信のシステム構築を目指す。また、研究資産を宗教文化教育の教材として展開させていくにあたって

は、2011年に宗教文化士制度の運営を目的として発足した「宗教文化教育推進センター」と連携して行ってきた。なお、宗教文化士制度については、國學院大學も設立当初から参加し、神道文化学部、日本文化研究所の教員が運営に関わっているものである。

2019年度には、宗教文化教育推進センターのほかにも2018年度に採択された科研費・基盤研究（B）（一般）「日本宗教教育の国際的プラットフォーム構築のための総合的研究」（研究代表者・平藤喜久子 18H00615）、古事記学センター、ハーバード大学ライシャワー日本研究所などとも連携を深め、共催のワークショップも実施した。また、昨年度に引き続き古事記学センターとは古事記の英訳の作成の面でも協力関係を築いている。

2019年度の本プロジェクトのメンバーは次の通りであった。

〔専任教員〕：平藤喜久子、星野靖二、齋藤公太、吉永博彰

〔兼任教員〕：黒崎浩行、シッケタンツ・エリック、藤澤 紫、ハイヴンズ・ノルマン

〔客員研究員〕：加藤久子、フレール・チャールズ

〔ポストク研究員〕：今井信治、村上 晶

〔研究補助員〕：小高絢子、高田 彩

〔客員教授〕：井上順孝、櫻井義秀、土屋 博、ナカイ・ケイト、山中 弘

〔共同研究員〕：天田顕徳、ガイタニディス・ヤニス、カドー・イヴ、塚田穂高、野口生也、ビュテル・ジャン＝ミシェル、牧野元紀、矢崎早枝子

2. 2019年度の成果

(1) デジタル・ミュージアムの運営

デジタル・ミュージアムワーキンググループ会議を3回開催して、各データベースの実務担当者・システム設計業者と情報の共有を図った。デジタル・ミュージアムの総データ件数は72,451件、2019年1月から12月までの総アクセス数は886,173件となっている。使い勝手の向上とアクセス数を増やすための方策について協議した。

(2) デジタル・ミュージアムの展開のための独自のコンテンツの構築

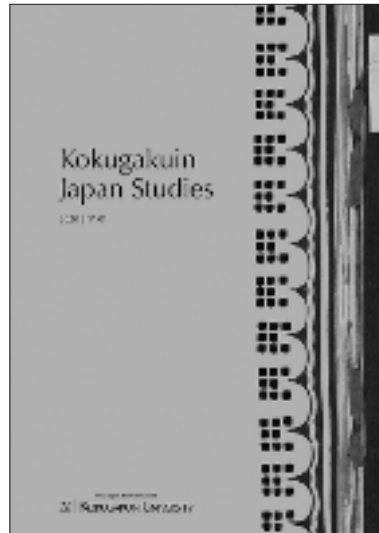
神道の英語での情報のポータルサイトとなる Shinto Portal の運営を開始した。主として日本文化研究所がこれまでに作成した神道に関する英語コンテンツを集約している。EOSの改良作業を進め、また国学プロジェクトと協力して「国学・神道関係人物研究情報データベース」を拡充した。旧日本文化研究所以来の学術資産や催事情報などの整理、集約を進め、新規に運用を開始した日本文化研究所ウェブサイトで開催した。本学の教員による学術成果を英語で発信していくために、オンライン英文雑誌 *Kokugakuin Japan Studies* を創刊し、下記の三本の英訳論文を掲載した。

①“The Kojiki’s Worldview: Entangled Worlds of Gods and Humans” TANIGUCHI Masahiro (* 谷口雅博「『古事記』の世界認識—交錯する神の世界と人の世界—」『東アジア文化研究』2号、2017年2月、1-15頁の英訳)

②“On the Folktale An Ox in the Bride’s Carriage: Classical Tellings and Worldwide Comparisons” HANABE Hideo (* 花部英雄「昔話「嫁の輿に牛」

の研究—古典および世界との比較—」『國學院雑誌』120巻3号、2019年3月、19-32頁の英訳)

③“The Origins of Shimao Toshio’s “Japanesia” Ideas” ISHIKAWA Norio (* 石川則夫「島尾敏雄の「ヤポネシア」論—その起源へ」『國學院雑誌』118巻1号、2017年1月、67-84頁の英訳)



(3) 宗教文化教育の教材研究の国際的展開

「宗教文化教育推進センター」と連携してオンライン教材の作成を進め、映画と世界遺産に関するデータベースの内容を拡充した。宗教文化教育に関する研究会を國學院大學で3回開催し、うち1回は次のような公開のワークショップであった。

ワークショップ「生活の中で直面する世界の宗教文化—食・服装・忌避などへの理解」

【日時】6月29日(土)15時~18時

【会場】國學院大學渋谷キャンパス1101教室

【登壇者】

・岩元陽子 (NPO法人 MICかながわ 英語
通訳・派遣コーディネーター)

「医療現場における宗教文化への対応 — 医

療通訳者の視点から一」

・カーン恵理子(合同会社Crossbridge 代表、
食のバリアフリー推進協議会 代表)

「ムスリムとして日本に暮らすこと。その課題。」

【指定討論者】

井上順孝(國學院大學)、矢野秀武(駒澤
大学)、板井正斉(皇學館大学)

【司会】

平藤喜久子(國學院大學)

【主催】 國學院大學研究開発推進機構 日本文
化研究所、宗教文化教育推進センター

本ワークショップでは、学生のほか、広く
一般社会に宗教文化教育の意義を示した。

また、科研費・基盤研究(B)(一般)「日
本宗教教育の国際的プラットフォーム構築の
ための総合的研究」(研究代表者・平藤喜久子)
の研究会として下記が本研究事業とも連携し
て実施された。

「海外で教えられる日本の宗教文化」

【日時】 2019年8月3日(土) 14時~17時30分

【会場】 國學院大學 学術メディアセンター
会議室06

【発表者】

・アンドレア・カスティリオーニ(名古屋市
立大学)

「米国と日本の大学から見た日本宗教教育」

・李賢京(東海大学)

「韓国の大学において日本の宗教文化はど
のように教えられているのか—教えられる
側と教える側の両方の経験から」

また、2019年11月11日には、ハーバード大
学エドウィン・O・ライシャワー日本研究所
と國學院大學研究開発推進機構古事記学セン
ター、同日本文化研究所共催のワークショッ
プ「近現代日本の宗教文化と「古代」」が開
催され、日本文化研究所からは平藤喜久子、

遠藤潤、星野靖二が参加した。

本企画は、ハーバード大学のヘレン・ハー
デカ教授の多大なるご助力によって実現した
もので、ハーデカ教授司会のもと、次の発表
が行われた。

①平藤喜久子「神の姿にみる古代と現代」

②遠藤潤「平田国学における古代の神のリア
リティ—近代に向かって—」

③星野靖二「日本宗教史の叙述と「古代」—
宗教学の展開との関連において」

④齊藤智朗「造化三神をめぐる神学の構造と
展開」

それぞれの発表について、次の研究者が
ディスカッサントとして加わった。

Prof. Jolyon THOMAS (University of
Pennsylvania)、Prof. Anne WALTHALL
(University of California, Irvine)、Prof.
Kaoru HAYASHI (Texas State
University)、Prof. Trent MAXEY (Amherst
College)



加えて、事業・活動全般に関係することと
して、SNSや公式サイトを通じた情報発信に
取り組んだ。事業は全体として概ね順調に進
展しているが、学術的な成果を積み重ねてい
くことに加えて、日本語・英語での対外的な
発信を更に推し進めていくことが今後の課題
となる。

なお、2019年度に作成を進めたデータベ
ース、英訳論文雑誌、報告書は次の通りである。

[データベース] 國學院大學デジタル・ミュージアム <http://k-amc.kokugakuin.ac.jp/DM/>
[データベース]「映画と宗教文化」データベース

<https://sites.google.com/site/cercfilms/>

[データベース]「世界遺産と宗教文化」データベース
<https://sites.google.com/view/worldheritage>

[ウェブサイト] 國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所ウェブサイト

<https://www2.kokugakuin.ac.jp/oardijcc/>

[ウェブサイト] Shinto Portal
<https://www2.kokugakuin.ac.jp/e-shinto/>

[SNS] 日本文化研究所公式Twitter
<https://twitter.com/oardijcc>
日本文化研究所公式Facebook
<https://www.facebook.com/oardijcc/>

[オンライン雑誌] Kokugakuin Japan Studies, vol. 1, 2020
<https://www.kokugakuin.ac.jp/research/oard/ijcc/ijcc-publications/kjs-01-202002>

[英文報告書] Religious Cultures in Asia: Mutual Transformations through Multiple Modernities, 2020 (2018年度に開催した同名の国際研究フォーラムの報告書) <https://www.kokugakuin.ac.jp/research/oard/ijcc/ijcc-publications/rcia-202002>

3. 2020年度の実施計画

前年度から継続し、デジタル・ミュージアムの運営にあたっていく。特に、2020年度にはデジタル・ミュージアムのシステムの刷新

が予定されている。新システムへの移行作業に当たっては、システムの都合上、これまでのデータベースをそのままの形式で移行できるものではないため、新たに分類・項目の検討・策定作業を進める必要がある。あわせて、新システムの稼働に向けた、移行後の表示内容や設定に関する確認作業等を中心に行っていく。

また、独自のコンテンツとしては、学生宗教意識調査を5年ぶりに実施し、その調査報告書を刊行・公開する。

さらに、「宗教と社会」学会や科研費・基盤研究（B）（一般）「日本宗教教育の国際的プラットフォーム構築のための総合的研究」（研究代表者・平藤喜久子）との共同実施により、オンラインで教材としても使用できる宗教文化の調査を目指す予定である。

催事としては、2020年12月に「見えざるもの」と日本文化の関係性に焦点を当てたシンポジウム・ワークショップよりなる、国際研究フォーラムの実施も企画されている。

2020年に入り、新型コロナウイルスの感染拡大という未曾有の事態となり、研究計画に与える影響も少なくない。限られた条件のなかで、引き続き、少しでも研究目的の達成に近づくべく事業を推進していく予定である。

『國學院大學 国学研究プラットフォーム』の展開と国学史像の再構築

プロジェクト責任者 松本 久史

本事業は、日本文化研究所の二つの研究部門のうち、建学の精神に基づき旧日本文化研究所の神道・国学研究を継承する「神道・国学研究部門」の研究事業として行われるものであり、2011～2013年度の研究事業「『國學院大學 国学研究プラットフォーム』の構築」以来築き上げてきた「国学研究プラットフォーム」のさらなる発展とその成果発信を目的とするものである。

本事業は、具体的には以下の三つの目標によって構成される。(1) 国学に関する学説史・研究史の整理を行い、最新の研究成果を反映した国学史像を打ち立て、それを一般社会に向けて発信する。(2) 上記(1)の作業と連動して、2015～2017年度の研究事業で構築した「明治期国学・神道・宗教関係人物データベース」の修正・管理を行いつつ、近世中期から明治初期までの国学・神道関係人物を対象として、データベースの拡充を行っていく。(3) これまでの事業で構築してきた国学研究のネットワークを拡張する。すなわち、定例の国学研究会・社家文書研究会を行いつつ、学内外の国学研究者を招いて最前線の研究状況に関する公開レクチャーを開催し、さらに日英両言語で運営する双方向型ウェブサイト「国学・神道・日本宗教フォーラム」を立ち上げ、国学・神道研究の情報をグローバル規模で発信する。

こうした事業成果の発信方法については以下の通りである。

(1) における研究成果は、通史形式による国学の入門書としてまとめ、出版する。一般教養書として出版することにより、最新の国学研究の成果を社会に向けて発信する。ま

た、その入門書は本学の神道文化学部の専門科目「国学概論Ⅰ」や「神道概論」の教科書、共通教育プログラム「神道と文化」の参考書として用いることができる。それによって研究事業の成果が学部教育に還元される。

(2) により拡充されたデータベースは、国学研究者にとって有益な研究のツールとなるものである。さらに作業の過程における研究史整理や人物情報の調査の成果が(1)に反映されていく。

(3) の公開レクチャーやウェブフォーラムにより、国内における国学研究の最新状況や、グローバルな国学研究の状況を知ることができる。そこで得られた知見も(1)に反映される。さらにウェブフォーラムではこれまでの日文研における国学・神道研究をアーカイブ化して発信し、国内外に向けて研究の資源を提供する。第2年次には日文研が例年行っている国際研究フォーラムを、本事業の成果発表の場として企画し、開催した。それらによってグローバルな国学研究のネットワークが構築される。

なお、2019年度の事業は以下のメンバーによって実施された。

責任者 松本久史

分担者

専任教員：齋藤公太

兼任教員：遠藤 潤

PD研究員：問芝志保、丹羽宣子

客員研究員：林 淳

共同研究員：一戸 渉、小平美香、小田真裕、芹口真結子、古畑侑亮、三ツ松誠

2019年度研究事業の成果

I. 近世・近代の国学・神道に関する研究史・学説史の整理と国学史像の再構築

(1) 前年度に引き続き近世・近代の国学に関する研究史・学説史の整理を行う。その過程で、従来の思想史的な国学史像の問題点を洗い出した。

(2) 公開レクチャーも参照しながら、21世紀に入ってからの一次資料に基づく実証的な国学研究の成果に依拠し、新たな国学史像を具体的にまとめていく。国学史像の案は左記の国学研究会や「国学・神道・日本宗教フォーラム」において発表し、検討した。

(3) 前年度に策定した執筆者の担当案にしたがい、(2)においてまとめられた国学史像に基づいて、国学概説書の全体像を検討し、各章の執筆を依頼した。

(4) 関連する国学・神道人物の一次資料の調査とデータベース上の国学・神道関係人物の基礎的データ収集のため、中部・東海地方の資料館（岐阜県各務原市の内藤記念くすり博物館）を対象として出張を行った。（本誌トピック10参照）。

II. 国学・神道関係人物データベースの拡充

前年度に引き続き、「國學院大學デジタル・ミュージアム」上の「国学・神道関係人物研究情報データベース」の修正・管理を行いつつ、近世中期から明治初年までの国学・神道関係人物を対象として、先行の目録類や、「国学関連人物データベース」における当該項目を調査・確認する。また、先行研究の調査・整理を行う。これらの調査に基づき、データベースの項目を作成し、順次アップロードを行った。

III. 国学研究ネットワークの拡張

(1) 学内外から国学・神道を中心とする日本

研究の若手研究者を招いた国学研究会を本年度は計5回開催した。これにより学内外にまたがる国学・神道・日本宗教研究者のネットワーク形成を促進した（本誌トピック8参照）。

(2) 昨年度から新たな試みとして開始された「国学研究プラットフォーム公開レクチャー」を継続して開催した。これは学内外の国学研究者を招き、それぞれの専門分野の見地から、国学研究の最新状況に関するレクチャーを一般向けに行っていたものである。このレクチャーで得られた知見は、上記の学説史・研究史整理と国学史像の再構築に反映させていく。本年度は計3回開催した（本誌トピック3参照）。

(3) 国内の国学・神道に関する情報を日英両言語で発信することを目指し、ウェブ上に開設された「国学・神道・日本宗教フォーラム」をFacebookグループとして運用した。

(4) 2019年度の国際研究フォーラムとして神道・国学研究部門が企画と準備を担当し、「21世紀における国学研究の新展開 国際的・学際的な研究発信の可能性を探る」というテーマで開催した。本フォーラムでは、世界各地の国学研究者を招聘し、国内外における国学研究の成果の紹介・共有、国内外の視点の相互交流を目的として開催した（詳細については本誌トピック1および本フォーラム報告書を参照のこと）。

なお、具体的な報告者としては、ベティーナ・グラムリヒ=オカ氏（上智大学）、蔣建偉氏（中山大學、中国）、藤原義天恩氏（レスブリッジ大学、カナダ、ただし事情によりレジユメのみでの参加）、裴寛紋氏（KAIST、韓国）、ジョン・R・ベンテリー氏（北イリノイ大学、アメリカ）、松本久史（國學院大學）、コメンテーターとして一戸渉氏（慶應義塾大学）、桐原健真氏（金城学院大学）、林淳氏（愛知学院大学）が登壇した。

以上が2019年度の事業成果であるが、2020年度は以下のように事業実施の予定である。

2020年度の研究事業の計画

I. 近世・近代の国学・神道に関する研究史・学説史の整理と国学史像の再構築

(1) 前年度まで取り組んできた近世・近代の国学に関する研究史・学説史の整理を踏まえ、従来の思想史的な国学史像の問題点を検討し、最新の研究成果を反映した国学史像の基盤を構築する。

(2) 公開レクチャーも参照しながら、21世紀に入ってからの一次資料に基づく実証的な国学研究の成果に依拠しつつ、従来の問題点を再検討し、新たな国学史像を具体的にまとめていく。国学史像の案は国学研究会や「国学・神道・日本宗教フォーラム」において発表・報告し、構成員を中心として検討を加える。

(3) 既に立案された国学概説書の執筆担当案に従って、各担当者に概説書の具体的な執筆を依頼しているため、(2)において再検討された国学史像を勘案しつつ、一書にまとめていく。この概説書については、来年度中の出版を予定し、作業を進めていくこととする。

(4) 國學院大學研究開発推進機構学術資料センター神道資料館部門と連携し、神道資料館所蔵、宮地直一コレクションの一つである「羽田野神主家文書」を研究への活用や資料保存の観点から若干の整理を行う。

II. 国学・神道関係人物データベースの拡充

前年度に引き続き、「國學院大學デジタルミュージアム」上の「国学・神道関係人物研究情報データベース」を、今後の国学研究における有益なツールとしての機能を果たしていくためにデータベースの修正・管理を行う。具体的には、近世中期から明治初年までの国学・神道関係人物を対象として、先行の目録類や研究を再調査・確認しつつ、「国学関連人物データベース」における当該項目につい

ても確認を行った上で、情報のアップデートを図る。これらの調査に基づいて、データベースを順次アップロードしていく。

III. 国学研究ネットワークの拡張

(1) 定例の国学研究会・社家文書研究会を開催する。国学研究会においては、学内外から国学・神道を中心とする日本研究を対象とした若手研究者の参加を募り、各自の研究発表を行っていく。また、前述Ⅰ―(1)(2)における研究成果の発表と検討を行い、神道・国学研究者の交流を図る。社家文書研究会においては近世・近代の国学・神道に関する一次史料の読解を行い、参加者の史料読解能力の向上も目指す。

(2) 「国学研究プラットフォーム公開レクチャー」として、学内外の国学研究者を招き、それぞれの専門分野の見地から、国学研究の最新状況に関する講演を行ってもらう。このレクチャーは一般に向けて公開し、またそこで得られた知見を上記の学説史・研究史整理と国学史像の再構築に反映させていく。

(3) 前年度に開設した「国学・神道・日本宗教フォーラム」の管理と運営を行う。SNSの機能も活用しながら国内の国学・神道研究に関する情報を日英両言語で発信する。

(4) 過去の日本文化研究所における国学・神道研究の成果をアーカイブ化し、上記のウェブフォーラムなどを通じて国内外に発信する。

※2020年度の事業計画は以上の通りであるが、本年のコロナ禍もあり、計画の見直しを行った。具体的には、国学概説書は本年度中の刊行を目標としていたが、執筆時間の確保が難しかったため次年度への延期を決定した。また公開レクチャーについても次年度に延期することとなった。他に資料調査の出張についても中止することとした。

国際研究フォーラム「21世紀における国学研究の新展開 国際的・学際的な研究発信の可能性を探る New 21st Century Developments in Kokugaku Studies: Exploring the Possibilities for Disseminating International and Interdisciplinary Research」

2020年2月8日、日本文化研究所の主催により、国際研究フォーラム「21世紀における国学研究の新展開 国際的・学際的な研究発信の可能性を探る」が開催された。

21世紀に入り、一次資料に即した国学の実証研究が個別に進展する中で、近世～昭和期にかけての国学をめぐる学術的な意義づけを総合的に再検討する必要が出てきている。本フォーラムでは国学研究の国際的な相互交流をテーマとし、国内の研究者が見落としている視点はないか、海外へ発信すべき成果とは何かを模索するために、実証的な国学・国学者研究を推進している5人の外国人研究者を招いた。それにより、国学を起点とした広範な研究ジャンルへの展開を探究し、日本文化研究ならびに欧米・アジア文化との比較研究のツールとして「国学」を捉えなおすとともに、グローバルな国学研究ネットワークを築く端緒となることが目指されている。

なお、開催言語は日本語であり、全体の司会は遠藤潤氏が務めた。

基調報告 松本久史（國學院大學）

研究開発推進機構の松本氏は、「本フォーラムの主催者の問題意識と学術的背景」と題する基調報告を行った。松本氏は「国学研究プラットフォーム」事業を紹介したのち、國學院大學における「国学」研究が、国際的な比較を行う日本文化研究として展開してきたことを述べた。一方、日本社会における一般的な国学認識としては、昭和初期に顕著な、ネーションステートに向かうベクトルの影響

が未だ強い。ある特定の時代の国学理解によって近世以降の国学全体を理解しようとする傾向があり、近世国学自体を問う視点があり見られなかったのだという。

しかし、21世紀に入ると平田国学や荷田派国学の史料調査が進展し、皇国中心主義に限定されない近世平田学、先行学説の祖述に留まらない春満の業績といった形で、近世国学全体の再検討が要請されてきたと松本氏は指摘する。そして、「タコつぼ化」を乗り越えて共通の通史的「国学」理解を醸成すること、他文化を背景に持つ外国人の目から近世国学を捉え直し、多（他）文化との共通した課題を設定することを課題として提示した。

報告① ジョン・R・ベンテリー（アメリカ・北イリノイ大学）

ベンテリー氏は、「国学における言語学の意義」と題して報告を行った。アメリカでの国学研究は知的歴史・文学・思想などを中心とするが、ベンテリー氏の場合は文献批判と言語学を研究の視座にしているという。

具体的には、賀茂真淵による動詞の活用の分類、本居宣長による漢字三音の分析、鹿持雅澄による開拓的な日本語の形態論といった、国学者の築いた国語学の土台が、言語学的視点から取り上げられた。現代の日本語学は国学の言説を誤謬とし、そこに立ち返って論を立てることはなされないが、ベンテリー氏は、現代の感覚から見る傾向を減らせば、前・中期の国学による言語研究が国語学に与えた影響の重要性が認められると主張する。

2013年にベンテリー氏が英訳版を出版した『玉勝間』の項目を分類すると、約四分の一が言語学で占められていることが分かる。宣長は言葉の意味・ニュアンス・使い方に敏感であった。国学の知的宝庫に言語学を加えることで、その研究を拡大・活性化し、海外でも発展させる可能性が見出せるのである。

報告② 裴寛紋 (韓国・KAIST)

次に裴氏は、「国学、実学、朝鮮学——學術運動としての韓国「国学」研究の動向と展望」と題する報告を行った。1930年代の植民地朝鮮では、18世紀ごろの漢文脈的な「実学派」の思想、特に丁若鏞の思想に光を当てる「朝鮮学運動」としての「国学」が存在した。朝鮮学は民族独立運動と深く関わり、「実学」における自主的近代化の可能性が実現していれば植民地にはならなかったという期待が含まれていた。そのため、朝鮮学研究は1990年代まで独立運動史の観点から進められてきたが、2000年代前後から、1910年以前の「国学」との連続性、同時代の日本・中国の「国学」をも視野に入れた、学術史的な接近へと中心が変わってきた。それによって、「国学」の普遍的性格や現代的意義が浮き彫りにされてきたと裴氏は述べている。

18世紀の「実学」は、実質的なネットワークとしては強くない「学风」のようなものだったが、1960年以後の「国学」研究は、「実学」を「学問」として実体化して論じてきた。21世紀、そのような「近代志向」の実学研究は反省され「近代省察」の「新実学」が提案されている。裴氏は、中国や韓国において「国学」が復活している現象を挙げ、「国家のために」という呪縛から解き放たれたいと結んだ。

報告③ 蔣建偉 (中国・中山大学)

蔣氏は、「会沢正志斎における「天祖」の位置」という題目で報告を行った。江戸後期水戸藩の思想家だった会沢は、その国家構想

である「国体」論の諸要素を「天祖」即ち天照大神と結びつけ、「天祖」を世界観の核心に据えている。

神道において「天祖」を天照大神とする立場は自明ではなく、後期水戸学に限っても揺れが見られるなか、会沢は、「天祖」を天照大神のみの呼称とし、「天神」と区別した。会沢の意識は、『迪彝篇』や『下学邇言』における『神皇正統記』・『延喜式』の編集・操作に表れている。民衆の心を専一にする機会として大嘗祭などの祭祀を捉え、天照大神＝天祖を群神から隔絶した存在として強調しており、一なるものへ民衆の心を帰する意識があったかのように見える。

蔣氏によれば、会沢における「天祖」観の背景には歴史と現状への認識があった。天祖＝天照大神を崇敬する人心が散乱するとき、時代は治から乱へと傾いていく。会沢は、同時代の仏教から民心が離れ、キリスト教が介入することを恐れていた。神道や儒教は、現状では人心の離散を挽回できない。それでも会沢は、天祖への信仰と人倫が人心に残存していることを確信し、人々に語りかけることで秩序の回復を目指したのであった。

報告④ ベティーナ・グラムリヒ＝オカ (上智大学)

オカ氏は、「只野真葛 (1763-1825) と学術ネットワークの欠如について」という題で報告を行った。英語圏の研究では、徳川時代の人的ネットワークという概念が注目されてきたが、男性のみが取り上げられる傾向があり、女性の関わり方が無視されているという。ここでオカ氏は、国学者、儒学者や蘭学者の学術ネットワークにおける女性の関与・役割を問うために、徳川時代に生きた一人の女性・只野真葛を取り上げる。

仙台藩医・工藤平助の娘として生まれた真葛は、父の死後、『むかしばなし』を執筆した。そこからは、真葛周辺のネットワークが性別

化されていたこと、性別が理由で有益なネットワークへと手が届かないことへの自覚を伺うことができる。

真葛は、新たなネットワークに加わるために、「ひとりかんがへ」を執筆し、面識のない曲亭（滝沢）馬琴に送って編集と出版を依頼する。馬琴は「真葛のおうな」『独考論』を記して真葛を批評する中で、「男のように考える」女であると感銘しつつ、学問的な知識や素養が足りないことを非難した。

儒教を批判したために国学の学派だと考えられることのある真葛だが、儒学や蘭学をも折衷しており、どのようなカテゴリーにもぴったりとは当てはまらない。一つの理由は真葛のジェンダーであり、男性中心で排他的な学問の世界にコネクションを作り、思想家となった点はユニークである。ただ、最終的には初志を成し遂げることができなかった。

報告⑤ 藤原義天恩（カナダ・レスブリッジ大学）

藤原氏の報告は「欧米における国学研究の過去から未来へ——研究史と津軽国学の紹介」と題するものだったが、事情により参加できなくなったため、司会が代読した。

まず藤原氏は、ハリー・ハルトゥーニアン、アン・ウォルソール、マーク・マクナリーら三氏の業績を欧米の国学研究史として紹介したのち、「国学」を英語でいかに表記すべきかという問題を論じた。

これまでの英語による研究では、近世から近代への連続性を重視する“National Learning”や、他文化の脅威に対する自らの文化の復興という意味合いを持つ“Nativism”、そしてローマ字化した“*Kokugaku*”が用いられてきた。しかし、米国史研究に由来する“Nativism”については、国学の一側面である、尊皇攘夷思想に限られるといったように批判も多く、最近では皇国日本の特殊性と優越性を主張する思想として

国学・水戸学を含む“Exceptionalism”、それを不適切とする論者からは“Japan Studies”といった訳語も提案されている。とはいえベンテリー氏のように、ローマ字の“*Kokugaku*”を適切とする場合がやはりある。

藤原氏自身は津軽の平田派国学を研究しており、弘前で最初の篤胤没後門人である平尾魯僊が、平田学派の人脈ネットワークを情報源の一つとして、最新の政治・社会情報を「風説留」にまとめたことなどを紹介した。

コメント・総合討議

以上の報告を受けて、近世の陰陽道と近代の仏教を専門とする林淳氏（愛知学院大学）・日本文学・国文学を専門とする一戸渉氏（慶應義塾大学）・吉田松陰を中心に思想史を研究している桐原健真氏（金城学院大学）によるコメントが行われた。

林氏は、近世と近代の連続性や、ナショナリズムの捉え方について述べたのち、各報告の内容に関して具体的な質問を行った。

一戸氏は、国学あるいは「和学」の多様性・雑多さに関して注意を促した上で、国学の特徴である「復古」をとっても武家・公家など様々な階層による差異があり、時期によって多様で捉えがたい、ローマ字で“*kokugaku*”というしかないような日本の国学をどう近世の研究に活かすかが課題とした。

桐原氏は、「個別具体的と普遍抽象的」「目的的和手段的」という軸に基づく四つの象限で国学研究を分類した。他に桐原氏は、近世社会における儒学の優位と市井の学問としての国学の位置などを指摘しつつ、近代における国学の叙述や、新国学の可能性に触れた。

報告者によるリプライの後、フロアの参加者とも、活発な質疑が交わされた。登壇者以外にもおよそ100名が参加し、国学研究の今後を期待させる盛会となった。本フォーラムについては報告書も刊行される予定である。

（木村悠之介）

ワークショップ「生活の中で直面する世界の宗教文化 ——食・服装・忌避などへの理解」

「デジタル・ミュージアムの運営および日本の宗教文化の研究と教材の国際発信」プロジェクトでは、「宗教文化教育推進センター」と連携し、学生や一般の方々に宗教文化の学びが現代の日本社会にとっていかに重要かを理解してもらうため、仕事や生活の場で宗教に関わる問題に対応する機会を持つ方に現状を報告してもらい、ディスカッションをするためのワークショップ、「生活の中で直面する世界の宗教文化—食・服装・忌避などへの理解」を開催することとした。開催概要は次のとおりである。

【日時】 6月29日（土）15時～18時

【会場】 國學院大學渋谷キャンパス1101教室

【登壇者】

1. 岩元陽子（NPO法人 MICかながわ 英語通訳・派遣コーディネーター）

「医療現場における宗教文化への対応 —医療通訳者の視点から—」

2. カーン・恵理子（合同会社Crossbridge 代表、食のバリアフリー推進協議会 代表）

「ムスリムとして日本に暮らすこと。その課題。」

【指定討論者】

井上順孝（國學院大學）、矢野秀武（駒澤大学）、板井正斉（皇學館大学）

【司会】

平藤喜久子（國學院大學）

【主催】 國學院大學研究開発推進機構 日本文化研究所、宗教文化教育推進センター

以下にそれぞれの講演の内容を簡単に紹介する。

最初の登壇者である岩元陽子氏は、神奈川県で医療通訳者として活躍をしている。神奈川県には、外国人が医療を受ける場合の通訳を派遣するシステムとして、神奈川県の国際課と民間のMICかながわの協働事業として「かながわ医療通訳派遣システム」がある。2002年の発足以来、69病院と協定を結び、英語、中国語、スペイン語、ポルトガル語、韓国朝鮮語、タガログ語、タイ語、ベトナム語、カンボジア語、ラオス語、ロシア語、フランス語、ネパール語という13言語に対応し、204名（2019年3月末）の通訳者の業務が行われている。このシステムの運営に関わる通訳者として、医療の現場で宗教文化の問題に直面した経験を具体的に挙げて紹介して頂いた。



岩元陽子氏

医療通訳は、医療現場で「異なる言語や文化をもつ医療従事者と外国人患者」の間でコミュニケーションを成立させるために活動を行う。外国人患者は、その通訳の存在により、さまざまな疑問、不安を解消し、医療への安心や信頼を得ることができ、また医療従事者も安心して適切な医療を受けることができるというメリットがある。基本的には、当事者

間の言葉を正確に、忠実に、意見などを介さずに訳すことが求められるが、ときに文化や習慣などの違いから誤解や不信感が生じたときなどは、通訳者が文化的な知識の補足や説明を行うことで理解を助ける必要があるため、日本および外国人、双方の文化についての理解や知識が必要になるという。

宗教に関しては、日本の医療機関は一般的に受付時に宗教のことを把握するというところを行わず、対応マニュアルも作成されていない場合がほとんどである。とくに問題が起きやすいのが、医療従事者と患者の性の組み合わせで、主治医の制度を取っていない病院に於いて、つねに女性患者が女医を希望するといったことが外国人の患者の場合には起こっているという。そういったケースについては、通訳者の仲介によって落としどころを探ることが行われる。

難しい例としては、エホバの証人の信者である外国人妊婦のケースが紹介された。エホバの証人については、日本でもかつて医療の現場で問題が起こったことがあるため、その後のディスカッションでも質問や意見が出た。



カーン・恵理子氏

次に登壇したカーン・恵理子氏は、自身が外国人のムスリムの方と結婚し、イスラームに改宗したムスリマとして日本で暮らし、子育てもしている。その経験に基づき、ムスリムとして日本で暮らしていくときの課題を語っていただいた。

ハラールについての基本的な知識について

紹介するなかで、ムスリムが「食べられるものはなにか」という発想ではなく、「ムスリムが食べられないもの」「使えないもの」を知ってもらいたいと述べていた。またムスリムの冠婚葬祭についての考え方や子供の学校行事への考え方、地域での暮らしのことなど、日々日本で暮らすなかで直面する誤解や偏見などについて、具体的な事例を挙げて論じた。



ディスカッションの際には、とくに子育てに関わる場所で質問が多くでて、日本の学校教育の場でムスリムの子供たちが増えていく現状のなか、課題を具体的に知りたいというニーズがあることがわかった。

カーン氏は、Crossbridge (<http://crossbridge-project.com/>) というムスリム対応のコンサルティングやサポート業務を行う団体を主催している。そこで進めていることのひとつが「食のバリアフリー」で、ピクトグラムを用いて、料理や商品に入っている原材料を提示する活動を広める取り組みを行っている。終了後には、日本文化研究所の教員、宗教文化教育推進センターの運営委員、登壇者の方々に、実際にハラールでピクトグラムを用いて食材を示している料理を囲み、より具体的に現場の話を伺うことができ、有意義な学びとなった。

(平藤喜久子)

国学研究プラットフォーム公開レクチャー

日本文化研究所では、2018年度より「『国学研究プラットフォーム』の展開と国学史像の再構築」という研究事業に取り組んでいる。本事業は、「近世・近代国学に関する研究史・学説史の整理と国学史像の再構築」、「国学・神道関係人物データベースの拡充」、「国学研究のネットワークの拡張」という三つを中心的な目標に設定しており、そのうち三つ目の「国学研究のネットワークの拡張」の一環として、2018年度より「国学研究プラットフォーム公開レクチャー」を開催してきた。

この公開レクチャーでは、学内外から国学に関連する研究に携わっている研究者を招き、それぞれの専門分野の視点から国学に関連した研究史や最新の研究動向についての講演を依頼している。公開レクチャーの趣旨として、この講演により得られた知見を本研究事業のもうひとつの目標である「近世・近代国学に関する研究史・学説史の整理と国学史像の再構築」に反映させることが挙げられる。また講演を一般に向けて公開することで、最新の研究成果を社会へ広く発信し、国学研究のさらなる活性化を図る。

2年目となる2019年度は、3名の講師を招いて公開レクチャーを開催した。以下にその概要を示し、次頁以降に各レクチャーの概要を掲載した。なお会場はいずれも学術メディアセンター棟会議室06である。

第1回の公開レクチャーは2019年11月15日に開催された。井上正鐵や禊教の研究を行っている荻原稔氏（都立青峰学園）を招き、「井上正鐵門中・禊教と国学」というテーマで、井上正鐵門中の行法や正鐵と気吹舎との交流

についてお話しいただいた。

第2回の公開レクチャーは2020年2月13日に開催された。日本文学の観点から賀茂真淵を研究している高野奈未氏（日本大学）を招き、「古典注釈学と国学—賀茂真淵を中心として」というテーマで、賀茂真淵の古典注釈の特徴についてお話しいただいた。

第3回の公開レクチャーは同年2月20日に開催された。中世の神道思想について研究を行っている伊藤聡氏（茨城大学）を招き、「近世における中世の〈創造〉と古代の〈発見〉」というテーマで、近世における中世神道の受容の実態をお話しいただいた。

令和元年度第1回国学研究プラットフォーム公開レクチャー 荻原稔氏「井上正鐵門中・禊教と国学」概要

2019年度第1回国学研究プラットフォーム公開レクチャーは、井上正鐵研究の第一人者である荻原稔氏を招き、「井上正鐵門中・禊教と国学」というテーマで講演を賜った。

まず、司会の齋藤公太氏により本レクチャーの概要や荻原氏の経歴について説明がなされた。続いて本プロジェクト代表の松本久史が挨拶をおこない、本プロジェクトが様々な視点からの実証的な国学研究を目指している旨について紹介がされた。

荻原氏からは、

- ① 井上正鐵門中の行法と教説の概略
- ② 『神祇伯家学則』をめぐる気吹舎とのかわり

という二つのテーマについて発表がなされた。

①井上正鐵門中の行法と教説の概略について、最初に井上正鐵の略歴や正鐵門中の道統や教会の系統についての説明があり、その後は禊教諸教会における現行の行法が、荻原氏の実演を以って紹介された。

最初に、唯一神道禊教（足立区）の「四つ祓」が実演された。「四つ祓」では、鈴の音を合図に「永世の伝」という無声の呼吸を数回おこなった後、「しゃく」という薄手の拍子木のリードで「禊祓詞」を唱える。その後、鈴を振る音に合わせて「とほかみえみため」の「三種祓詞」が唱えるのであるが、「とほかみえみため」の八音を唱える間に鈴を振る回数は八声→四声→二声と変化していくという。

次に、一九会道場（東久留米市）の「五つ祓」が実演された。最初の「永世の伝」は拍子木の合図でおこなわれ、続いて拍子木に合わせて「禊祓詞」が唱えられる。その後も同じく「三

種祓詞」が唱えられるのであるが、唯一神道禊教の場合と異なり、鈴を振る回数は八声→五声→二声という変化をするという。

続いて、膝で打ち鳴らす「おさ棒」と鈴を用いる神道禊教（中央区）の祓行の一部が披露された後、天台宗の講社である浄信講社の高声念仏について説明がされた。安政初年、葛飾の浄光寺の住職を務めていた但唱が正鐵門中の三浦知善の下で門中に入門すると、行法を仏教化して教化活動にあたった。それが深大寺やその末寺に伝わり、川崎市の西蔵寺住職の入亮伝により明治期に結成されたのが浄信講社であるという。この高唱念仏では、白木の木魚に「ばい」という棒を打ちつけて音頭をとりつつ念仏を唱えるという形をとっており、こちらも荻原氏により実演がされた。浄信講社の高声念仏の一部は、いすみ市の真福寺や川崎市の幸福寺にて現在も行われており、仏教の行法ではあるものの、基本構造は唯一神道禊教や一九会道場のものとほぼ同じであるという解説がなされた。

以上の行法は集団でおこなうものであったが、続いて指導者が修行者に対し一定の境地に達したと判断した場合に内陣（奥殿）にておこなう伝授についての説明がなされた。ここでの伝授の方法は「産霊の伝」と呼ばれ、弘化2年に井上正鐵が門中に指導体制を指示するにあたり、三箇条、すなわち「神水の事」「喜悟信の事」「法止の伝の式」が制定されたという。

「神水の事」とは、神水の調製方法についての伝授であり、その伝書は伝の本文と製水の具体的な作法を記した「神水製法式」から

構成されている。正鐵は水を宇宙の根源と考えており、器に水を入れて『日本書紀』神代巻を唱えながらかきまぜることで、宇宙の誕生から現在までを象徴しているという。

「喜悟信の事」は、修行者への信心伝授の時期を判断する基準についての伝授である。修行者のなかで「喜心（喜びの表情になったり顔を紅潮させたりしている状態）」や「悟心（溜息や片身に汗を流している状態）」を起こした者が出た場合、時を置かずに信心を伝授させるべき旨が記されているという。

その信心伝授の作法を説いているのが「法止の伝の式」である。内陣において、修行者は「息吹」という無声の深呼吸の行に取り組むのだが、これは指導者の「天津祝詞太祝詞言を宣れ」という指導者の合図の後におこなわれるという。文政9年、正鐵37歳の時の旅日記には同行者に念仏を指導した旨が記されており、翌10年には父から「天津祝詞之太祝詞事」の研究をせよとの遺言を受けていた。その後天保4年には、「甘露女」という神女により迷いの心を覚ます明玉を口に投げ入れられるという神夢を感得したが、萩原氏によると、これは正鐵が念仏の行法と祝詞の研究との統合を確信した結果であるとしている。すなわち正鐵の行は、罪を祓う天津祝詞太祝詞言を古典の特定の文言ではなく全ての人間が持つ「息」であると理解することで、知的な理解に依らない行法体系を確立したという。

そして正鐵は同年秋に、ていせうという未詳の女性念仏導師から教師となるよう伝授を受けて指導者となり、翌5年には白川家に入門した。さらに同7年には「江戸御門人」という立場で京都の白川家に参殿し、伯王に面会、神拜式を授かったという。これを踏まえ、②『神祇伯家学則』をめぐる気吹舎とのかかりについて説明がなされた。

最初に、『神祇伯家学則』執筆の経過が示された。天保13年、正鐵は寺社奉行に対し、日頃の教導の趣についての釈明の書面として

『唯一問答書』を執筆、提出した。その同年、白川家関東執役南大路左兵衛から平田鏡胤に、寺社奉行への下問への上言書の執筆が依頼された。すると平田篤胤が上言書の執筆に意欲を燃やし、秋田において「伯家御口授」として執筆、同14年正月に書き上げて江戸に送ったという。

この『神祇伯家学則』は、文化13年に白川資延王の口述を門人が筆記した体裁に仮託した偽書である。この作成にどれほど白川家の関与があるかは未詳であるものの、萩原氏によると『白川家日記』天保13年12月7日条には「執役所よりも、先頃来毎々文通」とあることから、白川家内において了解はされていたと推定できるという。しかし、同13年12月中に正鐵は口書（調書）に署名をし、12月27日には遠島の指示があったため、『神祇伯家学則』が正鐵の処遇に影響する余地や当時の史料も言及されるはずもなく、本書は正鐵の新義異流一件に関わる副産物であったと結論づけた。

また萩原氏は今後の課題として、明治期以降の教学や行の形成に国学がどのように関わっていったのかについて、特に大武知康に注目しながら検討していきたい旨が述べられた。また、近代以降の教派神道の民衆教化の実態についても関心があることが挙げられた。

質疑応答の時間には参加者より、禊教の「三種祓詞」に対して宮中祭祀では「三種祓」と読む例があることを示し、禊教において「三種」と読むようになった時期について質問が出された。萩原氏はこれについて、『唯一問答書』の最古の写本である万延元年のものには既に「三種」との読みが付されている例を紹介し、正鐵は宮中祭祀の語をそのまま使うつもりはなく、また白川家の家職を侵害しているとの疑惑を持たれないようにした可能性もあると答えた。

（武田幸也・鈴木健多郎）

令和元年度第2回国学研究プラットフォーム公開レクチャー 高野奈未氏「古典注釈学と国学—賀茂真淵を中心として」概要

2019年度第2回国学研究プラットフォーム公開レクチャーは、日本文学の領域から賀茂真淵を研究している高野奈未氏により、「古典注釈学と国学—賀茂真淵を中心として」というテーマで開催された。

高野氏はまず、国学研究における真淵についての言及、そして真淵の古典注釈学の特徴について例示した。高野氏によると、一般的な国学研究では国学の目的として社会改革や生き方の探求というものがあり、その手段として古典研究が行われてきたという認識があるといい、真淵については古道の追究が不十分であるという評価がなされており、古典の研究を通して古道の究明に至ったという点で本居宣長を国学のピークとするという現状があるという。また国学研究における真淵についての言及の例としては、日野龍夫氏が国学のピークを真淵に移し替え、真淵の国学を「ほどよい完成」、宣長の国学を「行き過ぎの無理が見られる」状態であると考えて、宣長ほどの完成度ではないという点に真淵の国学の有用性を見出すことができると提唱したという（『近世文芸思潮研究』『日野龍夫著作集』2、ペリかん社、2005年）。さらに真淵の古典注釈学の特徴については鈴木健一氏が、契沖が「用例を引いてきて、機能的な解析」を行ったのに対し、真淵の古典注釈は「心情を重視して、感動のありかを示した」ものであると指摘したという（『古典注釈入門』岩波書店、2014年）。これを踏まえて高野氏は、心情分析とある程度の実証性を備えた真淵の古典注釈は国学や古典注釈学に先立つものであると述べ、国学研究の立場から真淵を検討

する場合は宣長や荻生徂徠、平田篤胤との思想の比較が中心となるのに対し、古典注釈学は先行の古注釈との比較が主であり、真淵の学問の特徴を明らかにするのに有効であると説明した。

続いて、高野氏のこれまでの研究により明らかとなった真淵の古典注釈の特徴が紹介された。例えば『伊勢物語』の旧注では本書を在原業平における実際の出来事として捉え、儒教的倫理観にもとづき好色的要素を否定し教訓性を付与しており、また旧注において事実として受け取るべきでないと言われた部分は「作物がたり」、即ち虚構として読んだうえでそこに教訓を読み取るよう指示されるなど、『伊勢物語』を理想的に読むことが求められていたという。

一方真淵による『伊勢物語』の注釈書である『伊勢物語古意』では、上記のような虚構性を「興」として理解し肯定する旨が説かれているという。この「興」という語は流布本『伊勢物語』の奥書にあり、在原業平の自記により『伊勢物語』が成立したという説の根拠となっていた語であったのだが、真淵は物語においては元々の物語そのものよりもその感興を喚起する表現方法をこそ賞賛すべきと主張した。真淵における「興」の用法は一概に定義はできないものの、旧注を覆し本文を無垢に読んでいくための方便として用いられており、真淵は『伊勢物語』を業平の自記とする根拠であった「興」を物語の作者による創作の特徴として位置づけ、書かれたことをそのまま読むということを主張する理念的枠組みとして利用していたという。なお荷田春

満の『伊勢物語童子問』においても『伊勢物語』の虚構性が強調されているが、本書は旧注の批判に終始してしまっていた。しかし『伊勢物語古意』は『伊勢物語童子問』による虚構性の強調を引き継ぎつつ、新たに『伊勢物語』の理解方法を提示することに成功したという。

続いて『伊勢物語古意』が前期読み本に方法的影響を与えていた例が紹介された。真淵は『伊勢物語』において歌に地の文を付け加えるとその歌の意が変わることに注目していたが、この視点が建部綾足にも影響を与えていたことが奥野美友紀氏の研究により明らかになったという（『本朝水滸伝』論—近世的歌物語の創造『江戸文学』22、2001年、同「虚構の発想—建部綾足『由良物語』の割注から」『日本文学』55-12、2006年）。また綾足は『西山物語』にて「ひをり（割注：伊勢物語）」の語の横に「柵」の字を振っているが、これは『伊勢物語古意』における「ひをり」への「引柵又は標柵」という注を参酌しているという。

次に、真淵による『源氏物語』への注釈書である『源氏物語新釈』の解説がなされた。本書は『伊勢物語古意』と同様に前代の注釈や価値観の一部を踏襲しており、同時代の人々に受け入れられやすくなながらも人間像についての新説や読解を通して明らかにした物語の創作法を提示しているという。真淵以前の注釈においては『源氏物語』は寓言や勧善懲悪の物語として位置づけられており、真淵も『源氏物語』にそうした構想や実利性を見出すことについては否定していない。しかし真淵は、「物のまぎれ」は宮中の規範が乱れ人々が人情に通じていなかったために発生したとしており、人情の重視という点に真淵の独自性が見られるという。また光源氏と藤壺の関係については、もともと皇子と皇女の配偶であり「日本の神教」によって諷諭していると、皇統の純血が守られていることを

重要視しているという。すなわち真淵は皇権を重んじ漢学の無用さや人情の大切さを学ぶことができる物語として『源氏物語』を認識しており、現代的な理解において「もののあはれ」が実現されているからよいという見方とは大きく異なるという。また真淵は『伊勢物語』をより詳述したものとして『源氏物語』を捉えており、説明が過剰であると非難はしているものの『伊勢物語』の趣意を明らかにする助けになると限定的に肯定していることも解説された。

最後に高野氏の今後の課題として、国学者の物語注釈における教訓性についての検討が挙げられた。特に真淵は『歌意考』において『落窪物語』を「ことのこゝろをよくかきたるは、ものかたりの中に又たくひなし」と高く評価しており、真淵による『落窪物語』への注釈は教訓性が強調されているという一般認識について再検討を加えたい旨が述べられた。

その後、質疑応答の時間が設けられた。日野龍夫氏が提示した真淵と宣長の関係性についての位置づけについては、現在では真淵の宣長への寄与はそこまで大きく評価しない向きがあると回答した。続いて真淵の「興」の概念が、文体が与える効果を重視した結果生み出されたものなのかという質問に対しては、旧注を否定するために見つけ出した可能性があると回答した。

（武田幸也・鈴木健多郎）

令和元年度第3回国学研究プラットフォーム公開レクチャー 伊藤聡氏「近世における中世の〈創造〉と古代の〈発見〉」概要

2019年度第3回国学研究プラットフォーム公開レクチャーは、中世神道を研究している伊藤聡氏を招き、「近世における中世の〈創造〉と古代の〈発見〉」というテーマのもと、近世における中世神道の受容の実態について講演を賜った。

はじめに中世神道研究に関する現在の状況について、神道だけでなく文学や歴史学においても中世研究と近世研究が相互の研究状況を把握できていないことが課題であるとし、中世神道研究と国学研究をつなぐ研究視角として①神話研究、②偽書・偽史研究のふたつの方法があることが提示された。

続いて、中世神道と偽書との関係について、中世における偽書としての神道書を紹介した後、当時は六国史を頂点とする古代書の集合体を「日本紀」と呼称していたことが説明された。

次に、中世においては仮託書の形をとった偽書が多数制作されたことが報告され、聖徳太子の未来記や、胎児の成長を五段階に分類する胎内五位説を示した『生死本源経』などの日本において撰述された偽経、さらに源信などに仮託し仏教の土着化に伴い本覚思想を拡大解釈した文献や、張良に仮託した兵法書などが紹介された。加えて、在原業平の子である滋春に仮託された『伊勢物語髓脳』において、卜部兼友の『神道秘説八家大事』が引用されているなど、これらの仮託書の中には神書として扱われるものも存在していたという。

続いて、吉田兼俱による「過去の改竄」について説明がされた。兼俱は斎場所の由緒や

論旨を捏造し、また吉田家に伝えられていた「八雲神詠」の秘伝を定家から兼直に伝えられたものとして秘伝化した。さらに日蓮宗諸寺院に対し「兼益記」を著し、三十番神信仰は兼益が日蓮に伝えたものであると主張したところ日蓮宗はこれを受容するなど、日蓮宗の神道化には吉田家が大きく寄与しているという。こうした兼俱による改竄行為は中世神道書のもつ偽書としての性格を受け継いでいるものであると結論づけられた。

次に、近世における中世神道批判の実態について説明がされた。近世は林羅山が仏家神道を批判し、また吉見幸和や天野信景などにより吉田神道批判も展開された。一方で幸和は伊勢神道に対しても文献学的な批判を加えており、羅山をはじめ伊勢神道書に基づいて中世神道を批判していた儒家神道家のアイデンティティを揺るがす事態にもつながったという。

続いて、近世における諸家神道説の形成について説明がされた。当時、正親町公通が卜部、橘、忌部などの諸家に神道説が伝来していると言及し、羅山が理当心地神道を大江氏に伝わる神道として位置づけるなど、近世においては様々な家の神道が「中世神道」の名のもとに出現したことが示された。そして山崎闇斎は、それら諸家の神道を統合したものとして垂加神道を構想したという。また、『神代巻口訣』を含め忌部氏秘伝の神道は忌部氏を名乗る広田担斎により盛んに唱えられていたことも紹介された。闇斎は石出帯刀という人物より忌部の秘伝を伝授されたが、帯刀はこの担斎から神道の伝授を受けていたとい

う。さらに『神代巻口訣』の秘伝という形式を持つ『色弗口訣』という写本は忌部流の根本伝承のひとつとして組み込まれていった。ところが、この『色弗口訣』を写したという今出河文斎は、大和の神社の縁起を多数作成している偽書制作者として知られており、本書は「新たな」中世神道書として成立したものであるという。また椿井政隆という人物も近畿各地の地図や縁起を作成しており、彼らによって地域の人びとの期待に沿う形でその地の失われた過去が創造されていったという。こうした「過去の創造」という営みは近世において活発におこなわれるようになり、それは近世諸家神道の叢生と密接に関係していると結論づけられた。

最後に伊藤氏の今後の課題として、中世と近世とをつなぐ偽書の系譜の検討が挙げられた。すなわち、中世の偽書が奥書や著者を捏造する程度であるのに対し、近世の偽書は文献学の発展に沿う形で内容がより精巧になっているという内容の差異はあるものの、中世偽書研究においては中世偽書の性格を積極的に評価したうえで分析しており、その方法は近世の偽書研究においても応用可能であった。

伊藤氏の発表後、齋藤公太氏により、本居宣長の産巢日神の解釈と岡田正利の造化三神の解釈が類似しており、その正利の解釈の根拠が『神代巻口訣』であることから、近世の諸家神道と国学とに密接なつながりがある可能性が示唆された。また松本久史氏は、荷田春満が著した『稻荷社由緒注進状』において、秦氏ではなく荷田氏の祖である荷田殷が稲荷山に奉斎したのが稲荷社のはじまりとする説を展開していることを紹介し、偽書制作と国学の発展との関連を指摘した。

その後は質疑応答の時間が設けられ、参加者より多数の質問が寄せられた。まず、仮託が主である中世神道において高度な文献捏造をおこなった吉田兼俱の位置づけについて質

問がされ、伊藤氏はこれに対し、兼俱は宮廷人でありまた文献を管理する家の人間であることから、同じく文献を扱う官吏を欺く必要があったとし、それが近世の偽書制作のスタンダードになっていったと回答した。次に、偽書制作の意識に関する中世と近世との差について、中世は偽書制作の目的や方向は分散・並存していたが、近世になると各藩にとって地域の歴史と中央、すなわち正当なものの歴史を結びつけることが重要であると考えられたため、記紀や勅撰和歌集などを中心に据えて偽書制作が行われるようになったと回答した。続いて、偽書制作の意識の差と識字層や階層の差との関連について、近世では出版により広い階層が『日本書紀』を受容可能になったことで秘伝・口伝が否定されざるを得ない状況が発生したと回答した。その一方で、書物に記されていない歴史についても郷土意識や記紀と直結されつつその関心が醸成されていったという。また近世に橘や忌部などの諸家神道が出てきた背景については「家」の意識が根底にあるとし、吉田家は自身の神道説をト部家に代々伝わるものであると主張することでその権威を保証しており、諸家もこれに倣って古代氏族に連なるという点で自身の神道説の正統性を確保するようになったと回答した。さらに、桜井徳太郎によるケガレの語源説（気・枯れ）について、その典拠が谷川士清にあることが質問者により紹介され、その士清説が何らかの偽書に影響を受けている可能性の有無について質問が寄せられたが、伊藤氏はそれに十分な回答ができないとしながらもその説が吉田家の解釈まで遡れるものなのか、或いは近世に新しく造られたものなのかについては検討する価値があると回答した。

(武田幸也・鈴木健多郎)

井上順孝名誉教授のアメリカ芸術科学アカデミーの会員選出について

2019年4月、井上順孝本学名誉教授（神道文化学部元教授、研究開発推進機構元機構長・日本文化研究所前所長）が、アメリカ芸術科学アカデミー（The American Academy of Arts and Sciences、以降AAASと略す）の「人文科学・芸術」部門の新たな国際名誉会員に選出された。



独立した研究センターであるAAASは、アメリカ独立戦争（アメリカ革命）中の1780年、ジョン・アダムズやジョン・ハンコックほか60名の学者によって設立された。excellence（卓越性）を称賛し、また、新しいアイデアを考え、国家と世界にとって重要な問題を扱い、さらには興味の促進、名誉、尊厳、自由の幸福、独立、そして高潔な人々に貢献し得る全ての芸術・科学を育むことを共に協力するため、人間のあらゆる分野のリーダーを招集することをその「Mission（使命）」としている。

同センターは上記の使命から、

- 公益の推進 ○民主主義の理念を支持
- 証拠と知識の使用向上
- 熟慮の上での議論の育み（談話の育成）
- 独立性の維持 ○多様性と包括性の包含
- 卓越性の慶祝

に価値を置く。こうした価値基準に則り、公共の利益の促進に向けた知識の発見と進歩、課題の調査と解決策の社会への提供のため、創立以来、13,000人以上のメンバーが選出されている。

（<https://www.amacad.org/about-academy>参照）

歴代メンバーには、ジョージ・ワシントン（米国初代大統領）やチャールズ・ダーウィン（博物学者）、アルバート・アインシュタイン（物理学者）ほか、米国内はもとより、国外の著名な政治家、科学者、思想家も名を連ねており、日本からは湯川秀樹（物理学者）や黒澤明（映画監督）などが選出されている。



その後、10月12日、井上名誉教授は米国マサチューセッツ州ケンブリッジで開催された同アカデミーの入会式に出席した。

なお、数ある歴代メンバーのうち、井上名誉教授と同じReligion scholar（宗教学者）としてのメンバーは僅か29人、日本人の宗教学者は井上名誉教授のみであり、日本の人文科学研究にとっても大きな出来事といえる。

（<https://www.amacad.org/members/book>参照）

（吉永博彰）

Kokugakuin Japan Studies の創刊

日本文化研究所（以下、研究所と記す）では、新たにオンラインによる英文ジャーナル *Kokugakuin Japan Studies*（略称KJS）を創刊するに至った。以下、本誌の概要を紹介する。

1、本誌の刊行目的と掲載対象

明治15（1882）年の皇典講究所の創立以来、本学は着実に貴重な学術資産を蓄積してきた。一方で、昨今の情報化社会に於ける研究状況としては電子化・オンライン化及びグローバル化の流れが著しく進んでおり、時代の趨勢に対応し、本学の研究蓄積、特に近年の成果を広く海外に向けて発信して、その周知と利用の促進を目指すところに、本誌刊行の主たる目的がある。

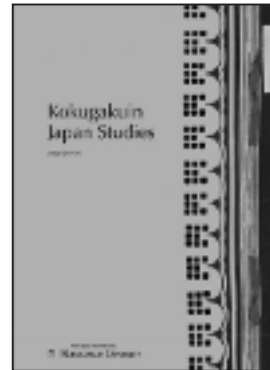
本学の研究成果と学術資産の公開・発信を期する観点から、主として近年本学から刊行された学術論文を数点英訳して掲載することとした。掲載論文は、広く日本文化研究に関するものとし、各号テーマを定め、テーマに適った論文を後述の編集委員会にて協議して選定する形とした。

2、KJSの編集と公開方法

KJSの編集・刊行に当たって、まず学内組織として編集委員会を設置し、関係事項の協議や掲載論文の選定などを行った。これに関する事務、また実際の編集などの実務については、日本文化研究所が担当して進める。

本誌はオンラインジャーナルにつき、印刷・製本は行わず、PDFを本学HPの研究所の刊行物一覧に於いて公開している：

<https://www.kokugakuin.ac.jp/research/>



oard/ijcc/ijcc-publications/kjs-01-202002

KJS創刊号（vol.1）のテーマについては、“Interrogating the Boundaries of Japanese Culture”（日本文化の境界を問う）とし、以下の3論文を掲載した。

- TANIGUCHI Masahiro “The Kojiki’s Worldview: Entangled Worlds of Gods and Humans”（谷口雅博「『古事記』の世界認識—交錯する神の世界と人の世界—」『東アジア文化研究』2号、2017年2月、1-15頁の英訳。David Weiss訳。）
- HANABE Hideo “On the Folktale *An Ox in the Bride’s Carriage*: Classical Tellings and Worldwide Comparisons”（花部英雄「昔話「嫁の輿に牛」の研究—古典および世界との比較—」『國學院雑誌』120巻3号、2019年3月、19-32頁の英訳。Dylan Luers Toda訳。）
- ISHIKAWA Norio “The Origins of Shimao Toshio’s “Japanesia” Ideas”（石川則夫「島尾敏雄の「ヤポネシア」論—その起源へ」『國學院雑誌』118巻1号、2017年1月、67-84頁の英訳。Dylan Luers Toda訳。）（吉永博彰）

Religious Cultures in Asia : Mutual Transformations through Multiple Modernities 刊行

2018年度に催行した国際研究フォーラム *Religious Cultures in Asia : Mutual Transformations through Multiple Modernities* (アジアにおける宗教文化: 複数のモダニティを通じた相互変容) の報告書を刊行したので報告する。

もともとのフォーラムは2018年10月20日に開催したもので、ラインハルト・ツェルナー教授(ボン大学)の基調講演“Eejanaika and Religious Modernity in Japan”(ええじゃないかと日本の宗教的モダニティ)の後、全4セッション、計11本の発表が英語で行われた。

本報告書には、11本の発表のうち、3本の要旨と8本の論文を収録した。以下に目次を記す。(所属は刊行当時のもの)。

MIURA Takashi (University of Arizona, USA) “The Vision of Asia in Ōmoto’s Ofudesaki” *abstract

HUANG Yueh-Po (Academia Sinica, Taiwan) “The Inculturation of Tenrikyo in Postwar Taiwan” *abstract

David WEISS (Rikkyo University, Japan) “Founding Myths of the Japanese State: The Changing Perception of China and its Influence on Early Modern Japanese Identity”

SAITO Kota (Kokugakuin University, Japan) “The Transfiguration of Karagokoro: the Reception of the Mito School Thought by National Learning in the Meiji Period” *abstract

NISHIDA Shoichi (JSPS Research Fellow, Japan) “Kakei Katsuhiko and his Manchurian Imprint”

TAKASE Kohei (University of Tokyo, JSPS Research Fellow, Japan) “Monuments to Worship and Warfare: The Intricate Relationship between Religions and Modernities in Japanese Monuments”

Mateja ZABJEK (University of Tsukuba) “Reconsidering the Relationship between Japanese Martial arts and Religion: Case Study of Mt. Mitsumine and Kyokushin Karate”

NGUYEN Thu Hang (VNU University of Social Sciences and Humanities, Vietnam) and LUU Thi Thu Thuy (Institute of Social Sciences Information, Vietnam) “Comparison of the Worship of the Tu Di Gong between Japan and Vietnam”

ABE Satoshi (Nagasaki University / Kobe University, Japan) “Islamic Debates on the Environment: An Examination of Religious Rationales in Contemporary Iran”

NG Ka Shing (Nagasaki University, Japan) “When Japanese Buddhism and Chinese Folk Religion Meet in Hong Kong: Representation and Interpretation of Soka Gakkai in the Chinese Settings”

MOON Byeong-June (Seoul National University, South Korea) “Democratization of Science and Technology via Religion?: The Case of Won Buddhism and its Historical Periodization”

今後、若手研究者が研究成果を英語で発信することを促す企画を行っていきたい。

(星野靖二)

日本文化研究所公式ウェブサイトおよびShinto Portal等の開設について

令和元年7月、國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所では、日本語による公式ウェブサイトおよび神道に関する英語のポータルサイト（以降、Shinto Portalと表記）を開設した。

公式ウェブサイト・Shinto Portalは、ともに日本文化研究所の研究成果を対外的に発信していくために構築されたもので、本学のデジタル・ミュージアム（以降、DM）と連携して展開していく。

○日本文化研究所公式ウェブサイト

【<https://www2.kokugakuin.ac.jp/oardijcc/>】

既に大学HP上に日本文化研究所に関する情報〔概要、事業・活動、成果公開（DMほか）、刊行物〕や、その催事・刊行物についての情報を掲示しているが、一覧性が弱く、またアーカイブ的な機能も十分ではないといった問題があった。

そこで大学HPの日本文化研究所に関する諸情報を補完し、かつこれとDMを有機的に関連させ、総体として一層の周知と利用促進を図るため、新たに公式ウェブサイトを設計・構築し、公開した。

新公式ウェブサイトでは、旧日本文化研究所以来のコンテンツを含めて統合的に集積したアーカイブ的な機能を充実させ、またこれに催事・刊行物の情報を合わせて、訪問者に情報を一覧的に提示することに努めている。

加えて、公式ウェブサイトでは同年に運用開始した日本文化研究所公式Twitter (@oardijcc)、Facebook (<https://www.facebook.com/oardijcc>) と連携し、研究所関

連のニュースに加えて、デジタル・ミュージアム内の各データベースの紹介などをも行い、Facebookとともに、日本文化研究所だけでなく、DM全体、また本学と研究開発推進機構の研究成果についての情報発信を行っている。



Shinto PortalのHOME画面

○Shinto Portal

【<https://www2.kokugakuin.ac.jp/e-shinto/>】

Shinto Portalは、神道について学びたいと考える非日本語使用者を念頭に置いて、神道についての信頼に足る情報をまず英語で発信することを主眼として構築・公開された。

日本文化研究所は、これまで神道に関する英語コンテンツを作成・蓄積してきており、それらをDMやその他のウェブサイトで公開してきたが、やはり一覧性が弱いという問題があった。Shinto Portalは、そうした英語コンテンツに一元的にアクセス可能なポータルサイトとして構築され、DM上の英語で利用できる諸データベースや、過去の英語刊行物などへのリンクを一覧的に提供している。非日本語使用者の学習ニーズに加えて、神道を英語で説明する際の一助にもなることを目指している。

（吉永博彰）

国学研究会・社家文書研究会

日本文化研究所では研究事業「[国学研究プラットフォーム]」の展開と国学史像の再構築の一環として、2019年度も国学研究会を開催した。これは研究所の神道・国学部門が長年行ってきた研究会を継続するものであると同時に、上記研究事業の三本の柱である「近世・近代国学に関する研究史・学説史の整理と国学史像の再構築」、「国学・神道関係人物データベースの拡充」、「国学研究ネットワークの拡張」のうち、第三の研究ネットワークの拡大も兼ねて開催されるものである。

具体的には月一回程度、学内外から神道・国学などを研究する若手研究者が集まり、各自の最新の研究について発表することを基本的な内容とする。本年度開催された研究会の日時と発表者、発表題目は以下の通りである。なお、会場はいずれも國學院大學AMC棟5階プロジェクトルーム2であった。

- ① 2019年5月23日18:30~20:00
齋藤公太『「神国」の正統論』（ぺりかん社）の書評会
- ② 2019年5月28日18:30~20:00
権東祐（韓国・靈山禅学大学校）「教派神道の朝鮮布教からみる近代神道の様相—神道修成派・黒住教・神宮教を事例に一」
- ③ 2019年7月18日18:30~20:00
鈴木健多郎（國學院大學大学院）「内山真竜と本居宣長の交流—『古事記謡歌註』研究のために—」

④ 2019年12月12日18:30~20:00
相澤みのり（佛教大学大学院）「明治初年の平田家—平田胤雄の動向と継承—」

⑤ 2020年1月23日18:30~20:00
国学概説書内容原案の検討
齋藤公太（國學院大學研究開発推進機構）「第2章 元禄期 契沖、光圀」
間芝志保（同上）「第13章 「新国学」の提唱」

以上のように本年度は計5回の国学研究会を開催した。昨年度と同様、「国学研究のネットワークの拡張」の役割を分担するものとして「国学研究プラットフォーム公開レクチャー」も計3回開催したため、研究会の回数自体は減少したが、内容面では多岐にわたる充実したものとなった。本研究事業は新たな国学史像を構築し、国学概説書によりそれを社会に向けて発信することを第一の目標に掲げているが、第5回の研究会のように、国学研究会を通して国学史像の一部と概説書の内容案について協議することもできた。

また、これまで国学研究会と並行して、国学・神道関係史料の講読を目的とする社家文書研究会も開催してきた。本年度は2019年10月3日18:30~20:00に、國學院大學神道文化学部が所蔵する大武秀斎関連資料の調査と整理を行った。秀斎は禊教にも関与した明治期の平田派国学者であり、調査の成果は国学史像の再構築にも生かされることになるだろう。

（武田幸也）

2019年度のCERCとの連携事業について

日本文化研究所では宗教文化教育推進センター（通称CERC）との連携により、宗教文化教育推進のための教材作成に取り組んでいる。以下では、2019年度の教材開発の成果とCERCの活動について報告する。

（1）宗教文化教育推進のための教材作成について

教材開発に関して、CERCとの共同で宗教文化を学ぶための以下のオンライン教材を既に公開している。①「宗教文化を学ぶための基本書案内」②「世界遺産と宗教文化」③「映画と宗教文化」④「博物館と宗教文化」⑤「宗教文化に関係する基本用語クイズ」

2019年度は、特に②「世界遺産と宗教文化」③「映画と宗教文化」④「博物館と宗教文化」の内容の拡充を図り、データベースへの新規項目の追加のほか、重要な項目に関する解説を執筆、公開した。

②「世界遺産と宗教文化」の教材では、「エヴォラ歴史地区」、「スクーグシュルコゴーデン」、「アントニ・ガウディの作品群」、「百舌鳥・古市古墳群」などのページを新規に追加した。③「映画と宗教文化」の教材では、「アンジェリカの微笑み」、「ハッピーエンドの選び方」、「ボクは坊さん。」、「PK」、「インフェルノ」、「奇跡の教室—受け継ぐ者たちへ—」、「ソング・オブ・ザ・シー 海のうた」、「母—小林多喜二の母の物語」など近年公開された映画のなかで宗教文化と関連するものを新規に掲載し、情報を充実させた。④「博物館と宗教文化」の教材では、ホームページの移行にともなうレイアウトの修正を中心に、情報の追記・

整理を行った。①、⑤についても情報収集を継続して行っており、次年度以降も教材の充実を図る。さらに②と④についてはスマートフォン向けの地図アプリ「ロケスマ」と連携して、表示される地図上のピンをタップすると公開されている教材へとリンクされるシステムとなっている。「ロケスマ」をスマートフォンにダウンロードしたのちに、トップ画面→「コラボ・イベントマップ」→「宗教文化教育推進センター」と進み、該当マップをダウンロードすることで、使用することができる。

（2）CERCの活動について

2-1. 認定試験の実施

CERCは2019年度、6月16日（日）に第16回、11月17日（日）に第17回の宗教文化士認定試験を行った。第16回認定試験は、東北大学・國學院大學・関西学院大学・龍谷大学・天理大学・九州大学の6会場で行われ、受験者は17名、合格者は12名であった。続く第17回認定試験は、國學院大學と関西大学の2ヶ所で行われ、受験者は24名、合格者は19名であった。第1回試験からこれまでに372名の宗教文化士が誕生している。

2-2. 「宗教文化士の集い」の開催

宗教文化士へのアフターケアとして、CERCでは年に一度「宗教文化士の集い」を東京と関西の2ヶ所で行っている。2019年度は「第4回宗教文化士の集い」が10月19日（土）に東京、10月26日（土）に関西で行われた。

東京開催の集いでは、矢野秀武氏（駒澤大

学教授)の案内によるタイ国タンマガーイ寺院東京本院の訪問、東洋文庫ミュージアムの見学、企画展「東洋文庫の北斎展」にちなむ山中弘氏(筑波大学名誉教授)による講演「山岳信仰と富士講について」が行われた。講演会後には参加者たちの懇親の場が設けられた。

関西開催の集いでは、天理大学にて山中弘氏による講演「現代社会と宗教の変容」のうち、同大学講師の澤井治郎氏の案内のもと、神殿の礼拝場や教祖殿など天理教教団施設の見学が行われた。その後天理大学にて懇談会が開かれた。

東京では15名、関西では11名の宗教文化士(上級宗教文化士を含む)の参加があった。「宗教文化士の集い」は宗教文化士同士の交流を促すだけでなく、資格取得者の実際の声から、資格の役割や必要なアフターケアについて考えるための機会ともなっている。

2-3. 更新(上級宗教文化士認定)について

宗教文化士資格は取得から5年間の有効期限が設けられており、本年度は第6回・第7回認定試験の合格者を対象とした更新の受け付けが行われた。更新のためには、(a) e-learningによる学習、(b) CERC指定の講演会などの聴講とレポート提出、(c) メルマガの記事をもとにしたレポートの提出、(d) 体験に基づくレポートの提出、の4種から1つまたは複数を選び、計3ポイントが認められることが必要となる。更新が認められると、終身資格の「上級宗教文化士」が与えられる。

第6回認定試験での資格取得者は27名で、そのうち11名が更新のための課題を提出し、更新が認められて上級宗教文化士となった。第7回認定試験については16名の資格取得者のうち8名が上級宗教文化士に認定された。本年度末までに計93名の上級宗教文化士が誕生している。

2-4. 宗教文化士および上級宗教文化士へのサポートについて

CERCでは、宗教文化士の資格取得後も宗教文化に関する情報を得るためのサポートの一環として、「CERCメルマガ」を年に4回、特別号を年に2回発行している。メルマガでは、宗教文化に関わる最新のニュースを解説とともに紹介。また、講演会やシンポジウムの情報も掲載されている。2019年度末時点で、31号まで発行された。特別号は、9月に第3号、2020年3月に第4号が配信された。特別号には、宗教文化教育推進センターの運営委員によるリレーエッセイ、宗教文化に関わる新刊の紹介、宗教文化士の体験レポート、宗教文化士の集いの報告が掲載されており、さらに充実した情報提供が行えるようになった。

また、宗教文化士へのサポートとして、住所やメールアドレスの変更を連絡するためのフォームも提供しており、連絡先の円滑な反映と、資格更新の際の連絡や、メルマガの配信の際の不達の減少につながっている。

2-5. 宗教文化士認定試験の受験資格の拡充について

さらなる宗教文化教育の発展を目的とし、新たにe-learningの受講および課題の提出による受験資格の拡充を試みることに決定され、準備が行われている。大学生の受験資格を「e-learningコース」と「大学での単位履修コース」の2つ(名称は仮)にわけること、宗教文化に関する授業を設置していない学生でも受験資格を得ることが可能となる予定である。また、従来の教員・報道での受験枠を廃止し、e-learningコースに統合することで、社会人の受験枠も拡張され、受験者のさらなる増加が見込まれる。

(小高絢子・村上晶)

出張報告

「研究事業『國學院大學 国学研究プラットフォーム』の展開と国学史像の再構築」による史料調査

2019年度の日本文化研究所の研究事業「『國學院大學 国学研究プラットフォーム』の展開と国学史像の再構築」の一環として、2020年2月4日から翌5日にかけて、岐阜県各務原市の内藤記念くすり博物館にて資料調査を行った。同館は薬と医療を専門とする博物館だが、中野康章の旧蔵書を収めた「大同薬室文庫」を所蔵する。中野が皇朝古医道を修めた神職・医師であったために、同文庫には賀茂真淵や本居宣長、平田篤胤の書簡など、神道・国学に関する貴重な資料が多数収蔵されている。しかし同文庫に関する調査は過去の日本文化研究所の事業でも行っていない。今回の調査により近世・近代の国学者の学問営為や人的ネットワークに関して多くの発見が得られると予想される。

そのような調査成果は、国学に関する学説史・研究史の再検討と新たな国学史像の構築を目標とし、また「国学・神道関係人物研究情報データベース」を作成している上記研究事業にとって資するものと予想し、今回の調査を企画した。これまであまり調査が行われていない同文庫の資料状況を把握することで、今後の調査につなげることも今回の目的であった。

なお、同文庫の目録としては、古典籍を中心とする『大同薬室文庫蔵書目録』（内藤記念くすり博物館、2001年）と、書簡等の史料を中心とする『大同薬室文庫資料目録』（内藤記念くすり博物館、2005年）という二種類の目録が刊行されている。

今回の調査は齋藤公太（研究開発推進機構日本文化研究所助教）、小田真裕（同共同研

究員）、鈴木健多郎（同臨時雇員）の計3名により行われた。

調査を行った主要な資料の概要は以下の通りである。

・「幽顕問答鈔」（47316）

筑前の平田派国学者・宮崎大門が憑霊との対話を記した『幽顕問答鈔』（天保10・11年成立）の写本。同書の諸本分析の対象となる資料。

・「仙境異聞略記」（46291）、「仙境異聞附録」（46292）

平田篤胤の著作『仙境異聞』（文政5年刊）の写本。本莊宗武の旧蔵書か。「付録」の識語からは吉岡徳明の所蔵本を風祭保嘉が書写したものであることがわかる。寅吉の言葉を明治期の状況に即して再解釈した徳明の注釈が本文中に組み込まれている。

・「仙童寅吉物語 一～二之巻」（47855）

吉岡徳明旧蔵の『仙境異聞』、もしくはその写本か。風祭保嘉が吉岡旧蔵書をふまえて考証しているようにも読める。明治初年における、「仙境異聞」の写本形成過程（伝播）をうかがわせる資料といえる。

・「皇国之大道 地」（49021）

神拝・祭祀の次第について記した著作。挿絵が多く、近代に成立したものか。

・橘家神道関係

大同薬室文庫には橘家神道関係資料が多数

所蔵されている。特に「橘家柏手之伝」(48766)、「橘家清祓式」(48768)、「橘家祈祷加持伝」(48769)、「橘家五行祭式」(48771)、「橘家山材祭式」(48772)、「橘家宇賀祭式・船魂祭式」(48773)といった資料は、「御霊大宮社」に仕えていたという玉木正誠が書写・旧蔵したものであることが判明した。正誠はその名からして玉木正英の類縁と推測されるが、詳細不明。「柏手之伝」や「山材祭式」は内容的にも珍しく、橘家神道の展開を知る上で貴重な資料である。

・堀秀成関係

大同薬室文庫には他に所蔵がない、もしくはほとんど見られない堀秀成の著作の写本が収められている。「仮字比例」(40311)、「あして」(44256)、「歌のすがたの論」(44268)などである。秀成の門人・水野秋彦が書写したものか。いずれも秀成の歌論・国語研究の内実を知る上で有意義な資料である。

・「皇国伝」(47076)

皇国の成り立ちと井上正鐵の教えとの関係を説いた著作。正鐵の著作の写本か。禊教の源流である正鐵と国学との関係をうかがわせる資料。

・「石川依平歌集」(49177)

本居春庭、栗田土満の門人だった石川依平の歌集の写本。依平の歌72首を収める。

・「唯一宗源神道神儒仏三国異弁」(48343)

神道・儒教・仏教の差異について論じる内容。近世の神道講談の台本か。

・「北島親房公」(47527)

北島親房に関する資料の抜き書きをまとめたもの。「北野神社」と印字された原稿を使用。明治期の成立か。久米幹文や小杉楹邨の文章の他、親房を題とする歌会の記録も収録。千

家尊孫、八田知紀、佐々木弘綱、佐々木信綱ら、著名な国学者・歌人の名が見られる。明治期の国学と北島親房像の受容との関係をうかがい知ることのできる資料である。

今回の調査では適宜ノートを取りつつ以上の資料の内容を調査した。これらの調査成果は、今後国学に関する学説史・研究史の再検討と新たな国学史像の構築を行い、また「国学・神道関係人物研究情報データベース」の内容を拡充していく上で有益な情報となるものである。

(武田幸也)

出張報告

「35th BIENNIAL ISSR CONFERENCE BARCELONA, 2019 (国際宗教社会学会バルセロナ大会)」

International Society for the Sociology of Religion (ISSR、国際宗教社会学会)は、2年ごとに開催されるヨーロッパを中心とする国際的な宗教社会学の学会である。

第35回目となる今回の大会は、スペインのバルセロナにあるバルセロナ現代文化センターで7月9日から12日まで開催された。大会のテーマはThe Politics of Religion and Spiritualityであった。



写真は、オープニングパネルの様子

本大会では、科研「日本宗教教育の国際的プラットフォーム構築のための総合的研究」(基盤研究B 研究代表者:平藤喜久子)における研究成果の発表を行うため、日本文化研究所の客員教授でもあり、研究分担者でもある櫻井義秀・北海道大学教授が企画するテーマセッション、Well-being and Well-dying in medicalized longevity society: How do our religious culture consider the dignity of life and death?(7月9日14時30~16時)で、Young People's view of death and life in modern Japanと題する発表を行った。本発表は、國學院大學日本文化研究所と「宗教と社会」学会が共同で行った全12回の学生宗教意識調

査の結果をもとにしている。本調査は、毎年4000名程度の学生を対象にして行われたアンケート調査で、宗教への関心の度合いや両親の信仰の有無、また神や靈魂、仏の存在を信じるか、占いを信じるか、さらにさまざまな社会問題への関心の度合いなども調査したものである。そのなかに前世についてどう思うか、死後の世界の存在を信じるか、など、死生観に関わる問いについても調査を行っている。これらの調査をもとにし、学生が死についてどう考えているかを報告し、現代日本の学生の死後観とポップカルチャーとの関係を考察した。とくに注目したのは、前世や生まれ変わりについて信じている割合の高さである。日本に輪廻転生という概念が入ってくるのは、仏教をとおしてのことである。もともとはヴェーダの宗教に起源を有するものである。しかし、若者たちが輪廻転生を知るのは仏教からではない。おそらくポップカルチャーの存在が大きいと思われる。本発表では1980年代にヒットした「幻魔大戦」(小説、マンガ、映画)や『ぼくの地球を守って』(マンガ)に注目し、これらの影響と最近の映画「君の名は」の主題歌「前前世」なども併せて分析を試みた。ポップカルチャーと死生観について幅広く質問も出て、ディスカッションをすることができた。

(平藤喜久子)

右:サグラダファミリア



出張報告

「International Workshop “The Idea of Antiquity in Modern Japanese Religious Culture”」

2019年11月1日に、ハーバード大学ライシャワー日本研究所において行われた国際ワークショップ「The Idea of Antiquity in Modern Japanese Religious Culture 近現代日本の宗教文化と「古代」」に参加したので報告する。なお、本ワークショップは日本文化研究所と、本学古事記学センター、ハーバード大学ライシャワー日本研究所の共催として開催されたもので、ハーバード大学側の調整についてはヘレン・ハーデカ先生にご尽力頂いた。

ワークショップの趣旨としては、近現代の日本の宗教文化における「古代」イメージを問うというものであり、近代化が推し進められつつある日本という場において、どのような「古代」像が想像・創造されていったのかに焦点を合わせた議論が行われた。以下に四名の発題者とその題目、また指定討論者を挙げる。

- ・平藤喜久子（日本文化研究所所長）「神の姿にみる古代と現代 The Idea of Antiquity and Modernity in Depiction of Deities」。指定討論者：ジョリオン・トーマス Jolyon THOMAS（ペンシルベニア大学）
- ・遠藤潤（本学教授、日本文化研究所兼任教授）「平田国学における古代の神のリアリティー—近代に向かって— The Reality of Ancient Kami in Hirata Kokugaku: Toward Modern Japan」。指定討論者：アン・ウォルソール Anne WALTHALL（カリフォルニア大学アーバイン校）
- ・星野靖二「日本宗教史の叙述と「古代」—宗教学の展開との関連において The Narrative of the History of Japanese Religions and ‘The Ancient’ in the

Development of Religious Studies」。指定討論者：林かおる（テキサス州立大学、ライシャワー日本研究所ポスドク研究員）

・齊藤智朗（本学教授）「造化三神をめぐる神学の構造と展開 Theological Frame and Evolutions in the Conception of the Three Creator Deities」。指定討論者：トレント・マクシー Trent MAXEY（アマースト大学）
平藤所長は、神の姿がどのように描かれてきたのかを時代を追って確認し、特に近代において古墳時代風に「古代」の神を描くことが行われたことを指摘した上で、「古代」が新たに想像され続けてきていることについて論じた。

遠藤教授は、平田篤胤においては世界を生成した神代の神々が、今なお世界に関わり続けているとされており、その「古代」のリアリティーとの関連において平田の奇談に対する関心を捉えることができた。

星野は、姉崎正治の日本宗教史の叙述において、同時代の古代史研究があまり参照されておらず、「古代」が非歴史的なものとして叙述され、そこに日本人の精神性の本質が示されているとされていたことを指摘した。

齊藤教授は、大教宣布運動において、「古代」を宗教的に読み替える形で、近世の平田国学をベースとした造化三神を中心とした統一的な神道神学が組み上げられたことについて述べ、しかし祭神論争を経て、それが否定されたことについて述べた。

全体を通して、日本宗教に関心を持つ北米の大学院生、研究者の参加を得て、有益な議論を行うことができた。（星野靖二）

近代神道における「学」的实践の位置 —國學院大學を中心とする神道青年運動の展開過程を例に—

木村 悠之介

はじめに

(1) 近代神道における「言説」と「学問」

1907（明治40）年4月、東京勸業博覧会が開催された上野公園は、様々な宗教家による布教活動の場にもなった。『東京朝日新聞』の記事¹から、神道家の様子を見てみよう。

博覧会の人出を幸ひ小石川小日向台町の神風会中央倶楽部員は神道鼓吹の為「猷神武軍急先鋒」と大書したる旗を押立て部員の重なるは法官然たる制帽を冠り黒木綿の紋付に小倉袴、檜の木の三尺棒を提げて我邦は天孫降臨云々とか大和魂の根本は神道なりとか絶叫して耶蘇仏教等の異端を責めつゝ、布教し居れり、

東京勸業博覧会で「神道鼓吹」を行っていた神風会は、機関紙誌『神風』を中心に出版・演説活動を拡大しつつあった神道系の団体であり、宮井鐘次郎という人物が会長だった。「猷神武軍急先鋒」とは独特な表現だが、神風会が同時期の救世軍による「我大日本帝国をエースキリストに捧ぐ」という旗を問題視していた²ように、キリスト教への対抗意識によるものである可能性が考えられる。ここでは、神風会が行った「天幕伝道」が、キリスト教（特に救世軍）や仏教に対抗するための「絶叫」的な実践だったことを押さえておけばよい。

この神風会による布教活動をめぐっては、当初からいくつかの異なる反応が存在していた。

まず、救世軍の動向を詳細に報じていた『東京二六新聞』は、博覧会において神道家が仏教やキリスト教に対抗して大挙伝道を行おうとするのは、神道が本来「不_レ須_二言説_一之教」であることを忘れた「斯道の萎靡」ではないか、という批評を加えた。同紙に対しては、宗教雑誌『時代宗教』に投稿した匿名の神道家が、「神随_二言論_一せぬ」というのは「信仰の真面目は言説文字の及ぶ所でなく」「自然の大法」を扱うことを表しており、天幕伝道はその上で人々を教導するための「方便」、他教への「正当防衛」であると反論している³。神風会の伝道は、仏教・キリスト教に対するやむを得ない「言挙げ」として捉えられていたのだ。

両者の論争が神道界の外と中における対立という側面を有していた一方、神道界内部でも好意的な評価ばかりだったわけではない。同じ1907（明治40）年の6月、神宮皇學館の教授に就任した廣池千九郎は、学生たちに対する「新任の辞」で次のように述べたという⁴。

自分は東京博覧会を見るに当たり、各宗教家の熱心なる大道演説を聞いた。中に神道家があつて熱心にこの麗しき忠君・愛国・敬神の主義を説いて居るのを見た。しかし彼らは悲しいかな力量がない。仏教には各宗ごとく大学がある。キリスト教にもある。神道にはこれがあるか、又神道家として大学を出たものがあるか、洋行したものがある

か。吾人はわが国のため悲しまざるを得ないのである。〔…〕ここにおいてか、自分は力量あるこの主義の執行者として諸子を推すのである。しからば力量はいかにして得べきか。畢竟するにこれは教育に待たねばならぬ。学問に因らねばならぬ。

要するに廣池は、博覧会で神道家が行っていた「大道演説」に「力量がない」ことを嘆き、仏教やキリスト教と比較しつつ、神道の学校において「諸子」すなわち学生たちが「教育」や「学問に因」り「力量」を得ていくべきだ、と主張している。実際、翌年には皇學館卒業生向けの講習会で「神道講義」を担当するとともに、学生間における「神道研究会」設立の動きを後援したのであった⁵。

1907（明治40）年の神風会をめぐることは、仏教・キリスト教との対抗関係において、神道が「言説」ないし「言論」としての天幕伝道を行うべきかどうかという論争に加え、廣池のように「大道演説」と「学問」とを区別する視点も存在していた。後者が特に表しているのは、神道界における「言挙げ」の全体に対し、「教育」「学問」なるものが有していたニュアンスの差異である⁶。それは、近代神道にとって「学」とは何だったのかという問題につながっていく。

（2）近代神道学史叙述の問題点と本稿の視座

近代における「神道学」の成立について、「言説」をキーワードに論じたのが磯前順一である。以下の記述には、その見解が端的に表れている⁷。

神社神道と皇室神道が道德や祭祀、教派神道が宗教と規定されたのに対し、神道学はそのいずれにも分類されることなく、それら神道の諸形態に理念的な位置づけをおこない、逸脱する側面に批判を加えるという特権的地位を獲得していった。かつてはこのような学的営為は神道を実践する一手段として、神道を構成する一要素にとどまっていた。近代では、神道を見出すための作業のほう肥大化し、神道そのものよりも神道学という思想の再編行為に大きな役割が与えられることになる。神道家に対して神道学者が独立的な地位を確保し、神道学者が神道家を指導する地位に就いたのは、まさに近代以降の特徴である。神道家ではなく、理念的な認識をつかさどる学者によって、神道が語り直される必要が生じたのだ。

こうして神道は、信仰という直接的な実践行為から、言説としての神道へと形を変え、近代という新たな時代のもとに蘇生していった。

ここでいう「言説」はフーコーの議論に拠っており、先ほどの「言説」^{コトアゲ}（言葉を以て説くこと）とは少し異なった意味内容を付されている概念である。すなわち、上記引用の直前においては、諸神道を「国家権力の象徴」たる天皇と結びつく形で構造的に把握し、その言説を統一することが必要になったと述べられている。確かに、神道学者が大学や学会といった制度的裏付けに拠りつつ、ある程度の特権的・指導的地位に就いたことは否めない。

しかしながら、神道における「思想の再編行為」や「理念的な認識」が神道家ではなく学者によって司られると言い切り、「神道学」と「言説としての神道」の区別を曖昧なものにしてしまうことには問題があるように思われる。近代において、「言説としての神道」つま

り「思想の再編行為」や「理念的な認識」が肥大化したとしても、それが必ずしも「学」という形態を取っていたとは限らず、いずれにせよ大学の学者のみに許された行為ではなかったはずだ。アカデミズムの特権性を指摘することは必要だとしても、当の歴史叙述が対象に特権を付与してしまうのは別問題ではないだろうか⁸。

むしろ、いかに神道学が「言説としての神道」の代表者たろうとしたとはいえ、その登場は早く見ても1900年代であり、まずは神道界が有した様々な言説の一つとして、神道学がどのような特質を有したのかを検討すべきである⁹。例えば、1890年代に「神道改革」を唱えた教派神道一派・実行教の雑誌には「絶叫の時代」という認識が見られる¹⁰が、言論の形態としての「絶叫」が演説という近代特有の行為に結びつくことを考え合わせるならば、「学」という名称や方法に必ずしも括られえない知の枠組みを想定でき、そこにおいて冒頭の神風会も捉えうる。神道学が「学」を名乗ることで持ちえた特権性についても、単に近世と対比するのではなく、そういったものと比較していく方がより有効な形で分析できるはずだ。

そして本稿ではさらに一段階深い位相まで問いを広げ、大学を中心に行われた「学的営為」が、様々な「信仰という直接的な実践行為」の一つとしてどのような位置にあったかを問うていく。上述のように磯前は、近世において「学的営為」は「神道を実践する一手段」ととどまっていたが、「学」が肥大化する近代はそうではない、と論じていた。しかし、「思想の再編成」や「理念的な認識」が肥大化することとは別に、「学」が神道そのものの「信仰」に関わる直接的・実践的な意味を何かしら有していた点には変わりがないように思われる。近代神道における実践（あるいは実践をめぐる言説）の中で、神道学を捉えてみたい。

こうした問題に答えるべく、本稿では「神道青年運動」という場を対象に設定する¹¹。近代の神道界においては大学を中心とする「青年」層の組織化が目指され、磯前が近代神道学の代表的な人物として扱った東京帝国大学神道研究室の田中義能よしとむにしても、國學院大學神道青年会や神道青年連盟協会といった団体で会長を務めていた。磯前は両団体に言及しつつも神道研究室における学生の不在を強調しており、学史の「裾野」への視点が不在であることを林淳から批判されている。すでに松本久史が、田中と「國學院大學神道青年会のかかわり等を含めた神職との関係」を課題として挙げていることからすれば、この神道青年運動こそ、神道学が有した裾野の最たる例として検討すべき価値を持っているように思われる¹²（ただし付言しておくならば、本稿の主題はあくまでも神道学の位置づけであり、神道青年運動への着目は「裾野」を代表する人々を対象を絞りこむための手段に過ぎないため、ここでは「青年」論自体を目的とはしない¹³）。

特に本稿では、神道青年連盟協会に結集した複数の大学の中でも最も活動期間が長く、また史料の残存状況もよい國學院大學の神道青年運動を主たる対象に据える。そこにおける実践内容が変化していく過程を通時的に分析することで、近代神道にとって「学的営為」が実践として占めていた位置の一端を明らかにしようである。

それに加えて、冒頭で博覧会における「絶叫」的な演説実践を取り上げた神風会にも何度か言及し、一つの参照軸としていきたい。神風会は、神道界の幅広い領域から担い手を得る画期的な団体であったのみならず、神道青年運動史上「最も活気ある雰囲気をつくつた」時期としても記憶されており、中でも救世軍排撃の大演説会が開かれた際には、國大や早大の学生が多く参加していたのである¹⁴。

さらに、神風会に関する議論で出てきていた「言挙げ」も本稿のキーワードになりうる。

本居宣長が「言挙せぬ国にはあれどもまがことのことあげこちたみ言挙すわは」と述べているように、神道界における「言挙げ」は、「言挙せぬ国」という本来性と、「^{まがこと}枉説」に対するやむを得ない「論弁」としての「言挙」、という二重の認識に基づく概念であった¹⁵。演説に関し「方便」「正当防衛」という語が出ていたように、「言挙げ」は必要性を認められてはいるものの、本質的な行為とは見做されない。様々に内実を変えながらしばしば用いられる「言挙げ」の語を見ていけば、その時々には何が本質的であり何が本質的でないと考えられているのかを確かめることが可能になるのではないだろうか。

1. 演説と体操から「学究」へ

(1) 神国青年会

國學院が「私立國學院大學」に改称したのと同じ1906（明治39）年の終わり、國大の学生たちが「神国青年会」を結成し、「仏教青年会、基督教青年会等に対抗した」とされる¹⁶。

実は、この団体の成立にも神風会が深く関わっていた。例えば、神国青年会設立首唱者の一人で、1908（明治41）年に國學院大學を卒業し、後年には皇典講究所や國大で講師にもなる中野佐柿について、1909（明治42）年の『神風』記者は以下のように述懐している¹⁷。

回顧すれば早や三年以前のこと三十九年の歳末であつた。羊羹色の紋付に頑丈な小倉の袴を脛もあらはに穿ち古ぼけたヅツクの鞆を肩にした頗る頑固らしい一青年が、上京したら必ず神風会を訪ひて宮井鐘次郎氏に面会せよと叔父に懇々勧告されたとして本会長に面会を求めた、自分は神職の子弟で常に斯道の衰頹して振はざるを嘆き殊に中学に在る間は学友に敬神の念ある者一人もなきを憤慨し、是非共大に斯道を講究して第二の国民たる青年学生の猛省を促がし日本魂の根柢を固めざるべからずてふ覚悟を以て上京し、折角國學院大學に入学してみれば豈測らんや茲にも気概ある者殆ど皆無であつて与に斯道の発展を図るに足る者の無いのは実に残念至極であると語つて切齒慷慨されたのが縁となつて、爾来本会と志を共にし上野公園に於ける天幕伝道に奮闘したことを始め斯道の為め大に貢献した〔…〕

ここからは、1907（明治40）年の東京勸業博覧会伝道では中野も「奮闘」し、その後も神風会に関与しつづけていたことが窺える。中野は他にも、同じく首唱者の一人である折口信夫とともに「木綿の黒紋付羽織に袴という颯爽たるいでたちで、夜になると久世山下や江戸川橋畔の広場などに立って大道演説を試み、また関西旅行の途次（折口は大阪出身）時として某駅で熱弁を揮ったこともあ」ったという（括弧内も原文に拠る）¹⁸。

別稿で詳述したように、神国青年会の主たる活動は國學院大學の教員を招いた懇話会であり、当時講師の一人だった田中義能の神道研究もここから本格的に開始されていく¹⁹のだが、懇話会の開催が1908（明治41）年までしか確認できないのに対し、中野や折口ら、神国青年会の会員は同時期に神風会の「雄弁会」にも参加していた²⁰。中野ら会員たちの実践は、むしろ演説の方と不可分なものとしてあったと言えよう。神風会の青年運動に早稲田など他大学の学生も参加する中で、國大生に限られていた神国青年会は発展的に解消されていったと思われる。

(2) 神道青年会①：高山時代・第一次田中時代

神道青年会の活動が見られなくなってから数年後の1911（明治44）年、國大では新たに神道青年会が設立された。「少し前にやはり同名の会があつたが僅かにして立消えてしまつたのでその轍を履みはせぬかと大分危まれた」と、（同名ではないがおそらく）神道青年会をも意識していたようである²¹。

設立にあたっては滝亀朝ら学部第21期生を中心としつつ神職教習科第3期生が補助に入り、1911（明治44）年11月、「吾人豈單純なる一学究となるを以て甘ぜんや乃ち微力を顧みずして奮て同志を糾合し以て神國の大道の宣明に努めんとす来らざるものは蓋し神國の青年に非ざるなり」、といった内容を含む「宣言書」が國大の「此処彼処の扉に貼付され」た。発会式には「二百余名」が集まったといい、皇典講究所國學院大學主事・高山昇が会長として戴かれた（1913〈大正2〉年には田中義能に代わっている）²²。創立主唱者の一人であった武田祐吉は次のように回想しており²³、「宣言書」は武田が書いたものと考えてよいだろう。

筆者の同級には神職の子弟が多く、同級生の死亡者の祭典を行つたりしたが、神道の会合が学校内に無いのは不備であるといふので、十人程の者が発起人となつて、神道青年会を創立した。筆者はその創立の檄文を頼まれて書いた。今はその要旨をも記憶しないが、何でも単に学究たるに甘んずる者ならんやとか云つた風の、元気のよいものであつたと思ふ。〔…〕この檄文は今残つてゐないが、当時の神風といふ雑誌にはこれを載せて、学校に対する軽い厭がらせが記し添へてあつた。

武田は『神風』による「学校に対する軽い厭がらせ」があつたと記憶している²⁴ものの、まだこの時期の神風会と「学校」の間に、さほど遠い距離があるわけではなかつた。1914（大正3）年の学内茶話会で「宮川神風会々長」が演説しているほか、幡掛正木や小笠原省三など、神道青年会と神風会の双方に出入りした者も見受けられる²⁵。

むしろ両団体は、活動の雰囲気において近似する部分があつたと言つてよい。

まず、単なる「学究」に甘んじないという代わりに行われていたのが演説であり、実際の活動では例えば、1912（明治45）年2月の第3回総会において、神職養成部生・間部林次郎による「転轍手（ポイントメン）清水政之助氏の自殺」に関する演説が「絶叫して結」んだと記録されている。多くの学生が登壇した1915（大正4）年の第13回集會では「裂帛のさけび」という題目があつたほか、「破蒙」「愛国心より逆る宗教」「仏教の無常觀の及ぼせる影響」など、他宗教への弁駁演説や破邪演説と分類しうる演題も少なくない（なお、この頃は100～160名が来会していた）²⁶。

さらに、「進軍予習の爲め来月中旬をトし本校大講堂に講演会を開き軍容を整へんと欲す」といったような、軍隊になぞらえた表現²⁷も共通する。『神風』紙上では伝道に際して「開戦」などの表現がしばしば用いられ、1914（大正3）年には女性組織として「娘子軍」が結成された。同年には、神風会にも関わった出口王仁三郎の大本が「直霊軍」を結成しているほか、仏教界でも「大日本仏教濟世軍」の活動が始まっていた²⁸。救世軍を筆頭とする同時代の宗教界で軍隊的な表現が共有されるなか、神道青年会には「キリスト」或は仏教と論弁を戦はすことが望まれていた²⁹のだった（「予習」にとどまつたようだが）。

一方、1916（大正5）年頃には、井上哲次郎・上田万年・寛克彦・遠藤隆吉といった「諸

名士」を「立派な講演者」として招聘することに重点が置かれ、「神道的思想」を「全校生徒」に広めることが目指されるようになった³⁰。ここで名前の挙がった「諸名士」はいずれも、後の1926（大正15）年に神道学会が設立された際には役員となる人々であり、中でも遠藤は1917（大正6）年に「日本神道学の建設」を提唱したことで知られる。

機関誌として当時発行された『神道』誌上には顧問ら大学関係者による所感が掲載されているが、「叫び」への期待が寄せられる一方で、ここでは、「斯道の大家を聘し、其の講演を聴き又夫々其の研究する所を発表して、意見を交換する」ことが「修養研究」とも見做されていた³¹点に着目したい。

すなわち、単なる「学究」には甘んじないことを標榜し、学生たち自身が盛んに演説していた創立当初に比べると、神道学という学問知が確立に向かいはじめた1910年代後半という時期においては、講演を聴く、あるいは研究を発表するという「学究」的な営為自体が、神道青年に期待すべき「修養」実践として浮上してくるのである。

（3）神道青年会②：筧時代・河野時代

ただし、「学究」が活動の中心になるまでには、もう少し紆余曲折を経る必要があった。

田中義能が熊本の第五高等学校に去った1918（大正7）年は会の活動が滞ったらしく、年末ようやく第1回例会が開かれた。その際は山本信哉・補永茂助・河野省三が指導することに決まったが、河野はさらに、筧克彦を会長に推した。筧は翌1919（大正8）年になってから就任したようで、2月に挨拶をしている³²。

この筧時代は、「学究」よりも「精神的活動」が主になった。具体的には、「神典理解の大衆化」のため「神職大会の方々に神ながらの道のパンフレット「心の御柱」や弥栄を大書した所謂「弥栄手拭」を進呈したり」、宮内省の楽師による「古代音楽演奏会」を催したほか、学生の申し出により「当時名取りの思想家」として安倍能成を例会の講演者に呼んだりした（和辻哲郎や阿部次郎には断られたという）。他には「玩具の会」や「朝鮮の会」といった小会が筧の自宅で開かれている。

中でも特筆すべき実践として、筧の考案した体操である「やまとばたらき皇国運動」が行われたことを挙げたい。全国神職会大会に合わせて神道青年会を開催した際に高木兼寛から「例の体操」（国民運動）を教えられた「刺戟」により、翌年以降の例会では毎回、出席者全員で皇国運動を行うようになったのだという。高木の来会は1919（大正8）年5月と推定でき、管見の限り、神道青年会では1920（大正9）年2月に初めて皇国運動が行われている³³。1910年代に筧が考案し、まだ公刊前の皇国運動を早期に行った場の一つが神道青年会だったことになるだろう。それは、「神ながらことあげなし」の境地に至るための身体的な「修養」であった³⁴。

しかし、「学生のうちにはどうもあの運動をやらされるので出席するのが厭だなど、云つてある者もあり、体操が「覆ふべくもなし」い「原因の一つ」となって、雨の日に委員が「飯田町の露地をかけ歩いて下宿の人達を借り集めなければならない様なこともあった」らしい。委員が西角井正慶一人になることもあり、活動は筧の熱意に反して「貧弱なもの」にとどまっていた（この頃、例会に集まるのは30～50名ほどであった）。西角井自身、筧とは「少し異なる立場に立つて」おり、会の中では「学問的な研究的な方面へ進むべきだといふ輿論もあつた」ようである。

さて、筧の下でも実際の指揮は河野省三が執っており、そこから1923（大正12）年には河

野自身が会長となることで、「精神的活動」から「学究的会合」に戻り、講演でも再び「学校に関係のある方々」が招かれるようになった³⁵（聴講者が300名に達することもあったという³⁶）。神道青年会の会則においては新たに、「時代ノ思潮ヲ研究」という目的や「研究会」の開催が盛り込まれ、機関誌の発行が「研究部」の所管とされている³⁷。そして、機関誌『神道』は1917（大正6）年の臨時号以来途絶していたが、神道学会の設立と同じ1926（大正15）年に再び刊行が開始され、学生の寄稿が大幅に増えることとなった。

このような「学究」的傾向は河野時代を通して続き、例えば國大の神殿に「会旗」が樹立された1934（昭和9）年には、『国意考』や『直毘靈』をテキストとする研究会が開かれている。講演会で登壇したのは河野のほか、井上哲次郎・星野輝興・崔南善チェナムソンといった神道研究関係者がほとんどだった（例外は軍人の満井佐吉のみ）³⁸。

もちろん、関東大震災の際は罹災者への慰問として「国旗宣伝」を行い、1926（大正15）年には建国祭に参加するなど³⁹、実際のところ完全に「学究的会合」のみに限られていたわけではないのだが、寛時代に比べると明らかに変化してきたと言える。

ここで、河野時代における「学究」の在り方を示す象徴的な文章として、1926（大正15）年の『神道』第1号に掲載された河野の所感「堅実味」⁴⁰を見てみたい。

一時の快を貪る議論や、ただ大声怒号する叫喚は、徒らに陳腐の学説を墨守するものと同じく、真に多くの人々の心を動かすことは出来ない。深い研究と強い信念とを欠くからである。[…]

余はかういふ傾向〔「社会問題」に関する研究が「科学的」で「堅実味」に富むこと〕を見てをる半面に於て、我が国体を論じ、神道を説くものが、其の学問的根柢の堅実味を深くすることに疎かであつて、ひたすら其の議論の筆鋒を鋭くし、語句の威圧性を多くするに勉めてをるかの観があるのを遺憾とし、且心もとなく思ふものである。

[…] 我が神道界の大きな欠陥の一つは、其の研究と信念との不足から来る堅実味の薄弱に在るであらう。余は此の点を特に我が青年神道家の反省と努力とに訴へたいと思ふ。

河野は、「我が神道界」の議論が「叫喚」「筆鋒」「威圧性」に陥っていることを批判し、それに対して「科学的」な「研究と信念」による「堅実味」の必要を主張する。

すでに1919（大正8）年には、「特殊の教典を有せず又熱烈な布教をなし得ない神職」とっては「学者」となり「学問と修養」で「人格」を養っていくことこそ「堅実な途」である、と述べていた河野は、まさしく「人格」の「修養」のための実践として「学問」を位置づけていると言えるが、1925（大正14）年の『国民道徳要論』では、さらに「我が国の歴史」への「研究反省」を「個人の修養即ち人格的観念の涵養」と「国民精神の堅実性」に結びつけるようになっていた⁴¹。

では、「堅実味」で憂慮されている「我が神道界の大きな欠陥」は、具体的にはどこに存在していたのだろうか。河野が含意していたかは定かでないが、同時期の神道界において堅実さの欠如や威圧性に関する批判に晒されていたのが神風会の宮井鐘次郎である。正確には1925（大正14）年、政界への進出を宣言した宮井が『神風』を全国神職会・全国社司社掌会の関係者らに譲渡したため、神風会は消滅していた⁴²。

例えば、神道青年会幹事を務めた経験があり、宮井の『神風』とはしばしば対立した全国

神職会『皇国』主筆の照本^{ゆたか}直⁴³は、「浪人生活は実に不羈奔放、自由の立場にあるだけ、ソレダケ自重を要するものがあることは多言を俟たざる所である。単に仕事をしたから偉いのではない「人間」として偉くなければならぬのである。」「多年斯界に根ざして居つた神風が全然宮井氏の手を離れ、新人の手によつて堅実に産れ出ようとすることは吾人として大に祝福せざるを得ないのである。」と、「自重」「堅実」の語を用いて「浪人」こと宮井を否定し、神職会関係者らを評価している⁴⁴。そして、神職たちに引き継がれた『神風』においても、「宮井鐘次郎式の国賊よばりの威赫をしたつて、今の青年が、その主張をすてざるものとは思へない。」と宮井が槍玉にあがり、神職が「唯物論、自然科学のマルクス主義」に対抗し「社会大衆」を指導すべく、「古事記日本書紀古語拾遺万葉集等の輪読、自由討究をして、十分思索をねり、疑義をはら」すことで「哲学を包含した、神道説を樹立」する必要が述べられた⁴⁵。

社会主義を批判しつつ「神社哲学の把握」を試みた照本しかり、いずれの議論もマルクス主義に代表される「社会」思潮の「科学」性を明確に意識する中で⁴⁶、宮井鐘次郎に象徴させられたような「絶叫」「叫喚」「威赫」的な言論の在り方⁴⁷を乗り越えるべく、「堅実」な「学問的根拠」を求めるようになってきたと考えられる。

そして、神道青年会における「学究」重視への移行は、そのような動向に対応していた。例えば1929（昭和4）年の『神道』に寄稿した会員・安藤貞重は、「青年として堅実味が薄くな」ったことに起因する「モダンボーイの跋扈」や「最高学府の学徒又は強健な有為な青年」による共産党事件に対し、「神道学徒」が「神道講究により日本青年のとるべき進路を明かにしなければならぬ」と述べ、「堅実味」と「神道学」を結びつけていたのである⁴⁸。

(4) 小括

1906（明治39）年結成の神国青年会や1910年代前半の神道青年会においては、単なる「学究」よりも、いわば「絶叫の時代」の雰囲気を残すような演説活動が実践の中心であった。そこから、1920（大正9）年周辺の一時期だけは寛克彦の指導によって体操（皇国運動）が行われたものの、学生の支持は弱かった。むしろその前後を通じて、講演会⁴⁹や研究発表、機関誌発行といった「学究」活動の比重が高まっていったと言える。

皇国運動など身体的実践の位置づけについては次節で触れることになるため、ここでは演説から「学究」への変化、神道学という学知の確立を、改めて二つの観点から考えてみたい。

まず一点目として、神道が対抗すべき相手が、他宗教から「社会」思想へ移行しつつあったということを指摘できる。1911（明治44）年の神風会においては、田尻隼人という青年の創作文が象徴しているように、神道・仏教・キリスト教の中から神道を選ぶという語りも共有されており⁵⁰、神道の対抗先は仏教とキリスト教だった。本節で見えてきたように、神国青年会や初期の神道青年会でも同様の傾向が存在し、対抗のための手段が演説であった。

それに対し1920年代の『神道』誌上においては、「国民の宗教心」を「仏耶二教に放任」している「神道界、殊に神社神道界の放心を心から恨みとする」ような議論よりも、「日本人」なら当然神社を信仰すべきであるため、神道青年会は仏教・キリスト教の青年会とは「全くその性質を異にし」、「相対的に議論され得べき」ではないといった主張が増えてくる。前項で取り上げた安藤貞重の記事は後者に属しており、「日本人」が「元来言挙げとして議論を嫌うのだ、とも述べていた⁵¹。他宗教に演説で対抗していた段階から、「モダンボーイ」や共

産主義に「科学」的な根拠を以て対処すべき段階へと移行するなかで、神道の「学究」が求められたのである。神道学は「日本人」の性質と本来的に結びつけられることにより、相対的な「言挙げ」（他宗教への対抗）とは異なる営為と見做されたとも言える。

次に二点目として、神風会のような、神職とは差異化された「神道壮士」「神道ゴロ」的な存在⁵²への忌避を挙げうる。神風会消滅の翌年、宮井は神道界での恐喝容疑で捕まっているが、同年の神道青年会委員が『神道』第1号で活動資金の不足を嘆いた際、「似而非職業愛国主義者あたりの、乞食根性と同様視されてもたまらない」と、寄付を無心する人々との違いを強調しているのは、このような状況を背景にしているのではないだろうか⁵³。

早くも1908（明治41）年には、國學院大學の「一生徒」が『神風』の記事に対し「壮士的にして穩健の風がない」と批評を加えたという話や、「皇稜を忘れんとする民心を覚醒せしむ可きものと期せし某私立大学の教授連は、其学生をして裏面より神風会に出席する事を阻害す」という風聞があったように⁵⁴、大学と神風会という二つの場は潜在的な形で対立しており、その差異が1920年代にかけて顕在化してきたと考えてよい。『全神』において照本の前に編輯主任を務めていた桜井東花は、神風会の「悲運」を、神道界の外のみならず特に内部に対し「鋭鋒」を向けたためではないかと評していた⁵⁵。すなわち、河野省三に見られたような「人格」の「修養」と結びつく「学問」理解が、「穩健」さ⁵⁶や「堅実」さという振る舞いを求めることで、大学・神職養成機関・神社といった制度との関係が薄い「神道浪人」の排除をもたらしたのである⁵⁷。それは、『神風』が全国神職会に加え全国社司社掌会の関係者らに譲渡されたことに象徴されるように、「学徳の修養」を求めて神道学という「当時の最新学知」を積極的に支持する「在地かつ青年の神職たち」の台頭⁵⁸と表裏一体の出来事だった。神社ではなく教派神道に限られていた状態から教派神道以外にも再拡大した「神道」の諸領域⁵⁹は、「学問」の性質と結びつきつつ、改めて神社を中心とする形で編成されていく。

二つの論点を合わせるならば、神道学は他宗教に対する「言挙げ」の場から出てきた言説でありながらも⁶⁰、「日本人」を元来「言挙げ」を嫌う存在とし、そこに自らの「学」を結びつけて語ることで、相対的な「言挙げ」の外に抜け出ることを目指した。そして、「神道壮士」とは異なる「堅実」な「日本人」としての神社神職を回路の中心に据えて、他宗教への対抗ではなく⁶¹共産主義などへの対処を試みようとしたと総括できる⁶²。

2. 「学究」が迎える限界

(1) 神道青年連盟協会の創立

前節で見てきたような、神道青年運動における「学究」重視の流れは、1931（昭和6）年の神道青年連盟協会創立によって頂点を迎えることとなる。おそらくは反宗教運動の高揚を意識していただろう同会は、事務所が「当分」とはいえ神道学会内に置かれたことに象徴されるように、神道学を実践するための団体であった。事業としては「研究会、講演会」が掲げられ、顧問となった神道学者たちは、「神道系統の学問」によって「一般青年の間に神道を鼓吹」し、日本国民を「有自覚的の神道信者とする」ことを求めていた⁶³。

協会創立の趣意書には「我が神道研究の青年には、個々の団体は存するも、天下の同志を糾合せる所の連盟の如きに至つては未だ之れあるを見ず。」という認識が見える⁶⁴。「神道研究の青年」による団体として結集したのは、國學院大學神道青年会に加えて、日本大学神道青年会⁶⁵・東洋大学神道研究会⁶⁶・慶應義塾大学神道研究会⁶⁷である。

しかし、上記の各大学から学生の理事が2名ずつ選出される一方で、理事の半数強や他の役職は神道学会関係者を中心とする神道界の権威だった（会長は田中義能、副会長は河野省三である）⁶⁸。そのため、「後見役には朝野の凡ゆる国粹論者を網羅して顧問、監事、主事、相〔談〕役、理事等はむしろ老人で占めてゐる」と評され、「神道老年連盟」と呼ぶ人もいたらしい。機関誌として発刊された『神道青年』において、頁数の大部分は「青年」たちではなく、彼らを指導する学者の原稿で占められていた。講演会の登壇者も、初回こそ半分が学生だったものの、回を追うごとに学生の比率は下がり、学者ばかりになっている⁶⁹。

神道青年連盟協会における「青年」と学者の関係を表すテキストとしては、匿名の早稲田大学生による以下のような主張⁷⁰が見受けられる。

僕は必ずしも総ての神道青年学徒に、神道の宣伝者たることを望むのではない。救世軍の如く街頭に太鼓をたゝいて声を嗶らせよと云ふのではない。学生には学生の天分があり、又、各人それぞれの適性がある。乍併、少くとも神道青年としては、諸先生から与へられた神道精神、日本民族の血液の中に貫流して祖先から伝はつてゐる日本精神の知識を、充分に咀嚼し、充分に吸収して、自分のものとした後に、之を我々青年の口で、又、筆で一般青年に理解させ、世界に於ける日本人の重大使命として、世界の文明をリードする事に努力するのは、我々の義務である。徒らに諸先輩の講義を鵜呑して、鸚鵡神道、蓄音器神道に墮するのは最も卑むべき態度である。

街頭における太鼓は救世軍のみならず、往時の神風会や大日本仏教済世軍の伝道でも用いられていた⁷¹。ここで否定されているのはあくまでも「講義を鵜呑」にすることであり、街頭に出て「声を嗶ら」すことは「適性」次第で望まれているのだが、結局、神道青年連盟協会が街頭演説に繰り出すことはなかったようである。本稿の前半で見られたような「絶叫」のスタイルは復活せず、学生たちは「神道精神」を「諸先生から与へられ」るのみの段階にとどまっていたと言えよう。

そのような神道青年連盟協会は、神道学会との差異を明確に打ち出せないため単独では目立つ成果を挙げられなかったのではないだろうか⁷²。管見の限り、『神道青年』は1933（昭和8）年の第2号までしか確認できず、その後の活動状況も不明である⁷³。第3号以降が刊行されていた場合は『神道学雑誌』で紹介されるのが自然なので、出なかったと考えてよい。むしろ、協会の活動成果を発表する場すら『神道学雑誌』になっていったと思われる⁷⁴。そもそも『神道青年』と『神道学雑誌』は同じ会社（精興社）が印刷しており、版面の体裁からして似通っていた。

神道青年連盟協会の創立に際し、國學院大學神道青年会の『神道』に寄稿した日光二荒山神社主典・西田重一は、「従来の象牙の塔的各学園内の神道主義結社が百尺竿頭を進めて巷間に孤立する小さいが沢山の散在する力を統合しようとし更に新時代な任務遂行をも企図する」ことを、「神職の立場」から待望していた。また、文学士・桑貞彦は今までの國學院大學神道青年会が「神道研究会又は神道学会とも称すべき内容を示すが如き神道研究の事業を専らとして、実際に吾等が神道人としての切実な信仰上の問題に聊かでも解決を与へて呉れるやうな、神ながら言挙げぬ体験による研究、進んでは修養の機会を与へられなかつた」という「不満」を述べ、それに代わる期待を協会に寄せている⁷⁵。しかしこれらの声に対し、

協会の活動が「象牙の塔的各学園」における「神道学会」的な事業の範囲を出ることはなかったのである。

このように、神道青年運動において「学究」のみに注力することは、1930年代に入ると一つの限界を見せるようになってきた。次項からは、桑が言うところの「神ながら言挙げぬ体験による研究」なるものについてさらに検討していきたい。

(2) 皇国禊会

寛克彦時代の國學院大學神道青年会において体操があまり支持されず「学究」が優位になっていった一方、その周辺で身体的な実践が完全に排されたわけではなかった。当時幹事を務めた西角井正慶は、後年「寛先生の皇国ばたらきは其後皇国禊会の方に其精神が伝へられてゐる様に思ふ。元来さうあるべきであつたのではないかと思ふ。」と述懐している⁷⁶。寛の体操に加えて禊をも実践したのが、1930（昭和5）年結成の皇国禊会であった。

皇国禊会につながる流れは、1920年代から形成されてきていた。1924（大正13）年12月、皇典講究所の名義により、中野佐柿を講師とする第1回寒中禊が行われた。中野が皇典講究所講師を囑託されたこの年には虎の門事件も発生しており、その「痛恨事」を慨嘆し、「禊道による天下の救済」のために立ったのだという。

特に翌1925（大正14）年7月の第2回禊会では、「國學院大學の神道青年会員の金鑽小島の両君が進んで参加して大奮闘してくれた」らしい。1926（大正15）年の『神道』には第3回禊会の感想が複数載っているほか、中野を会長とする禊同人会の結成も報告されていた⁷⁷。あくまで神道青年会とは別団体であるものの、没交渉だったわけではないと言えよう。

そして1930（昭和5）年、中野は國學院大學学友会の補助を受けて皇国禊会を結成、寛を会長に戴き自らは副会長となった。國大の学生たちによる組織だが、大学の外にも進出することを期すために「皇国」の団体を称したという（女性もいたことから、実際に大学外の参加者があったと言える）。1939（昭和14）年の時点では119名の会員が在籍しており、神道青年会の146名にも引けを取らない規模である⁷⁸。

さて、1931（昭和6）年に発刊された機関誌『みそぎ』第1輯を見てみたい。「会員感想輯録」と銘打たれた同号では、「スガへしい誠の心に立ち返ることが出来た」、「金錢を超越した心況になれた」、「身体が軽くなつた」といった精神的・身体的な効果を記すものをはじめ、中耳炎を治すために禊を行おうとする会員も見受けられ⁷⁹、それぞれ興味深いのが、今は「学問」や「知」との関係で禊を位置づける記事に着目しよう。禊の「哲理」や「哲学」を論じる会員もいる一方で、どちらかといえば目立つのは以下のような議論である⁸⁰。

禊の友よ!! 理窟や批判等は抜きにして、何でも構はず禊そのものの体験に依つて強くなれ。理窟や学理は其の業を会得すれば、ひとりでに付くであらう。
〔…〕 役にも立たぬ理窟学問を若者に強ては、神経衰弱を流行させるばかりではないか。禊を学術的ではないの、不衛生的だのと批判する連中に先づ此の問題を解決してから論じて貰ひたい。

神道青年会にも参加していた神道部の前田勝也⁸¹によるこの文章においては、禊の「体験」と、「理窟や批判」「学問」「学術」が対比され、禊が上位に置かれている。

また、神道青年会に不満を示していた桑貞彦も、同誌では次のように述べていた⁸²。

神道人としての修養の第一歩としてこの「みふみ」〔「記紀、祝詞、宣命、万葉集」〕の記載の真面目なる研究に努めることを肝要なりとするが、而してそれが単なる言挙げに終始せず、常に自己の動かすべからざる体験実習の結果を通じて進められねば、効果なきのみか却つて疑惑多きを致すのみであることを銘記せねばならぬ。

言語の相を絶する命の世界の消息は書物の考証のみでは通じ得ない。

つまり桑は、神道青年会で行われていたような「書物の考証」に「修養」としての意味を認めつつも、それだけでは神道への「疑惑」を増しかねない「単なる言挙げ」になりかねず、あくまでも「研究」の根柢には「体験」たる禊が置かれなければならないというのである。

そのような「研究」観は、「社会進出号」と題された1935（昭和10）年の『みそぎ』第4号においては皇国禊会の総意として示されることとなった⁸³。

吾人の禊は〔…〕体験の学問たる皇学其の者の骨髓を成し、学問其の者である。〔…〕吾人の禊は実証的学究と其の方向を異にするに拘はらず常に其の基礎を与ふるのみならず其の不断の監督者である。然も諸般の実証的学究と其の方向を異にし是等に超越することは、一方に於いては皇国禊会をして是非とも社会への進出を必要とせしめ、他方に於ては皇典講究所の直轄団たるを以て最も其の本分を尽し得るものと考えらる。

禊は「体験の学問」として、「実証的学究」を超越・監督するものだと定義されている。神道の「研究」による社会指導という理念は従来も出ていたが、単なる「学究」ではなく禊を持ち出すことにより、「体験」という明確な優位性の根柢が付与されたと言える。

（3）神道青年会③：第二次田中時代

では、同時期の神道青年会における「学究」の位置づけに変化はあったのだろうか。

1935（昭和10）年、國學院大學の学長兼学友会会長に就任した河野は、規則により一部会である神道青年会の会長を兼任できず退任し、7月から再び田中義能に交代した⁸⁴。

この時期には、1920（大正9）年成立の道義学会をはじめとする様々な分野の「研究部会」に加え、皇国禊会などの「実践」的団体も登場してきたことで、それらの「専門組織」に個々の活動を譲る形となった神道青年会の存在意義が問われるようになった。國大教授となっていた西角井正慶は、そのような状況下で神道青年会が目指すべき方向を、「神道の新しい理論」、とりわけ「無色透明な理論なき理論」の探究に求めている⁸⁵。

当時の「理論なき理論」を象徴する事例として、1938（昭和13）年の『神道』新第4巻に掲載された、西田重一による「時局下に於ける神道研究の方向」を見てみたい⁸⁶。神道青年連盟協会の項でも言及した人物だが、この時は国幣中社伊和神社宮司に昇任していた。

研究を如何様に解するかに依つて、作られる答案は自ら異つて来る。

神道の研究と云ふと何だか学究臭くて興味が湧かない。〔…〕その仕事が峠を越したからとていまだ―完了した訳でもあるまいから精々進められたらよからう。

研究室の仕事に行詰りを来したから何とか打開したいと云ふなら答へてもいい。資料漁りを古本屋や神社の書庫から転じて、鳥居前の街頭に手を延ばせよ。〔…〕

それにしても、研究とは学的操作だとばかり馬鹿の一つ覚えで取りかゝつては何物も得られまい。〔…〕

神道を研究室に持ち込んで、哲学や宗教学や、心理学や倫理学や等々の知識の小マ切れを作つて、更に寄せ集めて見ても、人間一匹がタマシヒを打込んですがりつく光は発生しない。光のない所に信仰はない。

神道界においては、1920年代以来「社頭から街頭へ」という社会進出のスローガンが唱えられてきたが⁸⁷、この文章で「街頭」に対比されているのは「社頭」ではなく、「古本屋や神社の書庫」そして「研究室」である。西田は決して「学究」の意義を否定するわけではないものの、「研究とは学的操作だ」という考えからは「信仰」は出てこないとする。先に見た桑貞彦や皇国禊会の主張にも近いほか、西田においては特に、既存のアカデミックな「学究」への批判という側面が強まっている。

そして別の文章でも西田は、「懐疑的と功利的」という、インテリとしての「今の青年神道人」にも見られる「学生気質」を、「行の運動」で更生させるべきだと主張していた⁸⁸。

藤本頼生によれば、西田重一は國大の弁論部を出た「理論派神職の雄」だった。また平山昇は、1937（昭和12）年の西田による、「学」が「行」を通して初めて生きたものとなるという主張を紹介し、「反知性」の特徴を持つ言説に分類している⁸⁹。西田は、言葉の正しい意味においての反知性主義として、「理論なき理論」を推し進めた人物だったと言えよう。

とはいえ、西田の主張がすでに大学を離れた神職としてのものであったのに対し、神道青年会は大学という場に拠っていた以上、「学究」は代えがたい核心として存在しつづけたようで、当時の河野にしても「神道界の青年学徒」に対し、禊や体操の意義にも触れつつ、第一義的にはやはり「神道の学問的開拓、神道学の発展」を求めている⁹⁰。

実際の行事を見てみると、従来研究会・講演会に加え、1934（昭和9）年度以降は明治神宮団体参拝が記録され、特に1941（昭和16）年度には大倉精神文化研究所の見学とハイキング、鎌倉での神社参拝見学が行われている⁹¹。1930年代より後の神道青年会では、「学究」を中心に、若干は体験型の行事が取り入れられるようになっていったと考えてよい。

（4）小括

1930年代の神道青年連盟協会や神道青年会においては「学究」的な方向性が進められていったが、その在り方は徐々に限界を迎えてきた。

とりわけ、桑貞彦や西田重一、皇国禊会の主張で確認したとおり、「学究」よりも上位にあるものとして「体験」や「信仰」が強調される状況が出てきたことは大きいだろう（禊などの「体験」自体はそれ以前から行われてきたが、「学究」批判の強調が新しいのである）。

前節においては、他宗教への対抗よりも共産主義などの「社会」思潮への対処という認識の変化を確認したが、いわゆる「宗教復興」状況のなか、後者はさらに定着していった⁹²。その共産主義に対し、1920年代には「学究」による「科学」としての対処が目論まれたものの、30年代になると「学究」を超えた存在としての「体験」「信仰」の強調が、より有効な言説戦略として選ばとられようとしたと位置づけうる。かつては相対的な「言挙げ」から抜

け出る実践とされえた「学究」も、神社という場や「日本人」論とさらに結びつけやすい「体験」言説の前では、「疑惑」につながりかねない「言挙げ」として劣位に置かれていくのである。実際のところ、「体験」言説が1920年代以来、田中義能や加藤玄智といった神道学者によっても振りまかれていた⁹³ことからすれば、「学究」という方法の地位低下は、思想としての神道学自体がある程度招いたことでもあった。

そして、西田重一が「神職」としての立場を強調したように、「学究」への批判は大学と神社という二つの場の区分を明確化する役割をも果たしていた。例えば両者を横断して活動した河野省三が「学問的根拠」と「信念」の一致を自明視していたのに比べると、「学」なるものへの見方が転換してきたと言えるのではないだろうか（神職としての日常的な業務においては「学問」が役立たないと見做されたこと⁹⁴や、逆に國大生が神道思想に同調する者ばかりではなかったこと⁹⁵も、大きくは関係しているように思われる）。

1939（昭和14）年、かつて篤に反対し「学究」的方向性を望んでいた國大の西角井正慶は、篤時代の神道青年会が20年前に経験した「精神活動」が今は「時勢」になったという認識のもと、神道青年会の存在意義を問いなおし、それまでの「学的機関としての意識」は「無定見」なものであって、学生だけの神道青年会では社会進出ができない、と反省の弁を述べていた⁹⁶。大正期以来、篤の周辺では禊や皇国運動が広がりつつあり、関連して大政翼賛会や神祇院で禊祓行が正式に採用されるのは翌1940（昭和15）年のことだが、そうした動きに寄与したのはむしろ東京帝国大学法科などで篤に教わった官僚たちだった。「学究」をめぐる分立していた國大の神道青年運動は、大きな力を果たしえなかったのである⁹⁷。

西角井が将来を夢見た、大学という場や「学究」に囚われずに社会に向かって活動する神道青年運動の在り方は、むしろ戦後において可能になったとも言えよう。1949（昭和24）年には地方と全国を繋ぐ形で構成される神道青年全国協議会が、さらに1963（昭和38）年には全国氏子青年協議会が成立し、いずれも神社本庁の指定団体として現在に至るまで様々な活動を続けている。ただし、神青協で初期に目指された「一般青年」の吸収はうまくいかず、事実上「四十歳前後までの若い神職」による「神職青年団体」となっていった⁹⁸。

おわりに

本稿では、國大を中心とした近代の神道青年運動を通時的に検討することで、1910年前後には「絶叫」的な演説が主に実践されていたのに対し、1920年代を通じて「学究」が中心となり、他方で1930年代にかけては「体験」的な実践が興起してくることを確認した。「言挙げ」の語を用いた価値判断からも分かるように、実践の変化は、神道にとって何が本質的な行為か、誰が本質的な行為を行う者かという認識と関わっている。「学究」は、「科学」という根拠に加え人格を「修養」する営為としても自らを意味づけることで、他宗教に対抗する演説実践よりは優位に立ちえたが、「体験」や神社の現場性を強調する言説に比べると、共産主義などへの対処方法としても「修養」としても、絶対的なものたりえなかった。

磯前順一は、神道学会における「原理的」研究と「実証的」研究の「学問的統一」の困難を挙げて「神道学の座礁」を論じている⁹⁹が、それは単にアカデミズムの内側のみならず、神道界全体から見た「学究」批判という状況においてある程度は捉えうるだろう（ただし、後述する「神社学」などの問題もあり、「学究」批判のみで済ませることはできない）。

今回取り上げた神道青年運動という場は、いわば近代の神道界において最も神道学との距

離が近い人々であったと考える。「学究」が限界を見せつつも最後まで中心的なものとしてありつづけたのは大学という場ならではの現象であるが、神道青年運動の外側における「学究」の位置づけは一層低いものであったことが予想される。もちろん、「理念的な認識」自体は広く流通していた。そこにおいて、「学」ということがどれだけ、どのような形で根拠となりえたのか、なりえなかったのかを引き続き検討していく必要がある。

そして、今回は「学究」という営為をその外側と比較し、それ自体の内部的な変化には立ち入らなかったが、当然ながら神道学なるものも時代的に変化していったことが予想される。神道青年運動の周辺では例えば、慶大神道研究会の鈴木四郎が1930年代に「神社学」の建設を構想していた。同時期には運動の外部でも高野義太郎や大辻鉦蔵といった人々が同様の主張を行っており、さらに1932（昭和7）年の折口信夫による「郷土と神社および郷土芸術」が後年、「新しい神道学のあり方を導かれたもの」と評された¹⁰⁰ことは注目すべきである。宮地直一の「神祇学」や星野輝興の「祭祀学」なども含め、この頃「新しい神道学のあり方」がどのように出現しようとしていたのか、という、今後検討すべき展望が開けてこよう。

注

- 1 無記名「東京博覧会」（『東京朝日新聞』第7421号、1907年）6面。以下、同紙は朝日新聞記事データベースに拠る。
- 2 宮井鐘次郎「質問書」（『神風』第39号、1907年）4面。ただし、救世軍の旗が4月17日の新橋におけるブース歓迎で掲げられたのに対し、神風会の様子を報じた『東京朝日新聞』は18日の朝刊であり、直接的な関係があるとは言い切れない（『神風』第39号5面では、神風会が天幕伝道を開始したのは16日であり、宮井は新橋に行けなかったことが述べられている）。以下、『神風』は神戸大学・東大明治文庫・國學院大學・金光図書館所蔵のものを用いた。
- 3 無記名「牛頭馬頭」（『東京二六新聞』第1618号、1907年）2面、神州男子投「言論せぬ国」（『時代宗教』第27号、1907年）10～11頁。
- 4 元重旦式「廣池教授新任の辞」（未公開の演説筆記、1907年）。廣池千九郎記念館所蔵のものを利用していただいた。この史料は橋本富太郎『廣池千九郎一道徳科学とは何ぞやー』（ミネルヴァ書房、2016年）175～176頁にも引かれ、読点が補われている。
- 5 前掲橋本富太郎『廣池千九郎』181～190頁。ただし、当時は「神道」の語が教派神道を中心とするものとして捉えられていたため忌避され、「祭祀研究会」として成立することとなった。「神道」が皇學館の正式な学科目となるのも、遅く1926年になってからである（同左）。
- 6 神道家の投書載せた『時代宗教』も、組織としては「誠実の研究を為す」立場から、天幕伝道を「宗教の本領を没却せる阿世的野次馬騒に過ぎ」と否定している（宗教研究会「宣言」、『時代宗教』第26号、1907年、36頁）。
- 7 磯前順一『近代日本の宗教言説とその系譜—宗教・国家・神道—』（岩波書店、2003年）236～237頁。本稿で「神道学」の語を用いる際は、近代において神道を研究した営為の全体ではなく、1917年の遠藤隆吉による「日本神道学の建設」を本格的な初出とし、1926年の神道学会創立によって確立された、「神道学」を自ら名乗る学問領域・学者コミュニティを指す。その前史は1909年の田中義能による「神道哲学」に求めることができる（同左、311頁も参照）。
- 8 林淳は、「近代的専門家」が「在野の知や伝統的な知識人」を失墜させていくという磯前説の構図に触れたうえで、「対象そのものが、著者の視界を限界づけていた」と指摘している（林淳「磯前順一著『近代日本の宗教言説とその系譜—宗教・国家・神道—』」、『宗教研究』第78巻第1輯、2004年、167～168頁）。
- 9 筆者はこれまで、アカデミズムに限らない様々な雑誌における神道関係の議論の中から、どのように

して神道学につながる「神道哲学」が登場してきたのかを明らかにしようとしてきた（木村悠之介「明治後期における神道改革の潮流とその行方—教派神道と『日本主義』から「国家神道」へ—」、『神道文化』第31号、2019年など）。神道家が担っていた「思想の再編行為」や「理念的な認識」の場という前提があつてこそ、大学の学者も登場しえたのである。

- 10 無記名「絶叫の時代」（『惟一』第3号、1894年）31頁。『惟一』も「神教徒青年」による雑誌だった（前掲木村悠之介「明治後期における神道改革の潮流とその行方」54頁）。
- 11 「神道青年運動」という用語は、田尻隼人「神道青年運動の回顧」（『宗教公論』第6年5月号、1937年）から採った（ただし、各大学の組織に触れたものではない）。また、本稿においては「青年」という語に本質的な定義を与えることはせず、史料上「青年」と自称した、あるいは呼ばれていた人々に関する議論を取り上げる。「神道青年」についても同様である。「青年」概念の歴史的構築性については、和崎光太郎『明治の〈青年〉—立志・修養・煩悶—』（ミネルヴァ書房、2017年）参照。
- 12 前掲磯前順一『近代日本の宗教言説とその系譜』200、217～218、219頁、前掲林淳「磯前順一著『近代日本の宗教言説とその系譜—宗教・国家・神道—』」167頁、松本久史「近代神道学者の国学観」（同『荷田春満の国学と神道史』弘文堂、2005年）385頁。
- 13 本稿の視座とは別に、例えばジェンダー表象の観点から神道と「青年」論の関わりを検討することは必要である（「言挙げ」をめぐる問題にしてもそれと無関係ではない）。他日を期したい。
- 14 前掲木村悠之介「明治後期における神道改革の潮流とその行方」68～69頁、前掲田尻隼人「神道青年運動の回顧」24頁。
- 15 本居大平「玉鉾百首解」（村岡典嗣校訂『直毘靈・玉鉾百首』岩波文庫、1936年）77～78頁。このように「論弁」と「言挙げ」を結び付けたのは実は宣長自身であり、原義は必ずしもそうではない（イグナシオ・キロス「「コトをアゲツラフ」と「コトアゲ」は関連するのか？—『日本書紀』の十七条憲法を中心に—」、『國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所年報』第10号、2017年、46～47頁）。本稿でしばしば出てくる河野省三や寛克彦をはじめ、ほとんどの神道論では宣長的な「言挙げ」観が採用された。河野・寛・鹿子木員信を批判しつつ「言挙げ」に積極的な意義を与えた数少ないものとして、伊藤武雄『興言論（ことあげの本質）』（金鶏学院、1936年）がある。
- 16 無記名「神国青年会生る」（『神風』第29号、1906年）4面、國學院大學校史資料課編『國學院大學百年史（上巻）』（國學院大學、1994年）457頁。なお、神国青年会の「主意書」においては「社会主義・共産主義」も意識されているが、あくまでも最終的には、それらを含む思想の混乱状況において「外教」に青年たちが流れてしまうことこそが問題とされていた（同左、456～457頁）
- 17 訪問記者「訪問記（一）」（『神風』第84号、1909年）6面。
- 18 田尻隼人「浅酌庵随想 折口信夫と中野佐柿」（『業界公論』第22巻第6号、1975年）15頁。
- 19 木村悠之介「近代における神道青年運動と神道研究の形成—初期の神風会までを対象に—」（東京大学大学院人文社会系研究科修士学位論文、2019年12月提出）。投稿論文化を進めている。
- 20 無記名「神風会雄弁会」（『神風』第52号、1907年）5面。
- 21 金光槌爾「創立の頃」（第1期『神道』臨時号、1917年）8～9頁。以下、『神道』は1916～1917年の第1期、1926～1935年の第2期、1936～1943年の第3期に区分する。いずれも國學院大學図書館か、同館河野省三博士記念文庫の所蔵に拠った。なお、大学の外では1911年4月、星野輝興を庶務主任とする「神職青年団」が結成され（無記名「神職青年団成る」、『全国神職会会報』第150号、1911年、81～83頁。以下同誌は『全神』と表記する）、全国に組織を広げる過程が「青年団彙報」として『全神』誌上で紹介されていた。宮井鐘次郎の支援も受けたという（無記名「青年団彙報」、『全神』第155号、1911年、73頁）。しかし、幹部だった星野が翌年5月、「一身の事情により脱退」したことを境に報道されなくなる（無記名「神道青年団の消息」、『全神』第163号、1912年、67頁）。神道青年会の活動は、それと入れ替わるように『全神』や『國學院雑誌』で取り上げられていく。
- 22 無記名「神道青年会創立」（『全神』第157号、1911年）75～76頁、同「神道青年会記事」（『全神』第

- 160号、1912年) 95頁、および金鑽俊雄「神道青年会の過去を憶ふ」(第2期『神道』第6号、1930年) 12~13頁、前掲國學院大學校史資料課編『國學院大學百年史(上巻)』460~461頁。『國學院大學百年史』は創立宣言書を10月、発会式を11月18日としており、『全神』第157号および第160号に依拠したものと思われるが、当時のメモを紹介する武田祐吉「神道青年会創立当時の文献」(第3期『神道』新第6巻、1943年) 6~7頁によれば、「十月十八日 神道青年会創立決定」「十一月六日 創立宣言書起草」「十日 創立宣言書ヲ謄写版ニ上ス」「十四日 神道青年会発会」という。こちらの日付の方が正確ではないだろうか(宣言書の期日が10月付になっていた可能性は残る)。
- 23 武田祐吉「神道青年会創立当時の追憶」(第2期『神道』第6号、1930年) 8頁。
- 24 武田は続けて、「附属図書館で古い神風を漁つて見たが、欠号になつてゐると見えて見当たらなかつた。」と述べている(同上)。実のところ、武田が調査した國大図書館に加え、近い時期の欠号を補う東大明治文庫の所蔵分においても、管見では『神風』誌上において「宣言書」を引いた記事が見当たらない。可能性があるとするれば、「宣言書」を紹介しつつ、南北朝正閏問題に参加した学生に関して「此の有為なる学生を余り歓待もせざりし同校」といい、さらに「同校が同会を学生のものとのみ思はず充分の援助を与へ神道とか国体とかいふことに今少しく否大に力瘤を入れられんことを望む」と述べていた『全神』だろうか(前掲無記名「神道青年会創立」)。そのため、『神風』については武田の勘違いである可能性が高いが、そのように記憶されていたこと自体に、神風会と「学校」との距離を考えるうえでの意味がある。
- 25 小坂藤若「日誌」(同『隨筆「あとの鴉」』私家版、1970年。筆者所蔵。「定齋屋」氏よりご教示・ご恵贈いただいた。記して感謝の意を表したい) 49頁、前掲無記名「神道青年会記事」。幡掛は『神風』紙上「青年の声」欄に「来学期改めて御伺ひ致す」と投書しており(『神風』第85号、1909年、5面)、小笠原は神風会において「大日本青年団」を運営していた時期がある(大日本青年団「青年諸君に告ぐ」、『神風』第215号、1918年、6面)。
- 26 前掲無記名「神道青年会記事」、池本正穎「編輯後記」(第1期『神道』第1号、1916年、21~22頁)。清水政之助とあるのは正しくは清水正次郎を指している。
- 27 無記名「神道青年会記事」(『全神』第168号、1912年) 105頁。
- 28 覆面郎「学生団の活躍」(『神風』第62号、1908年) 3面、神風会娘子軍「我娘子軍生まる」(『神風』第151号、1914年) 35頁、大本七十年史編纂会編『大本七十年史』上巻(宗教法人大本、1964年) 335~338頁、藤井健志「大日本仏教済世軍の展開と真宗教団」(『東京大学宗教学年報』第3号、1986年)。直霊軍についてはすでに神風会・救世軍との類似性が指摘されている(安藤礼二『折口信夫』講談社、2014年、231頁)。
- 29 今井常男「神道青年会諸君の猛省を促す」(『全神』第170号、1912年) 90頁。
- 30 前掲金鑽俊雄「神道青年会の過去を憶ふ」12~13頁、同人一同「先輩諸氏に対する公開状」(第1期『神道』第1号、1916年) 4頁。1916年には上田や寛の「科外講演」が開始されており、「我校のやがて神道的の雰囲気につゝ、まるる日遠からじ痛快也。」と期待されている(無記名「消息欄」、同左、20頁)。なお、紀平正美に関して「校内はその統一原理の崇拜者を以て充滿す。山田幹事長曰く『紀平君の神道はハイカラ神道也』と。」といった記述もあり、興味深い(無記名「側面観(その一)」、同左、11頁)。
- 31 無記名「机上偶話」(同上、1916年) 15~16頁。「叫び」への期待は顧問の青戸波江や賀茂百樹によるもので、「修養研究」は國學院大學主事であった清水平一郎の言及。
- 32 無記名「神道青年会」(『明道』第3巻12月号、1918年) 8頁、河野省三「神道青年会長を辞するに臨みて」(田中義能編『神道パンフレット』第12号、1935年) 1~2頁、無記名「神道青年会」(『明道』第4巻3月号、1919年) 28頁。『明道』は神道本局の機関誌で、金光図書館所蔵。初回は山本らや学生たちの他に、西川玉壺・神崎一作・三矢重松・沢田五郎が参加したという。なお、1918年1月の第3巻第21号には沢田による「神道青年会の奮起」があるが、実際の活動状況は明らかでない。
- 33 無記名「神道青年会」(『明道』第4巻6月号、1919年) 28頁、同「神道青年会記事」(『國學院雑誌』

- 第26巻3号、1920年）75頁。高木には触れられておらず、『全神』にも神道青年会関係の記述は見当たらないが、笈の会長就任後で皇国運動が開始される以前だと、この大会が該当するだろう。
- 34 西田彰一『躍動する「国体」 笈克彦の思想と活動』（ミネルヴァ書房、2020年）145頁。皇国運動の成立時期については、中道豪一「笈克彦「日本体操」の理論と実践」（『明治聖徳記念学会紀要』復刊第51号、2014年）165頁、および中房敏朗「草創期における「日本体操」の成立とその展開について」（『大阪体育大学紀要』第47巻、2016年）24頁。中道が1913年の愛知における実施記録を紹介する一方、中房は1918年における桜井恒次郎の「紳士体操」からの影響を重視している。それぞれの記述や、高木の「国民運動」から刺激を与えられたという今回の情報を加味するならば、1913年には原型ができていた皇国運動に、他のいくつかの体操から着想を得て大成したのが、1920年12月刊行の『皇国運動』ということになるだろうか。
- 35 以上、笈時代の記述について注記のない部分は、松尾久也「思ひ出づるまゝに」（第2期『神道』第6号、1930年）15～16頁、西角井正慶「笈会長のころ」（第2期『神道』第7号、1932年）16～18頁、同「神道青年会の過去と将来」（第3期『神道』新第5巻、1939年）45～46頁。
- 36 無記名「神道青年会」（『國學院雑誌』第29巻第8号、1923年）、同「國大神道青年会講演会」（『國學院雑誌』第32巻第11号、1926年）138頁。
- 37 無記名「國學院大學神道青年会会則」（第2期『神道』第9号、1933年）103頁。第2期第1号にも載っているが省略部分あり。他には「修養会」も定められているものの、実態は不明である。河野時代は機関誌のほか、講演筆記などをまとめた『神道パンフレット』も別途刊行された。
- 38 熊田記「会報」（第2期『神道』第10号、1935年）90～92頁。それぞれの演題は河野「神とは何ぞ」、井上「予の神道観」、満井「日本精神と近代国防」、星野「祭祀の領域」、崔「朝鮮より見たる古神道」であった（崔は「朝鮮神道研究者」として紹介されている）。
- 39 国旗宣伝では葦津耕次郎の支援でパンフレットを公称5万枚配布し、翌年も行った。河野省三『私の教化の歩み』（神社本庁、1962年）8～12頁、葦津正之「事業報告に代へて」（第2期『神道』第1号、1926年）34頁、無記名「神道青年会国旗宣伝」（『國學院雑誌』第30巻第3号、1924年）78頁。
- 40 河野省三「堅実味」（第2期『神道』第1号、1926年）4～5頁。
- 41 高野裕基「田中義能による近代神道学形成の背景」（『國學院大學大学院紀要—文学研究科—』第45輯、2014年）86頁、河野省三『国民道徳要論』（森江書店、1925年）62～63頁。河野は、「神職の修養」や「神職の学力向上」が議論されていた大正期の神道界において、早くから「神職自身の修養の重要性を訴え続け」ていた（高野裕基「河野省三の学問と思想—神社を背景とした国体論—」、藤田大誠編『国家神道と国体論—宗教とナショナリズムの学際的研究—』弘文堂、2019年、398、402頁）。
- 42 『神風』第474、475号（いずれも1925年。後者は筆者所蔵）、太田真一「神社界に於ける民社運動—全国社司社掌会の結成—」（『神社新報』第1548号、1979年、3面）など。
- 43 前掲無記名「神道青年会記事」（『全神』第160号）94頁、藤本頼生「照本亶と『皇国』—大正期・昭和初期の神社人の言説—」（阪本是丸責任編集『昭和前期の神道と社会』弘文堂、2016年）77頁。照本は本人名義の他にも編輯主任として無記名で多くの記事を執筆しており（同左、78頁）、本稿で取り上げる記事も無記名だが、照本のものと推定した。
- 44 無記名「宮井神風子隠退」（『皇国』第320号、1925年）18頁、同「『神風』の復活」（『皇国』第321号、1925年）15～16頁。また、同じく第320号の巻頭言「人間と仕事」は「宗教は政治の根柢である」といふことは宗教家が政治運動に奔走せよといふことではない。」として「いかがはしい人物」を非難するものであり、これも宮井を指すと推測しうる。なお、宮井は神道界の「浪人」としての立場を自他ともに任じていた（前掲木村悠之介「明治後期における神道改革の潮流とその行方」68頁）。
- 45 磯部敏郎「共産党事件に就て」（『神風』第556号、1930年）15～16頁。
- 46 前掲藤本頼生「照本亶と『皇国』」65～68、72～73頁。また、「表紙の気持よさ」が好評だったという『神道』は（無記名「巻頭言」、第2期『神道』第2号、1926年、1頁）、総合雑誌『改造』に類似してい

- るとも言えそうな、白地に太い黒ゴシック体の横書き題字というシンプルな表紙デザインであり、『改造』に代表される「時代ノ思潮」を取り込もうとしたのかもしれない（1931年に結成された新興仏教青年同盟の『新興仏教の旗の下に』は、マルクス主義の雑誌『新興科学の旗の下に』から題名を取ったという。大谷栄一「昭和初期の「新しい仏教」をめぐる動態—伝統仏教・新興仏教・反宗教の交渉と葛藤—」、同『近代仏教という視座 戦争・アジア・社会主義』ペリかん社、2012年、88頁）。
- 47 ただし実際は神風会にしても、「弁士養成」において上田万年をはじめ河野を含む多くの学者を講師とし（神風会弁士養成部「謹告」、『神風』第284号、1920年）、伊勢でも皇學館の教授を招いた「講演練習会」を開くなど（無記名「神道講習会並講演練習」、『神風』第376号、1922年、8頁）、学問的な素養を持つ「講演」者の育成を目指していた。
- 48 安藤貞重「神道と日本青年」（第2期『神道』第5号、1929年）32頁。
- 49 演説（あるいは伝道・説教）と講演は、学生たち自身の役割が話すことにあるか聴くことにあるかという違いに加え、想定される発話の場所やトーンにおいても異なった実践として捉えうるものである（もちろん、その区別は厳密ではない）。ここで取り上げた演説がどちらかといえば「大道」で不特定多数に話しかける行為であったのに対し、講演は屋内において、来会者に向けて語りかけるという性質を有していた。トーンに関して、例えば神道青年会にも関与した沢田五郎は、講演が「冷静な説明的な手段」であるのに対し説教が「熱情的な直観的な人の心に喰ひ入る方法」であるとし、さらにその担い手を前者は神官神職に、後者は神道教師に結びつけている（沢田五郎「神職の信仰問題」、『明道』第3巻8月号、1918年、3頁）。「学究」との相性が良いのは講演の方であろう。
- 50 タジリといふ青年「神と信仰と青年と」（『神風』第111号、1911年）10～12頁。
- 51 杉島弘道「神道の宗教活動に就て」（第2期『神道』第3号、1928年）32頁、葦津正之「神道青年会とは何ぞや」（同）33、34頁、前掲安藤貞重「神道と日本青年」31頁。
- 52 「神道壮士」という語は例えば、1921年に大本本部を見学した國大の高橋龍雄が、大本の「長髪賊の信徒」を批判する中で用いている（高橋龍雄「大本教見聞記」、『國學院雑誌』第27巻第8号、1921年、69頁）。大本の長髪は、神風会由来ではないのかということが当時から指摘されていた（潭月生「長髪教大本の長髪に就きて」、『神風』第334号、1921年、17頁）。「神道ゴロ」については照本賣の『皇国』が、「神職」と「私利私欲のために脅喝を敢てする神道ゴロ」とを対比しており（無記名「神職に活気あらしめよとは何か」、『皇国』第285号、1922年、4頁）、『皇国』と対立していた宮井らを指す可能性も考えられる。神風会側は、「真摯なる態度を持する浪人」と「乞食的ゴロ神道屋」とを区別したかったようである（無記名「神道ゴロの流行」、『神道青年新聞』第18号、『神風』第272号所収、1919年、6面。筆者は田尻隼人か）。なお、神風会に関わった代表的な「壮士」が朝日平吾であった。朝日については、畔上直樹「大正維新における「国家ノ宗祀」神社観—朝日平吾を手がかりに—」（『國學院雑誌』第120巻第11号、2019年）。
- 53 無記名「神主の弱味に付け込み全国的に詐欺恐喝 日比谷大神宮東照宮琴平もゆする 伊勢神宮奉賛会を組織して」（『読売新聞』第17542号、1926年。以下、同紙は読売新聞記事データベースに拠る）4面、会計部委員「神道青年会の打明け話と斯道各位へのお願ひ」（第2期『神道』第1号、1926年）36頁。なお、宮井が捕まった際の『神風』は、神道界に弱味があったという風聞をどちらかといえば否定し、「好意的」にであれ「浪人」に資金を提供したこと自体が良くなかったと論じている（無記名「宮井事件の波及 果して神職に弱みありや」、『神風』第484号、1926年、19頁）。
- 54 神風子「なまいきな奴」（『神風』第56号、1908年）3面、痴狂「絶叫」（『神風』第65号、1908年）附録1面。筆者「痴狂」は早稲田大学の学生であった飯尾紫明。「某私立大学」がどこかは定かでないが、「皇陵」に関わりうるのは國大ではないだろうか。他に、ある学校の教師が「汝神風会に行くこと勿れ 神風会は猛烈なること獅の如く虎の如くである学生にして若しこの気風に同化せんか恰も火中に油を注ぐが如くである」と述べたという話もあった（無記名「神風会に行く事勿れ」、『神風』第62号、1908年、2面）。

- 55 桜井東花「分派か統一か 明治十七年頃の斯界の言論機関」(『神祇及神祇道』第4巻第9号、1925年) 6～7頁。桜井は『神風』で筆を執っていた時期もあった。
- 56 なお、河野は神風会が活動を開始した1905年の時点ですでに、無我愛運動などが「喧嘩腰」の言や「主義を玩弄する風」を有していたことに対し、「もう少し穏か」な「力」を求めていた(騎西町史編さん室編『河野省三日誌 吾が身のすがた』、騎西町教育委員会、1985年、88～89頁)。
- 57 神風会以降も、葦津耕次郎や小笠原省三といった人物が「神道浪人」としての自認において活動しているが、両者の場合はいずれも社家の出身だった。
- 58 畔上直樹『「村の鎮守」と戦前日本—「国家神道」の地域社会史—』(有志舎、2009年)148～151、286～288頁、小林佐平「二人の青年神職の対話」(『皇国』第298号、1923年)45頁。大正期の『神風』誌上において「神祇道」の用例が多く見られるようになることもこのような変化と関係しているように思われるが、別の機会に検討したい。
- 59 前掲木村悠之介「明治後期における神道改革の潮流とその行方」。先にも引いたように、諸領域の人々が参加した神風会の登場は、その拡大を象徴するような出来事であった。
- 60 前掲木村悠之介「近代における神道青年運動と神道研究の形成」。
- 61 田中義能が初期に登壇した場としては神国青年会の他に神道同志会があり、これも神風会とは関わりの深い団体であったが(前掲木村悠之介「明治後期における神道改革の潮流とその行方」68頁)、神道同志会は万国基督教青年大会に祝辞を送るなど(無記名「万国基督教青年大会と神道同志会」、『神社協会雑誌』第6年第5号、1907年)、他宗教に対し融和的な姿勢を見せていた。『神風』紙上にも、神道同志会の大会に「瑕瑾なからしめ」るために「天幕伝道の弁士」は他宗教への「挑戦的の弁論」を行わず「慎重の態度」を取るべきだ、という投書があるが(菊川流雪「天幕伝道の弁士に望む」、『神風』第39号、1907年、3面)、実際に行われた天幕伝道は冒頭で触れたように、「絶叫して耶穌仏教等の異端を責め」るものであった。そのような他宗教に対する神風会の攻撃的な姿勢を神道同志会会長・千家尊福が嫌ったために、神道同志会と神風会の関係は切れていったという(無記名「神道大会に対して」、『神風』第257号、1919年、5面)。もちろん、融和志向が必ずしも対等な関係を意味するわけではなく、互角な宗教としての対抗が超宗教としての「包摂」「同化」へと移行したに過ぎず、他宗教を批判するような議論も残存している。
- 62 磯前順一の議論においては神道学のみが「当時蔑視されていた神道に理論的アイデンティティを与えた」ものとして特権化されるため(前掲磯前順一『近代日本の宗教言説とその系譜』221頁)、神道界において神道学が何ではなかったのかが見えづらい。すでに教派神道を起点とする「神道改革」の主張によって真正な一宗教としての語りを自ら獲得していた神道が(前掲木村悠之介「明治後期における神道改革の潮流とその行方」)、さらに学問そのものと融合しようとしたことにこそ、「神道学」という言説の特徴が存しているのである。
- 63 無記名「神道青年連盟協会規約」、遠藤隆吉「神道に就いて」、加藤玄智「神道青年連盟協会の天職」(いずれも『神道青年』第1号、1932年、15、35、37頁)。『神道青年』は金光図書館所蔵。1931年は仏教青年運動と反宗教運動の団体がいずれも盛んに結成された年であった(前掲大谷栄一「昭和初期の「新しい仏教」をめぐる動態」77～78頁)。神道青年連盟協会においては例えば、創立協議会に参加した安津素彦が同月、反宗教運動を詳細に論じている(無記名「神道青年連盟協会史」、『神道青年』第1号、1932年、165頁、安津素彦「偶感二題」62～64頁、第2期『神道』第7号、1932年)。
- 64 神道青年連盟協会「神道青年連盟協会趣意書」(同上、14頁)。実際には、1920年代に雑誌『神道世界』(金光図書館所蔵)を発行していた神道青年連盟会という団体が存在し、誌上には田中義能ら神道青年連盟協会に関わることとなる人々も名を連ねていた。例えば、1925年に講演会を開催した際には補永茂助・遠藤隆吉・宮地直一が登壇している(無記名「神道大講演会」、『神道世界』第5巻12月号、1925年、53～54頁)。また、翌年の第6巻2月号では、「本会関係ある方々」として山本信哉・補永・田中の名が挙がっており、田中は「建国神と現人神」を寄稿していた。なお、第6巻新年号の「謹賀新年」欄

には「神道青年連盟会幹事」「大日本神道青年会幹事」として日大・帝大・明大・中央大・早大の学生が一名ずつ記されており、特に、連盟会の総務であった日大の河合裕俊（神道本局の大日本教会に所属）は同会から『神道思想講演集』を刊行している（同会からは他に、『神道世界』主幹の鹿島貞雄／南陵による『神霊療法』が出された）。寄稿者などの傾向からして特に教派神道との関わりが深い団体だったようだが、神道青年連盟協会との関係をはじめ詳細不明な部分が多い。

- 65 日本大学神道青年会は、同大宗教科の学生によって結成された。日本大学百年史編纂委員会編『日本大学百年史』第1巻（日本大学、1997年）は結成を1921年とするが、実際はすでに1920年の時点で、10数名の「神道家の子弟」が「神道青年会を設けて研究もし又社会運動をもなして居」たという（高山章介「神道家の学問」、『神道』第5巻3月号、1920年、23頁。この『神道』は神道本局の機関誌で、國大図書館所蔵）。7月には「現代社会問題に対する神道家の態度」に関して遠藤隆吉・清原貞雄・補永茂助らによる講演会を行い、200余名が来会している（無記名「神道青年会講演会」、『日本法政新誌』第17巻第8号、1920年、72頁）。1925年の時点では「会員五十名」で、「さかんに研究会や公開講演会を開いてゐ」たほか、神道各教派が連合した「神道奨学会」にも関係していたらしい（無記名「世間的にもめざましい学生の宗教運動 各大学の仏教青年会を結び連盟を作り上げた日大学生」、『読売新聞』第17327号、1925年、5面）。同年に行われた関西・中国地方での巡回講演で会場となったのは教派神道の教会のみである（岩井孝一郎「講演部報」、『神道世界』第5巻10月号、1925年、53頁）。
- 66 東洋大学神道研究会については『東洋大学百年史』が詳しい。1926年に大学部学生の発起により創設され、大学の科外特別講座として神道講座を開講、さらに祭式講習を実施して神職資格の授与も行った（東洋大学創立百年史編纂委員会編『東洋大学百年史』通史編I（東洋大学、1993年、1201～1203頁など）。機関誌として『神道思想』を刊行した（1941年の第2巻第2号を國大図書館河野文庫が所蔵）。
- 67 慶應義塾大学神道研究会は、政治科の学生だった鈴木（橋本）四郎が『神道学雑誌』の影響で1927年に結成した団体であり、小柳司気太を会長に戴き、神道座談会や講演会を開催した。会員の多くは「法科、政治科の学生」であったという。鈴木は1932年に『神社と郷土教育』を書き上げ、その後も「神社学」の建設を試みていくが、1937年に31歳で亡くなっている。直後には「今や鈴木君逝いて、第二の鈴木君なく、会の存在は疑はれる有様である、」といわれた。「神道とは直接関係の薄い慶應義塾で、〔…〕神道研究会が出来たと云ふのが、抑々鈴木君の熱心に因る事であつ」たのである（鈴木四郎「神道界の一展望」、『神道学雑誌』第13号、1932年、211頁、無記名「橋本四郎氏追悼会」、『神祇』第16巻第2号、1937年、54頁、橋本四郎「追憶」、『神祇』第15巻5号、1936年、33～35頁）。
- 68 無記名「神道青年連盟協会役員」（『神道青年』第1号、1932年）16～18頁。
- 69 無記名「神道青年連盟 今日産声をあげる」（『読売新聞』第19695号、1931年）4面、前掲鈴木四郎「神道界の一展望」、S生「神道青年連盟協会」（『神道青年』第1号、1932年）162～163頁、無記名「神道青年連盟協会の活動」（『神道青年』第2号、1933年）151～153頁。
- 70 愛国生「神道青年の自覚」（『神道青年』第2号、1933年）128頁。
- 71 神風会中央倶楽部「陣太鼓の御寄贈を仰ぐ」（『神風』第71号、1908年）4面、前掲藤井健志「大日本仏教済世軍の展開と真宗教団」39頁。
- 72 別の事情として、1939年の文部省による調査では國大神道青年会と東洋大神道研究会のみが記載されており、慶大神道研究会に加え、日大神道青年会も消滅した可能性がある（文部省教学局編『学内団体一覧 昭和十四年八月末現在』、文部省教学局、1940年、167、211頁。この史料については三浦周「近代における仏教青年会運動の射程—〈青年〉および〈新仏教〉概念—」、『佛教文化学会紀要』第27号、2019年から示唆を得た）。なお、この調査で「神道」系と区分されている学内団体は6つであり、残りは京都帝国大学と第六高等学校の金光教青年会、「神勅ヲ奉ジ道義的精神ノ涵養ヲ期ス」という第四高等学校の道義会、東京高等獣医学校の明治神宮月例参拝団だと考えられる（前掲文部省教学局編『学内団体一覧』38、225、230、460、479頁）。それ以外に、例えば「日本精神ノ闡明發揚ヲ主旨トスル」国家主義団体は80団体あり、後述する皇国禊会なども「神道」系には区分されていないため（国家主

義団体か修養団体かは不明)、明確に「神道」を掲げていないが神道に関わりうる学内団体はもう少し存在しただろう。

- 73 ただし、國學院大學神道青年会では少なくとも1935年度まで「神道青年連盟理事」が選任されており、1938年の同会例会にも「神道青年連盟ノ東洋大学代表」が来会しているの、どうやら組織自体は存続していたらしい(前掲熊田記「会報」92頁、無記名「神道青年会記事」第3期『神道』新第3巻、1938年、58頁)。
- 74 宮地直一「神道界を回顧して」や植木直一郎「祭祀と信仰」のように、協会での講演原稿は『神道学雑誌』に掲載されることがあった(いずれも1933年の第14号所収)。1934年の同第16号に載っている吉田静致や互理章三郎の論説も前年11月の講演を基にしたと推測できる(無記名「神道青年連盟大講演会」、『神道学雑誌』第15号、1933年、216頁)。
- 75 西田重一「神職の立場より」(第2期『神道』第7号、1932年)26頁、桑貞彦「神道信仰の確立」(同左)47頁。
- 76 前掲西角井正慶「覧会長のころ」18頁。
- 77 無記名「皇典講究所の壮挙冬禊第一回」(『國學院雑誌』第31巻第2号、1925年)103頁、中野佐柿「皇典講究所第二回禊会所感」(『皇国』第320号、1925年)69頁、一会員「禊同人会生る」(第2期『神道』第1号、1926年)33頁など。
- 78 以上、佐藤生「回想録」(『みそぎ』第1輯、1931年。同輯は國大図書館河野文庫所蔵)46頁、前掲西田彰一「躍動する「国体」」149～150頁、中野旭崇「跋」(金井郡治『禊の体験 神の御利益』國學院大學禊同人会、1929年。國大図書館所蔵)41頁、前掲文部省教学局編『学内団体一覧』166、167頁。なお、中野は1928～29年に大病にかかり、そこから「禊の神助」によって回復したことをきっかけに「天晴れ、あな面白、あなさやけ、おけ」を絶叫し、中野家成と改名している(中野家成「追記」、前掲金井郡治『禊の体験』3～4頁)。
- 79 中村光吉「私の体験した禊」、木崎秀子「國學院大學禊会 第九回会員に捧ぐ」、四ヶ所春人「禊の思出」(いずれも『みそぎ』第1輯、1931年、23、24、27、34頁)。
- 80 哲学を論じたのは、阿部国治「禊の根本精神に就いて」(同上)6頁、小池耕治「禊の哲学的考察」(同左)29頁。引用は、前田勝也「強きが上にも強くあれ!!」(同左)12頁。
- 81 無記名「本会々員及び昭和四年度委員名簿」(第2期『神道』第5号、1929年)56頁。
- 82 桑貞彦「禊会員に寄す」(『みそぎ』第1輯、1931年)33頁。
- 83 皇国禊会「皇国禊会社会進出主旨書」(『みそぎ』第4号、1935年)。同号については西田彰一氏よりご教示いただいた。記して感謝の意を表したい。
- 84 前掲河野省三「神道青年会長を辞するに臨みて」1頁、無記名「会報」(第3期『神道』第1号、1936年)73頁。
- 85 前掲西角井正慶「神道青年会の過去と将来」46～47頁。
- 86 西田重一「時局下に於ける神道研究の方向」(新第4巻、1938年)10頁。
- 87 例えば、無記名「社頭から街頭へ」(『皇国』第295号、1923年)巻頭、西角井正慶「神職の社会的活動について」(第2期『神道』第4号、1929年)10頁。
- 88 西田生「想ひ出すまゝ」(第3期『神道』新第5巻、1939年)39～40頁。
- 89 藤本頼生「西田重一」(神社新報創刊七十周年記念出版『戦後神道界の群像』神社新報社、2016年)225頁、平山昇「「体験」と「気分」の共同体—20世紀前半の伊勢神宮・明治神宮参拝ツーリズム—」(『思想』第1132号、2018年)67頁。
- 90 河野省三「神道界の青年学徒に望む」(第3期『神道』新第5巻、1939年)3～4、6頁。
- 91 ただし、ハイキングは天候により中止となった。田中時代は他に、『神道青年会ニュース』を発行したり、道義学会・弁論部と合同で「日本精神顕揚大講演会」を開いている。1939年に学友会の解散問題が持ち上がると、道義学会との合併案や、神職養成課程である神道部の傘下で研究機関となる案が出たが、

結局は独立性を保つ同好会としての存続を選んだ。1941年度の時点でも80名足らずの新入生を得て、総会には52名、研究会には15～40名弱が参加したという（前掲熊田記『会報』91頁、前掲無記名「神道青年会記事」58頁、日幡主幹「此の数年間の神道青年会」、『神道』新第6巻、1943年、94～102頁）。同年には『家のお祭り』も刊行している（國學院大學修練報国団神道青年会編『家のお祭り』、國學院大學修練報国団神道青年会、1941年）。

- 92 『神道』誌上では、仏教的な「宗教復興」ですらも、哲学や「学的論理体系」を超越した「創生力としての神道」によるものとして、西行の歌を引きながら「直覚」されている（都甲「神道直覚の片論」、第2期『神道』第10号、1935年、92頁）。また、対抗先の変化については例えば、神道青年会にも在籍していた中井勝彦が1938年に記した「閻魔の笑ひ」を象徴的なテキストとして挙げたい。「閻魔の笑ひ」は、精神病院に入っている「青年」＝「狂人」の語りを聴くという体の創作文で、二・二六事件を機に殺人をめぐる「社会的矛盾」に悩んだ主人公が、昏睡状態の末に「閻魔の庁」に向かうという筋書きになっている。主人公は道中で「やせた青い顔のやつ」「ニヤケター人」「詩人肌な者」（社会主義青年・墮落青年・文学青年）の議論に耳を傾けたのち、閻魔に「貴様は日本人では無いか。」と「神の教へた道」を説かれて帰ってくる。しかし、「自分の力でどう出来る。出来ない。」と、「狂人」状態は解決されていない（中井勝彦「閻魔の笑ひ」、『雄叫び』第1号、1938年、63～66頁。『雄叫び』は高等神職養成課程であった神道部の「第二学年級会」が発行した雑誌で、國大図書館河野文庫所蔵）。先述した1911年の田尻隼人による創作文も「青年」の狂死と蘇生を描くものであったが、両者を比べるとその心象風景の差異は明らかで、中井において他宗教は対抗先として全く意識されていない。救済されずに最後まで「狂人」のまま終わるというのも異なり、閻魔がいう「神の教へた道」が「按分平等、按分差別、按分平差、不二一体」といった語彙（川面凡児『社会組織之根本原理』、稜威会出版部、1921年、第9章）を引いているのは興味深い。中井のテキストは、観念的な神道論で社会的現実に対峙することの無力さが際立つ内容となっている。
- 93 前掲平山昇「『体験』と『気分』の共同体」55、69～70頁など。
- 94 神職養成部の卒業生らによる瑞垣会の会報では、社務実習生の体験談として、「青年学徒」の「空想的な「理論と実践との食ひ違ひ」、「学問」が評価されないことへの実感が多かったことが述べられている（長島記「社務実習生座談会所感」、『会報』第1号、1935年、19頁）。神社局総務課長が知識階級指導のための「哲学的思想」としての「言挙」を求めているのとは対照的である（中島清二「神社の思想性」、『瑞垣会会報』第4号、1936年）。いずれも國大図書館河野文庫所蔵。
- 95 國大の教員養成課程だった高等師範部の第45期生による「卒業に際しての所感」の中には、河野省三の決まり文句である「神々しさ」「清々しさ」「なつかしさ」に対して「國大ではあれ丈より出ないのかと思ふと何と諸君物足らぬ感なきか。学問と云ふものが自分だけの信念であつては迫力が薄いと思ふ。」と述べる意見や、「惟神の道」の教育は「づるくなる修養」を与えるのみで未練を感じないといった感想も見受けられる（それぞれ石川一雄・梅沢行雄の所感。『若木』創刊号、1937年、11、13～14頁。同誌は國大図書館河野文庫所蔵）。1910年代にはすでに神道青年会に対する高等師範部からの「白眼視」があり、1930年代の学友会では「神道青年会の予算が高等師範部等の主体とする理事で反対されて縮小される」状況すら出てきた（前掲金鑽俊雄「神道青年会の過去を憶ふ」11頁、前掲日幡主幹「此の数年間の神道青年会」94頁）。また、高等神職養成課程である神道部の中にも、「偽装転向」や「左巻き」の級生がいると認識されていた（K「若木春秋」、『雄叫び』第1号、1938年、76、77頁）。
- 96 前掲西角井正慶「神道青年会の過去と将来」47、48～49頁。
- 97 岡市仁志「昭和前期における禊祓行の受容過程一大政翼賛会の国民錬成を中心に一」（『神道宗教』第245号、2017年）47、62頁、前掲西田彰一『躍動する「国体」』158、296頁。1935年の覧は高松宮に対し「神ながらの教」普及を説くなかで「國學院等は私学であつて党をなし利をねらひ、とても学生にしても熱がない。」と語り、「なんと云つても熱あ」る帝大（特に東京帝大）にこそ「教学の中心」としての可能性を見出していた（同左、130頁）。

- 98 河村忠伸「神道青年全国協議会による大嘗祭前の大祓の歴史的意義―「神社神道」を考えるための一事例として―」（『國學院大學研究開発推進センター研究紀要』第13号、2019年）125頁、神青協創立二十周年記念事業実行委員会編『神青協二十年史』（神道青年全国協議会、1969年）6、41～42、97頁。なお、1940年には「全国神道青年連盟」なる団体も存在したようだが、詳細不明である（無記名「戦死者公葬は神式にせよ 第一回神道会議の要請」、『東京朝日新聞』第19533号、1940年、7面）。
- 99 前掲磯前順一『近代日本の宗教言説とその系譜』218頁。
- 100 高野義太郎・上田正登世『日本神社学大綱』（皇典社、1934年）、編輯係「後記」（『折口博士記念会紀要』第2輯、1963年）107頁など。

【付記】

本研究はJSPS科研費 JP20J20683の助成を受けたものである。

明治期実行教の組織形成における漢学者・国学者 —教師養成制度を例に—

今井 功一

はじめに

本稿は、一派特立後の実行教¹が教勢を拡大していくなかで現れてくる、教師養成部門を形成する動機づけについて検討する。ここでは、内務省による訓令を受けて制度形成を余儀なくされた実行教が、明治28年から明治31年にかけて刊行していた月刊誌『惟一』²において、漢学・国学を背景に持つ編集者によって展開された議論を取り上げる。教派神道の「組織化」については井上順孝が考察しており、組織化モデルとして「高坏型」と「樹木型」を提示している³。これは、A教団の傘下にB講社が入ってA教団の一部を形成する、C教団D教会からE教会が派生するといった、本部と支部、あるいは中央と地方、本流と支流がどのような関係を持つかについて説明するためのモデルと言えよう。これまで組織化というといかに他の信仰集団を取り込んでいった（高坏型）のか、新たな教会をどのように建てたか（樹木型）といった考察がなされてきた。それに対し、役割が細分化され、大きくなっていき、部局ができていく、つまり、教祖や指導者との個人的なつながりをもとにした集団だったものが、専門的な役割を持った諸部門ができ、それらによって教団が構成されていく過程⁴を、本稿では教師養成部門を例に論じることとする。

1. 実行教の「組織化」と「神道改革」

実行教は、近世に成立した富士信仰の一形態である不二道をもとに、初代管長である柴田花守が神道や平田国学等を取り入れて教義を再編し、明治15年に一派特立した富士講系教派神道のひとつである。不二道以外のものを取り入れた教義の再編の例としては、不二道において「ものちちはは神道」⁵という世界創造にかかわる神々を「あまつみおやものちちはは天祖參神」すなわち天御中主神、高御産巢日神、神産巢日神の「造化三神」に読み替えるなどの作業が行われた⁶ことなどが挙げられよう。造化三神は平田篤胤によって重視された天御中主神を中心とした三柱の神々であり、平田国学の影響を受けた人々の間で同じように重視され奉斎されることになった。このような不二道という独創的な富士信仰の神道化に対して、反対する勢力を分離した⁷ことで、例えば実行教と同じく富士講系教派神道のひとつであり、「富士講だけでなく富士信仰全体を一つの勢力として統一しようとした」宍野半によって成立した扶桑教⁸などと比べると、実行教は比較的同質性の高い集団だと考えられる。

さて、そうした組織として考えた場合に、実行教の前身である不二道はどのような形態をとっていたのであろうか。不二道においては、小谷禄行三志、理性院行雅といった「大導師」というトップ、各地の信徒である「同気」、さらに同気の中でも「世話役」とか「世話方」とか言われる幹部信徒の別があるが、「不二道の組織は、上下の階層性がないネットワークの集合」⁹であり「手紙・文書・教典類を相互に写し合い流し合う」「回覧ネットワーク」¹⁰と

される。すなわち、各地の同気グループ、あるいはグループ内の同気同士においては上下の別がないネットワークであり、必ずしも組織と呼びうる形態をとっていなかった。そうした集団が、教派神道として特立し、近代教団として個別の専門部門を有する「組織」となっていく。実行教において、個別部門は総務、庶務掛、そして雑誌編集発行部門である惟一社などが形作られていった。そうした中で、教師養成のための機関が求められていく。

教師養成という点と仏教や基督教を含め、現在の大学に連なる諸機関の成り立ちについてはいくつも研究の蓄積がある。神道に限って例示すれば、神道事務局生徒寮¹¹、皇典講究所¹²、また、神道同志会・教派神道連合会と國學院神道講座¹³については研究が知られている。また、富士講の糾合体をもとに実行教と同じく明治15年に特立した扶桑教では、明治16年1月の第1回講習生認証授与式に丸山教会の伊藤六郎兵衛が管長に次ぐ幹部である参元として出席している¹⁴ことが知られているように、当初から教学を講習させる講学校が設置されていた。実行教においては井口喜四郎『神道実行教』¹⁵の発行所「行教々義講究所」が知られている。

では、こうした組織内の各部門は形作るにあたって、どのような動機があったのであろうか。富士講や不二道の歴史には「組織」がないように、不二道あるいは富士信仰の論理には「組織化」していくモチベーションはなく、別の論理で組織が形成されていった。ここでは、「組織化」における実行教本館幹部の姿に注目したい。

実行教は明治20年代から、1教団の枠を越えて、「神道界全体」の改革¹⁶を目指していた。神道改革についての言説が展開される媒体となったのが、彼らの発行する月刊誌『惟一』であった。彼らは実行教内部にとどまらず、神道界全体の牽引を標榜するような言論を展開した。

例えば、日清戦争の「新占領地」へ布教使を派遣する意見記事では、「見よ佛、耶の如き、布教使を派して葬儀に、慰問に、鞠躬尽力機会に乗じて己が教勢を張らんと計るもの、また以て感ずべきものあり、奮起せよ各教神道家諸氏、区々たる小康に安んずべき秋に非ず」¹⁷と論じている。すでに仏教やキリスト教の諸教団が強勢拡張のため教師を派遣して布教に乗出しており、戦死者戦病死者の葬儀や軍隊への慰問といった活動に従事していた。それに対して神道は後れを取っているので、神道界も奮起して教師を派遣するべき、と主張するのである。

また、まさに神道改革をテーマとした社説でも「世界列国の衆庶を感化せんは、亦神道諸教家の一大快事に非ずや（中略）此に於て愈神道革新の焦眉に迫りたるを知るなり」¹⁸とあるように、神道諸派全体に対してその改革を呼びかけている。

こうした動きの中で、明治17年の太政官布達第十九号以降、政府・内務省は各教派・宗派の教団に対し、制度（教規・宗制）の整備を促す行政的措置を取るようになっており、明治18年3月18日には「重要の事項は教規宗制中に編入」¹⁹するよう促され、実行教では同年4月に制定された「実行教教規」で教師について「第七條 教師を教正講義訓導教導職試補ト称スル事／一 教正を正権大中小ノ六級ニ分ツ／一 講義を正権大中小ノ六級ニ分ツ／一 訓導ヲ正権二級ニ分ツ／一 教導職試補」²⁰と規定した。

そうした神道の改革を主張する論調の論説が『惟一』に頻繁に掲載されるようになる時期、21号から31号は勝屋馬三男という人物が、32号から48号は金丸俊胤という人物が編集者や発行兼印刷者といった役職を務めている²¹のである。二人はそれぞれ漢学者あるいは国学者として知られる人物であり、彼らは『惟一』誌上においても特に教師の教育、養成、質の確保

について強い意識を持って目立って活動していた。

2. 勝屋馬三男と教学寮

明治28年5月30日の内務省訓令第9号²²は、「明治23年の小学校令発布により普通教育が普及したことにともない、内務省は「布教伝道の任にあるを以て学識徳行兼備し世上の崇敬欽仰を受くべき」教師であるにもかかわらず、「無学悖徳」の者が少なくないとして、「教師検定条規」を制定して、教規・宗制に盛り込むよう訓令した²³ものであった。教規宗制中に教師検定条規を定めるよう示したこの訓令に呼応して、実行教では、直後の同6月には勝屋馬三男が教師の質を問う、「天下の冗教師を淘汰せよ」と題する論説²⁴を発表した。

明浜と号し、咸宜園最後の塾主として知られる勝屋馬三男は、明治27年に上京した頃から実行教本館に所属していた²⁵。明治3年生まれ勝屋は明治19年に咸宜園での学修を終え、郷里の佐賀で自ら私塾を開いて漢学を教授しており、真宗振風教校等でも漢文を教授していた漢学者であった。咸宜園で学んだ後についた漢学の師、谷口藍田の上京を追うように明治27年頃に上京し、谷口から漢文の教授を受けながら国之礎社の編集にもあたっていたという。明治29年10月から自ら学んだ咸宜園に最後の講師として赴任し、咸宜園が活動を終えてからは各地で漢学を教授したという。漢学者である勝屋が実行教の幹部として本館に入った経緯は不明であるが、明治27年から29年の間、勝屋は『惟一』に論説を寄せている。また、21号（明治28年10月）から31号（明治29年9月）まで『惟一』の編集人をつとめ、本館庶務取扱、北海道布教使、少教正と、惟一社あるいは実行教本館にて多数の役職を歴任した。

勝屋は、この論説で「天下の愚民を籠絡して、その部下に引入し、神の大道を利用して、営利の機会に供す」「五月三十日の訓令は」「憤転じて大いに喜ぶものなり」「訓令の実行を好機会として、更に本源の洗濯、即ち教師採用を販売的に行はずして、純然たる天爵の階級を、試験の上に判別せん」と論じた。各神道教派では教師の辞令を納入される金銭の多寡によって決めており、それが神道全体の信用を失墜させているといい、訓令を受けて教師採用が試験によって行われることで教師の質が確保されるのであれば喜ばしいものであるとする。訓令を政府からの規制管理の強化とは考えておらず、むしろ神道界の是正に資するものと理解している。

この論説で論じているところは実行教内部のみに限定しているわけではなく、当時の神道界全体を指しているのであり、具体的に「天下の愚民を籠絡して、その部下に引入し、神の大道を利用して、営利の機会に供す」と名指ししているのは、神道事務局や大成教などの傘下にあつてマスコミをにぎわすなどしていた天理教やその他の教会・講社を念頭に置いているのであろう。「神道」内部の様々な立場を想起させる。

勝屋は10月には教師検定法についての論説を発表した²⁶。ここで「百尺竿頭更に一步を進めて余は教学寮及び伝習所の設置を望むものなり、教師三分の二は前段に述べたるが如く敗徳非行の徒輩にして授産の法を得せしめされば到底其感化を望むべからず、故に是等の輩は過に我教籍を免除し去り、三分の一、乃ち誨えて之を效すべき中等の教師を教育すべき教学寮伝習所等を設置するの必要あるを覚知すべし」と論じる。前掲の論説にも見られるように、勝屋にとっては三分の二の教師は「其感化を望むべからず」、残りの三分の一のみを教育するためにも教師養成施設である「教学寮」「伝習所」等の設置が必要であるとする。また、いずれの教派も同様に陥っていると指摘して次のように述べる。

「従来天下の教師を補命するに、学の深淺を検せず、義務金の多寡を以て教師の階級を付与したるは、豈た一教一派のみならんや、十二管長皆然り、甚しきは内務省九号の訓令を機会として、管長自ら東西に徘徊し、南北に呼号し、幾千枚の新補又は昇級辞令を濫授して、数百の金円を博得したるものありと聞く、何ぞ其れ無恥の甚しきや、併し是等の事は最早既往に属し、其人を指名して之を譴責するも詮なきを以て、黙して言はざるは仁者の情なり、たゞ今後諸管長の検定法実施に就て大声疾呼して其注意を促し置ざるべからざるは、中等の教師を教育すべき一事是なり、教育を施さずして教師の不都合を責むるは孔子の所謂殺すなり、翻つて顧よ是等不都合の教師を補命したるものは誰ぞや、教師の敗徳非行あるは其責自から帰する所あるべし」

納入される金銭の多寡によって教師の補命が決まる、教師検定條規制定前にあわてて各地の教師希望者に辞令を発しているといった現実がある、低質な教師の責任は各教団・管長にあると勝屋はいう。勝屋は続けて、「故に余は望む、今回規定の検定法により、本部に大学寮を置き管長之を督励し、支部に中学寮を置き教長之を督励し、講社に小学科、伝習所又は夜学会を設け社長之を督励し、宗教界異口同音の淫声を一変して洋々たる妙吟佳誦を聞くに至らしめよ、これ我輩の素願なり。」とする。さらに、具体的な検定方法、教育方法として、検定法を実施するにあたって「本部に大学寮を置き管長之を督励し、支部に中学寮を置き教長之を督励し、講社に小学科、伝習所又は夜学会を設け社長之を督励」すべきとして、試験の実施にとどまらず常設の教育組織として実行教本部に「大学寮」を、日本各地の支部に「中学寮」、講社には「伝習所又は夜学会」と、各地に置かれた教徒グループごとに教育機関を設置すべきだというものである。

3. 神道実行教教師検定條規の制定

こうした、流れの中で、明治28年11月には試験実施の方法を定めた「教師検定法」が誌上に掲載された。

以下、いくつかの条文を抜粋してみよう。

「第一條 教規第三章第七條に規定したる教師の分限及等級は検定條規に依り施行する検定に合格したるものにあらざれば之を授与せず」

「第三條 教師検定は教規第五章第十六條に依り左の二種に分つ

第一種 試験

第二種 特撰」

検定合格者のみを教師に補任するのであるが、検定方法は試験と特撰の二つに分たれた。試験の実施についてどのような記載があるのであろうか。

「第二章 試験

第六條 試験を別ちて教義学科普通学科の二とす乃ち別紙表の如し

第七條 試験は十五級を七種に別ち試験を一種とし他正、権を一種中に包含せしむ

第八條 三種以上を高等試験とし四種以下を尋常試験とす」

実行教の教師の位階は、1級大教正以下、2級権大教正、3級中教正、4級権中教正、5級少教正、6級権少教正、7級大講義、8級権大講義、9級中講義、10級権中講義、11級少講義、12級権少講義、13級訓導、14級権訓導、15級教導職試験と15に分たれている。すなわち第七條の規定では正権中教正が一種、正権少教正が二種、正権大講義が三種、正権中講義

が四種、正権少講義が五種、正権訓導が六種、教導職試補が七種にあたる。正権大教正が含まれないが、後段の規定に正権大教正は管長の特選によるものとあり、試験での検定の対象とされなかったためである。

「第十條 新補試験は十三級以下とす

但第十一條乃至第十三條の場合は此限にあらず

第十一條 官国幣社官司若くは権官司たりしものは教義学科試験を免除し七級以下、其禰宜主典たりしもの若くは満十年府県社以下の神職たりしものは教義学科試験を免除し十三級以下の試験を受くることを得

第十二條 神宮皇学館本科卒業生又は皇典講究所学生証書を有するものは教義学科試験と普通学科試験の全部若くは一部を免除し八級以下、其専科卒業生又は其五等司業以上のものは教義学科試験ヲ免除し十三級以下の試験を受くることを得

第十三條 高等官たりしものは若くは其資格を有するものは普通学科試験を免除し七級以下、判任官たりしもの若くは其資格を有するものは普通学科試験ヲ免除し十三級以下の試験を受くることを得」

試験は訓導以下を受験するところからはじまることとされたが、他の試験等によりその学力あるいは教師の質が担保される場合にはこの限りではなかった。具体的には一定以上の神社での経歴や神宮皇学館や皇典講究所といった教育機関での学修、あるいは官僚として一定程度の位にあるものは、これに限らずそれぞれ定められた級から試験を受けることが許されている。

「第十五條 六級十二級十四級は越級試験を許さす」

6級は権少教正、12級は権少講義、14級は権訓導にあたり、それぞれ教正講義訓導に昇級する場合にはこれを必ず受験することが求められた。特選でもこの3つの級は昇級することは許されず、教正講義訓導の格差を維持することが意図されていると見える。

次に、特選に関する条文を見てみよう。

「第三章 特選

第二十一條 一級二級の教師は一級七名二級二十名の定員を置き其欠員を生ずる場合は試験に依らず管長之を補命す

第二十二條 左項の一に該当すべき教師は其七級より六級、十三級より十二級、十五級より十四級に昇級する場合を除くの外試験に依らず一級を進むることあるへし

- 一 布教使の海外に於て満二年以上勤続するもの
- 二 絶島蛮荒の開教に従事する教師の満二年以上勤続するもの
- 三 現級満三年以上勤続する本館各分局庶務以上のもの
- 四 現級満四年以上本教に勤続し其行徳顕著なるもの
- 五 教義に関する有益の著述を為したるもの

第二十三條 本教教学寮卒業生は試験に依らず八級以下の教師に補するものとす
但優等生に限り七級教師に補することあるへし

第二十四條 本教教学寮の学科程度と同等以上の他神道教派教校卒業生は其教校の卒業証書を有するものに限り試験に依らず本教教学寮卒業生より一級以下の教師に補するものとす

第二十五條 復職のもの又は他神道教派より転属のもの又は明治十七年八月十一日以前教

導職たりしものは試験に依らず其原級より一級以下に補するものとす」

大教正及び権大教正は1級2級にあたり、あらかじめ定められた定員を試験によらずに管長が直接任命することとされている。

また、海外及僻地への布教にあつたもの、その他実務経験を考慮して1級昇進することが可能になっている。ただし、先に触れたように、教正講義訓導にそれぞれ昇級する場合はこの規定を利用して昇進することはできない。

第二十三條と第二十四條の規定が示すように、勝屋が提言した実行教内に設置される「教学寮」という教師養成組織を前提にした条項が見える。しかしながら、少なくともこの時点では、この教学寮あるいは勝屋が構想した各講社付けの「伝習所」は実際には設置されておらず、具体的な規定も定められていない、この条項上にのみ存在しているのであった。「第三十六條 第三章第二十三條第二十四條の場合は追て教学寮設置の上施行す」とするとおり、第二十三條と第二十四條の運用は教学寮が実際に設置されない以上、あくまで理想のうへの条文であつたといえよう。

教義科目には経典、作業、作文、説教の4科目が定められた。経典を例にとると、3～6級では「六国史」、7、8級では「記紀」、9、10級では「古事記 祝詞式」、11、12級では「古語拾遺 參鏡磨草 古道惑問」、13、14級では「大諄辞考 開化古徴 本教大基」、15級では「一行一言 御恩の巻 四民教諭」が指定されている。

11級及び12級の『みかがみときぐさ參鏡磨草』や『古道惑問』は初代管長柴田花守の著作である。また、15級の『四民教諭』は実行教が継承する不二道統においては花守の3代前に数えられる参行祿王、『一行一言』はさらに1代前の一行此花の著作である²⁷。先に触れたように、3、4級が正権中教正、5、6級が正権少教正、15級が教導職試補であるから、初級あるいは下級ほど富士信仰及び不二道色が強く、上級ほど富士信仰及び不二道から離れ、神道然とした試験を受けることになる。これをどう評価するのか判断はにわかには付きかねるが、それが実行教の教派としての基本であるがゆえに、初級の科目が富士信仰及び不二道色を強く帯びているのだと言い得るであろうか。

『惟一』は他教派宗派の教師検定條規についても関心を寄せており、「●神仏各宗教師検定條規 本年五月三十日内務省訓令第九号を以て布達したる同検定規則に準し去九月卅日迄各宗條規を制定して内務大臣の認可を乞ふべき筈なりしが右は中々従来の宗規其他入組みたる事情ありて容易に落着せず今日迄其の認可を得たる分は神道十二派中にて神道本局、黒住教、神宮教及び、我教の四派、仏教四十八宗中にて曹洞宗、真宗本願寺派、誠照寺派の三宗にて余は目下出願中なりと」²⁸報じている。ここに見られるように、実行教の教師検定條規は、教派神道及仏教各宗派を含め全体のうちでは比較的早い時期に定められたものであった。これも神道界を牽引する自負によるものであろう。

さて、明治25年内務省訓令第4号にて官国弊社神職試験規則が定められるが、この試験問題について見てみたい。同規則では、合格者が宮司あるいは権宮司に補される高等試験、禰宜あるいは主典に補される尋常試験の二つの試験が定められていてそれぞれ試験科目が条文中に示されている。同規則は何度か改訂されており、ちょうど各教派が規則制定を求められていた明治二十八年九月に改定された規則では次のようにさだめられている。

「高等試験科目

六国史口述筆答 令義解同上、延喜式同上、万葉集同上、法曹至要抄同上、現行神社法令筆

答、作文（宣命体、公文体）、算術

尋常試験科目

古事記口述筆答、土佐日記同上、職原抄同上、祝詞式同上、現行神社法令筆答、作文（祝詞、公文体）、算術」

また、同じく明治28年9月には社司及び社掌を任用するための社司社掌試験規則も定められていて、社司と社掌それぞれについてやはり試験科目の定めがある。社司については「第七條 社司ノ試験科目左ノ如シ」として「古事記口述筆答、職原抄同上、祝詞式同上、作文祝詞体・公文体、現行神社法令筆答、算術四則」、社掌については「第八條 社掌ノ試験科目左ノ如シ」として「古事記上巻口述筆答、祝詞式同上、作文祝詞体・公文体、現行神社法令筆答、算術四則」が定められている。実行教の検定條規は彼ら自身も早い制定であることに言及するが、こうした先行する規則等から多くを参考にしたものと見られる。

実際の試験は翌明治29年の2月に初回の試験が行われたようで、『惟一』誌上でその開催が告知された²⁹。また同時に、試験に係る人事も発令されており、

「辞令

大教正 林甕臣

教師検定委員長心得ヲ命ス

少教正 柴田孫太郎

少教正 勝屋馬三男

亀井捨吉

山星徳太郎

本館教師試験員ヲ命ス」³⁰

と、勝屋自身も、後に実行教第三代管長に就任する柴田孫太郎らと共に本館教師試験員に名を連ねた。

取り急ぎ教学寮や伝習所の設置なしにスタートした実行教の教師養成であったが、その後も勝屋は、常設の「教育組織」をおくべきだという主張を続けた。「教史の編纂を論じ併せて教学寮の設立を促す」という論説で勝屋は、「教史の編纂を促すと同時に、活ける教史の編成を感ずる也。活ける教史の編成とハ何ぞや、教学寮の設立是れなり。」「今日教学寮を設立して教師を養成するは、教師自身の為めのみならずして、諸君の継続者を得むが為めなり」「一大教史を編成し、以て道祖以下諸君の心法を伝え、其機関作用として、本館に一大学寮を設立し、活ける教史、即ち純然たる潔教師を養成して、諸君の精心をして長く死せしめざるの覚悟なかるべからず」³¹と主張した。

明治29年の夏、「教規追加に基づき本教育英の事業を実行せむか為め去月一日より府下の信徒の青年部を集合し三余の学を奨励し当分夜間を以て皇漢学、英語学、和算、作文、習字の六科目を以て之を教授し居れり」³²と、いよいよ教学寮が開校したと『惟一』は報じた。ただし、この教学寮についてこれ以上詳しい事はわかっていない。また、これ以降、教学寮の動向については『惟一』誌上のほかその他の記述にも触れられることがなく、果たしてこの事業が継続したのか否かを判断することができない。

なお、他教派による同様の教師養成の動きに注目していたようで、『惟一』が「新刊雑誌批評並紹介」で報じている³³興味深い例を次に掲げよう。

「●教義学研究会講義録第一号第二号 本著教学部、普通学部の二門に別つ教学部には古語

拾遺、祝詞式、日本書記、古事記、万葉集、続日本紀宣命、職原抄の講義を載せ普通学部には修身、日本地理、万国地理、漢文、人身生涯の解釈を掲ぐ曩に内務省第九号の訓令發布以来我神道各教ともに教師検定條規を立て不学無文の木強漢にて輒すく教師の資格を授受し能はざる事と為れり而るに因襲の久しき遽に在来又は未来の教師をして学に就き文を修めしむること事情甚だ難きを見る況や禿頭を撫で腕を揮ひ学生の伍伴に列するをや本著は深く憂うるもの、如し即、之を繙きて独修私淑の便を得せしめむが為めに殊に之を奨励せる一種の勸学解たるなり一日学はざれば畢生の恥を貽す今日悟らざれば明日の愚に迄る文明の進化は駟馬の軽車に駕するが如く駸駸として禦むべからず爾の膝下に呱呱喃喃たる少年子弟は既に爾の為に教鞭を執らむとす本著一閱、困学の念、油然として萌ざし来らば蓋し編者の幸ならむ耶、代価は一冊十二錢前納、発行所は東京市小石川区原町四四大成教本部内教義研究会」

大成教の例であるが、古語拾遺、記紀、祝詞式、職原抄といった上に見た実行教及び神社に係る諸規定でも触れられている科目が並ぶ本書は、教師検定條規を定めたうえで知識の授受の方法として大成教内の教義研究会による講義録を出版したというものである。試験方法等を決めたといつて、その試験に出題されるはずの教義や知識の伝授をどのようにするのかは課題であったであろうが、大成教の場合は講義録の出版というかたちをとったものであろう。

勝屋が実行教本館内で特に教師の質確保に論を張ったのは私塾で漢学教授、私立有隣学館と真宗振風教校で漢文教授するなど、教育というバックボーンがあったためではないかと推測される。勝屋は誌上で教義の教授と教師養成のための教学寮や教学校設置の主張を続けたが、31号を最後に辞任し、東京を去った。自ら育った咸宜園へ塾主として赴くことになったためである。とはいえ、咸宜園に戻ったのちの明治30年1月にも少教正から権大教正に任じられており、明治30年11月25日発行の第41号にて「依願免本職 権大教正」の辞令が発される³⁴まで、名目上は実行教の教師であった。

4. 金丸俊胤による『惟一』と実行教の「改革」

勝屋が実行教本館を去った後、実行教本館幹部として教師養成を主唱したのが金丸俊胤であった。金丸は、宮内省宮内官などを務めた佐賀出身の国学者である³⁵。富士信仰の文脈では、彼はむしろ実行教副管長である西川須賀雄の弟子・側近として知られ³⁶、その経歴からは、不二道以来の地方教会や古参信徒の流れにあるというよりもむしろ国学者としての西川の弟子といった印象の強い人物である。金丸は勝屋のあとを引き継いで『惟一』の編集を担った。金丸が編集にあたった時期も、『惟一』誌上では勝屋が編集にあっていた時期と同様に、教校設置についての意見を掲載していた。

金丸は、編集にあたる以前から、寄稿者としてあるいは読者として『惟一』に論説を寄稿して、神道改革の舞台たる『惟一』の誌面刷新、ひいては教団自体の改革を求めていた。「惟一記者に望む」と題する論説では、「熱心以て神道界の革新を論じ鋭意以て教職売買の市場を撃破（中略）の成績は顕然として著名に以て天下公衆の輿論となり遂に明治廿八年の内務省訓令第九号を以て教師検定法を定む」「宜しく無用の記事を省き簡明以て道義を講究するの材料を精選すべし」「本平二翁他の著書を校合摘出し古事記祝詞集五十音文典等の講義録を載せ神名帳考証大神社伝記神名地名物名等の訓解及び講演等を録し教師養成の材料と」³⁷

することを求めていた。この時点で金丸が重視していたのが教師養成という役割であることに注目したい。検定方法が実施され、勝屋が提唱した教学寮が教師検定條規に定められたことを受けたうえで、教師養成のための知識の伝授に『惟一』が活用されるべきであると考えていた。

第32号（明治29年12月）から発行兼印刷者、「本館事務員申付 少教正」³⁸に就任、本館及び唯一社の中心人物となるやいなや、「本月より誌面を改良し教職志願者諸君の為検定試験科目所の講義録を付し以て教義学独習の便を得せしめんと欲す」³⁹と意気込みを示し、先の投稿で示した紙面改革を自ら推し進めていく。同号から48号まで⁴⁰『惟一』発行兼印刷者となり、「小説」「史譚」「今古美談」などの記事の掲載を止めた。また、誌面改革の一つとして「誌上講義」と銘打ち、第32号（明治29年12月）から「古事記上巻講義」と題された記事の連載を開始した。

講義録連載開始に先立ち、「此の講義録は本教々師検定試験に应ぜんとする者をして簡易独習便を得せしむるを目的としまづ古事記より始め漸々祝詞式及び検定試験書目全科に達し読者諸君をして座ながら検定試験各学科を独習研究するの便を与ふる為め次号よりは一層講義録を敷演して教義学普通学の二科に分ちて掲載せんとす受験予備の独習を目的とするを以て敢へて猥りに私意を加へず古事記伝を本とし各大家諸先生の説をも拔萃雑出し又は折衷し或ひは通俗語に約し或ひは之を書し或ひは之を略すなど其躰の一樣ならざるは外飾を捨て只読者諸君をして容易く了解せしむるの便を得せしめんと欲すればなり 何々に曰或ひは何某曰と記し或ひは記せざるが如き一様の定りなきは簡略を旨とし又は錯雑の為読者の疑惑をひきおこす等の恐れあればつとめて了解し易きを旨とすればなり」⁴¹として、単なる誌上講義ではなく、教師検定試験受験者を対象とした検定科目の受験勉強のための講義であることが明示されている。

同時期に誌上で連載された講義録は上の古事記を含め次の3種類である。

古事記講義 14回（32号（明治29年12月）～45号（明治31年3月））

万葉集講義 9回（33号（明治30年1月）～42号（明治30年12月））

日本文典独習 9回（33号（明治30年1月）～42号（明治30年12月））

ただし、途中未確認の号があるのと、前述のとおり48号が最終号である確証がないため、トータル回数には留保が必要である。

金丸はその後、伊那を中心とした多くの信徒と共に教育勅語奉賛のための組織である大日本実行会を組織する。伊那の信徒が「御恩礼式」や「不二道」と無関係な教会講社の増加を嫌ったとする⁴²見方がある。唯一の記事からどのような教会が所属教会として認可されていたのか一例を見てみると、たとえば第26号では遺訓三日市教会、檀原教会、京都八坂教会、富士身祿教院、蠶影山分教会、神鏡講社、蚕影山教会前橋本部といった名称の教会が掲載されており、こうした名前を例にあげるだけでもその多様さが推し量れるであろう。一方で、革新の方向性は実行教が本来依っていた富士信仰ではなく神道界全体へ向いており、それを前提として教師の質を高めることを求め、古事記万葉集等といった国学あるいは神道の学習を教団構成員に求めてもいた。

さらに金丸は「教訓いろは歌略解 大教正原九右衛門翁詠歌 金丸俊胤解」⁴³という連載を始める。この連載は、花守が教訓謡を作り、歌を歌う形で教えを広め、人々を教化しようとしたのにならったもので、伊那の大物信徒である原が歌を作り金丸が解説するかたちを

とっている。金丸は連載の冒頭で、「本教長野県教長大教正原九右衛門翁は該県屈指の富豪にして材学の優長なる行徳の堅固なる齡ひ古稀を越えて強壯なる古仙の風ある」と評価する。少し長くなるが、続く文では「今や百事開陽進歩の今日に当り斯教の振起せざるを慨歎し身を捨て以て本教の拡張を図らんと思ひ起して我家を出られたるは本年七月廿七日にてこれより富岳に登渉し管長殿に随行して東海道を巡教し終りて本館へ来られたるは八月廿四日にてそは原教正の自らものせられし日記に委しおのれ俊胤が本教の事務に従事せし以来規律の擾乱せる布教の退歩せるを憂ひ旧習を革新して以て斯教の隆盛を図らんことを熱望したるもいかにせんおのれ徳薄く才短くして此大業を為し遂ぐることを得ず徒づらに深き怨みを呑みて空しき月日を送りけるに図らずもこたび原教正の来館せられければ其喜びは何に譬へん嬉しさ限りなく我にもあらで永らくの御巡教の労をねぎらひもせずまづ先のおのが心のたけを心傷を打開て申し出けるにそはよけん早く計画てよ申されけるにぞ歡喜雀身の措きどころしらぬまでにうちよろこび夜を日につぎて各県を経巡りて各教長がたの協賛を受け客月四日の大会議を開き斯教拡張の端緒を開くべき愛度萌芽を生出せしは実に此翁の恩師なり嗚呼俊胤が此翁あるは魚の水あるが如く人の空気あるが如し龍となつて以て天に飛揚すべく大魚となつて洋中に浮泳すべし上に高德明智の管長殿あり此翁あり革新以て斯教を拡張する何の難きことかこれあらん実に楽しき極みなりけり」と原については新連載初回とはいえ、大絶賛しているのである。『惟一』を編集し、実行教とその教師、さらに神道の改革を志すものの必ずしも思うようには運べない金丸にとって、伊那の信徒を束ねる大きな力を持ち、本館の在り方に必ずしも全面的に賛同するわけではない原の存在は心強く感じられたのかもしれない。こうしたところに、後に大日本実行会を結成して信徒を分割する金丸と原の繋がりの端緒を見ることはあながち間違いではなからう。

また、教義の教授機関について、「教校設置の必要」と題する論説で次のような議論を展開している。

「夫れ我立教の原旨は天地を以て書籍とし日月を以て照明とし敢て記誦詞章に依らず人造作為の論説に依らず心を以て心に伝へ形式の伝道に非ずして師々相承相伝しつゝ、今日に至れる所以はほかにあらざるなり」、つまり、実行教において教えは文字に書かれたものではなく師弟の実行実践によって伝えられたものであり、「かゝる実行実践以て詞章文字に據らずして組織せられたるの我教も時世の変遷と社界の思潮とに伴はれて教書の編纂教校設置の必要を認むるの期に迫れるに至れり」「近時に至り益我教勢を高め名声を世界に博するや欧米の諸国往々教書送致の需めに接せり」⁴⁴と、必要性について力説するのだが、先に触れた勝屋がいたところに設置されたと報じられたはずの教学寮と同様の事が書かれており、再三の教師養成部の設置はうまくいかなかったのではないかと推測される⁴⁵。その後、実行教は冒頭でも触れた教義講究所を設置し⁴⁶ているが、その設立経緯や実際の運用については不明なことが多い。

「教校設置の必要」が改めて著された同号には、内務省達示として、次のような文書が転載されていることにも注目しておきたい⁴⁷。

「社甲第二十一号

其宗教派ニ於テ設立セル学校ノ調査ヲ要シ候ニ付毎学校ニ就キ左記ノ廉廉詳細取調来ル六月三十日限り調書ヲ作り差出サルヘシ命ニ依リ此段申進候也

明治三十一年五月二十四日

内務省社寺局長久米金彌

実行教管長柴田礼一殿

追テ本文ニ該当ノ学校ノ設備ナキ教宗派ニ於テハ如何ニシテ徒弟ヲ教育スルヤ又其教宗派以外ニ属スル学校ヘ入学セシムルモノニ在テハ其学校名及現ニ入学ノ生徒数並在校中ノ費用支弁方法等取調べ申出ラルヘシ此段申添候也（後略）

続く箇所には「学校ノ名称」や「授業料」、「学校ニ関スル現行ノ諸規則」といった調査事項とその注釈が並ぶ。つまり、各教派で学校を有しているのか否かが問題とされていたのであり、それに対応するべく論じられたのが金丸の「教校設置の必要」であると考えられるであろう。

おわりに

不二道の創始者小谷禄行三志の弟子である柴田花守を中心にした神道化で起きた不二道の分裂による所産である実行教であるが、分裂を経て神道教団として特立したのちの本館では、神道改革を目指して入ってきた勝屋や金丸のような、漢学や国学を背景に持つ幹部が中心的な役割を担っていた。国家から求められた教師の質の確保は、同時に神道教団としての統一性を保つことを求めたであろうが、同時に、多様な信仰集団の受け皿であろうとする神道教派の役割との間に葛藤を生じさせた。

教師養成制度は、訓令によって教規宗制中に教師検定法を制定することを求められる等、基本的には外的要因によって要請されたものであった。しかし、そうした国家の規制だけではなく、漢学塾教師という出自の勝屋や教団改革への意識の高い金丸という実行教内部の側じたいにも教師養成機関形成のモチベーションが存在したのだと言えよう。富士講や不二道に立ちかえる限りは歴史上も復古すべき「組織」がなかったように、不二道あるいは富士信仰の側から「組織化」していくモチベーションはなかったのではないかと考えられ、それらを担ったのは主に、地方教会や不二道以来の古参信徒ではない信徒、言い換えると、富士信仰の集団としてではなく神道教団としての実行教に参加したともいえるべき漢学者や国学者である勝屋や金丸であった。本部の内部でさえも多様な出自の幹部がそれぞれの思惑で教団運営に携わったのち、結果的には教団外部に活躍の場を求めた。勝屋の場合は咸宜園であり、金丸の場合は教育勅語普及のための団体である大日本実行会であった。

注

- 1 特立当初は「神道実行派」、のち「神道実行教」あるいは「実行教」を名乗る。また、戦前の表記においても戦後の宗教法人法下における包括法人としての登記上においても「実」には「實」を用いているが、本稿では常用漢字表により「実行教」の表記を用いる。ただし、引用文中においてはこの限りではない。
- 2 今井功一「富士講系教派神道・実行教の雑誌刊行——実行教本館内惟一社『惟一』目次」『書物出版と社会変容』第21号（『書物出版と社会変容』研究会、2018）
- 3 井上順孝『教派神道の形成』（弘文堂、1991）
- 4 教団のライフサイクルにおける制度化ないし既成化（井上順孝ほか編『新宗教事典』（弘文堂、1990）、55-56頁）についての議論を参考にしている。
- 5 このような角行系富士信仰に特有の文字を、大谷正幸氏は角行系文字と定義している。大谷正幸『角行系富士信仰——独創と盛衰の宗教』（岩田書院、2011）。なお、大谷氏のサイト「富士信仰アーカイ

ブズ <http://fjska.sakura.ne.jp/>にて角行系文字フォントのダウンロードが可能であり、本稿においてもこれを利用した。

- 6 大谷前掲書202頁
- 7 岡田博「実行教と不二道孝心講」(『富士浅間信仰』雄山閣出版1987)
- 8 大谷前掲書225頁
- 9 宮崎ふみ子「近世末の民衆宗教における女性:不二道の場合」『惠泉女学園大学紀要』第31号23-47頁(2019)
- 10 大谷前掲書140頁
- 11 戸浪裕之『明治初期の教化と神道』(弘文堂、2013)
- 12 例えば、藤田大誠「明治後期の皇典講究所・國學院の研究教育と出版活動」『國學院大學校史・学術資産研究』第1号(國學院大學研究開発推進機構校史・学術資産研究センター、2009)、高野裕基「皇典講究所・國學院大學の「神道」研究と道義学科」『國學院大學研究開発推進機構紀要』第9号(國學院大學研究開発推進機構、2017)など。
- 13 中山郁「國學院大學と教派神道—教派神道連合会「神道講座」・御嶽教「地方教学院」の事例から—」(國學院大學研究開発推進センター編『史料から見た神道—國學院大學の学術資産を中心に—』(弘文堂、2009)など
- 14 福田勝水『教祖伝』(扶桑教立教百年記念事業奉賛会、1982)、108頁
- 15 井口喜四郎『神道実行教』(實行教々義講究所、1932年)
- 16 「神道改革」については、木村悠之介「明治後期における神道改革の潮流とその行方」『神道文化』第31号(神道文化会、2019)
- 17 井桁質直「布教師の派遣を望む」『惟一』第13号明治28年2月11-12頁
- 18 「社説 神道改革の期に迫る」『惟一』第16号明治28年5月2-4頁
- 19 明治18年4月18日内務省達丁1号
- 20 「実行教教規」『改正神道教規大全』(報行社、1896)
- 21 なお、勝屋が編集者であった時期の発行兼印刷者には浅沼謙治郎・山星徳太郎、金丸が発行兼印刷者を勤めていた時期の編集者には福井守賀というそれぞれ本館付職員の名が見られる。
- 22 新宗教と訓令9号については藤井麻央「明治中期の宗教政策と神道教派—内務省訓令第九号の金光教への作用」『國學院雑誌』115巻7号2014)に詳しい。
- 23 阪本是丸「近代宗教法制度と国家神道——明治期を中心に——」『宗教法』29号(宗教学学会、2010)
- 24 勝屋馬三男「天下の冗教師を淘汰せよ」『惟一』第17号明治28年6月18-19頁
- 25 勝屋の生涯については、高倉芳男「咸宜園最後の講師勝屋明浜先生」『大分県地方史』56号(大分県地方史研究会、1970)74-93頁によった。
- 26 勝屋馬三男「教師検定法の実施」『惟一』第21号明治28年10月12-14頁
- 27 ただし、『四民教論』は伊藤参行禄王の著作『四民の巻』をベースに改編が加えられていることが指摘されている。大谷正幸『『四民教論』とその周辺 付・既発表論文二編の正誤表』『仏教文化学会紀要』第13号2004、177頁-198頁
- 28 「雑報」『惟一』第23号明治28年12月46-47頁
- 29 「検定事項」『惟一』第23号明治28年12月3-4頁
- 30 「辞令」『惟一』第23号明治28年12月4-5頁
- 31 勝屋馬三男「教史の編纂を論じ併せて教学寮の設置を促す」『惟一』第25号明治29年2月11-12頁
- 32 「本館録事 ●実行教学寮」『惟一』第31号明治29年9月5頁
- 33 「新刊雑誌批評並紹介」『惟一』第32号明治29年10月21頁
- 34 「教報」『惟一』第41号明治30年11月5頁
- 35 『名家伝記資料集成』には「金丸俊胤 カナマルトシタネ／東京住／安政六己未年(二五一九)生／大正十一壬戌年(二五八二)八月歿 六四歳／号 富士廼舎、佐賀県杵島郡佐賀志村生、士族、井上頼園、

黒田清綱に学ぶ／大日本実行會理事、宮内省図書寮出仕、神宮神部署福島支署長」とある。

- 36 西川は出羽三山に宮司として派遣され、当地の神仏分離を強硬に実行するが、金丸はこれに同行している。西川須賀雄『羽黒山日記 ゆくてのすさび 史料集』（出羽三山神社社務所、2009）、『出羽三山史』
- 37 「惟一記者諸君に望む」『惟一』第25号明治29年2月31-32頁
- 38 「任免辞令」『惟一』第32号明治29年12月4頁
- 39 「社告」『惟一』第32号明治29年12月
- 40 第48号が東京大学大学院法学政治学研究科附属近代日本法政史料センター明治新聞雑誌文庫所蔵で確認できる最後の号である。
- 41 「講義録」『惟一』第32号明治29年12月12-15頁
- 42 粟谷真寿美『大日本実行会の成立—被治者の政治行動—』
- 43 「教訓いろは歌略解」『惟一』第40号明治30年10月13-14頁
- 44 「教校設置の必要」『惟一』第48号明治31年6月1-4頁
- 45 『惟一』の刊行自体が48号で終わってしまい、ここで展開された活動はいずれも同時期に終息したものと推測される。
- 46 文部省宗教局 編『宗教制度調査資料 第2輯』（文部省宗教局、1926）
- 47 「内務省達示」『惟一』第48号明治31年6月10-11頁

スタッフ紹介

※ 氏名、現職、専門分野、担当研究事業、および2019年度の研究業績について紹介します。今年度新任のスタッフに関しては、研究紹介および2018年度以前の研究についても掲載します。なお、掲載順は担当研究事業を基に、現職・五十音順に従うものとします。

平藤喜久子 所長・教授 神話学・宗教学

担当研究事業「デジタル・ミュージアムの運営および日本の宗教文化の研究と教材の国際発信」

[単行本]

- ・『世界の神様 解剖図鑑』エクスナレッジ、2020年3月、全167頁。
- ・『いきもので読む、日本の神話』東洋館出版、2019年7月、全160頁。

[論文]

- ・「神話学と大嘗祭」『神道宗教』第254、255号、神道宗教学会、2019年7月319-348頁。

[口頭発表]

- ・「植民地主義と日本神話」国際シンポジウム「マヤ文明」と「日本神話」—近代知が紡ぐ地の「記憶」、科学研究費補助金（基盤研究C）「近代以降の「神話」概念の包括的再検討とその社会的意義の解明」（課題番号：18K00506）主催／神戸大学国際文化学研究推進センター共催、於：白鹿記念酒造博物館 記念館会議室、2019年11月9日。
- ・「神の姿に見る古代と現代」ワークショップ「近現代日本の宗教文化と「古代」、ハーバード大学ライシャワー日本研究所、國學院大學研究開発推進機構古事記学センター、日本文化研究所共催、於：ハーバード大学ライシャワー日本研究所、2019年11月1日。
- ・（講演）「日向神話の動物たち」神話のふるさと県民大学—宮崎県立看護大学・宮崎県立図書館 主催リレー講座一、於：宮崎県福祉総合センター4階大研修室、2019年9月7日。
- ・“Young People’s view of death and life in modern Japan” 35TH BIENNIAL ISSR CONFERENCE, BARCELONA, 2019, International Society for the Sociology of Religion（国際宗教学会）, 於：バルセロナ現代文化センター、2019年7月9日。

[その他]

- ・監修『幸せ運ぶ! ニッポン神社めぐり (NHK趣味どきっ!)』NHK出版、全144頁、2019年11月。
- ・監修『縁切り神社でスッキリ! しあわせ結び』WAVE出版、全144頁、2019年6月。
- ・（テレビ出演）「幸せ運ぶ! ニッポン神社めぐり」NHK Eテレ、2019年12月～2020年1月。

黒崎浩行 教授 宗教社会学、現代社会と地域神社

担当研究事業「デジタル・ミュージアムの運営および日本の宗教文化の研究と教材の国際発信」

[単行本]

- ・『神道文化の現代的役割—地域再生・メディア・災害復興』弘文堂、2019年12月。

[口頭発表]

- ・「災害後の集落の変化と祭礼文化の包摂性」日本宗教学会第78回学術大会、於帝京科学大学、2019年9月15日。

藤澤紫 教授 日本美術史・浮世絵・江戸文化論・比較芸術学

担当研究事業「デジタル・ミュージアムの運営および日本の宗教文化の研究と教材の国際発信」

[単行本]

- ・監修・執筆『浮世絵ガールズ・コレクション—江戸の美少女・明治のおきょん—』國學院大學博物館、2019年6月。

【論文】

- ・「浮世絵の日本美術」古田亮監修『教養の日本美術史』第12章、ミネルヴァ書房、2019年11月7日。

【口頭発表】

- ・（講演）「もっと！遊べる浮世絵！」「特別展 くもんの子ども浮世絵コレクション 遊べる浮世絵展」記念講演会、於練馬区立美術館、2019年6月2日。
- ・（講演）「浮世絵とジャポニスム」東京女子大学比較文化研究所主催公開講演会、於東京女子大学講堂、2019年6月13日。
- ・（講演）「浮世絵と江戸の出版界」國學院大學栃木短期大学日本文化学科講演会、於國學院大學栃木短期大学40周年記念館、2019年7月3日。
- ・（講演）「女性美と粹 —江戸・明治の美人に学ぶ—」國學院大學博物館企画展「浮世絵ガールズ・コレクション」、於國學院大學渋谷キャンパス常磐松ホール、2019年7月27日。

【その他】

- ・（展覧会監修）「特別展 くもんの子ども浮世絵コレクション 遊べる浮世絵展」於練馬区立美術館
- ・（テレビ監修）「浮世絵EDO LIFE」NHK BS4K、2019年4月～2020年3月（2019年度分）
- ・（連載）「浮世絵と遊ぼう！（13）～（24）」時事通信（河北新報、八重山毎日新聞、長野日報、陸奥新報、苫小牧民報）2019年4月～2020年3月（2019年度分）

遠藤潤 教授 宗教学、日本宗教史（近世・近代）

担当研究事業「『國學院大學 国学研究プラットフォーム』の展開と国学史像の再構築」

【論文】

- ・「平田篤胤『仙境異聞』の編成過程—〈かたり〉と書物のあいだ—」『國學院雑誌』第120巻7号、2019年7月、1-20頁。

【口頭発表】

- ・「平田国学における古代の神のリアリティー—近代に向かって—」国際ワークショップ「近現代日本の宗教文化と「古代」」（ハーバード大学ライシャワー日本研究所、國學院大學研究開発推進機構古事記学センター・日本文化研究所共催）、於ハーバード大学ライシャワー研究所、2019年11月1日。

松本久史 教授 近世・近代の国学・神道史

担当研究事業「『國學院大學 国学研究プラットフォーム』の展開と国学史像の再構築」

【論文】

- ・「昭和戦中期の国学研究—藤田徳太郎を例に一」國學院大學研究開発推進センター編 阪本是丸責任編集『近代の神道と社会』、2020年2月、643-666頁。
- ・「荷田春満の『古事記』解釈と「神祇道德説」」國學院大學研究開発推進機構 古事記学センター編『古事記学』第6号、2020年3月、213-227頁。

星野靖二 准教授 近代日本宗教史

担当研究事業「デジタル・ミュージアムの運営および日本の宗教文化の研究と教材の国際発信」

【論文】

- ・「『経世博議』 解題」『國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所年報』第12号、2019年9月、33-46頁。
- ・「中西牛郎——「新仏教」の唱導者」高満也・吉永進一・碧海寿広編『日本仏教と西洋世界』法蔵館、2020年3月、291-318頁。

【口頭発表】

- ・“Nakanishi Ushirō: His Biography and the History of Religions” in the panel “Reconsidering the Role of Biography in the Study of Modern Japanese Buddhism” organized by Orion KLAUTAU, at the 78th Annual Conference of the Japanese Association for Religious Studies (JARS), held at Teikyo University of Science, 2019.9.14.

エリック・シッケタンツ (SCHICKETANZ, Erik)

助教 近代日本の宗教、近代中国の宗教、宗教と政治

担当研究事業「デジタル・ミュージアムの運営および日本の宗教文化の研究と教材の国際発信」

吉永博彰 助教 中世・近世の神道史、神社有職故実

担当研究事業「デジタル・ミュージアムの運営および日本の宗教文化の研究と教材の国際発信」

[論文]

- ・「近世大嘗祭の次第と運営―「近世大嘗祭儀・行事一覧」の作成と整理・分析に寄せて―」『國學院大學研究開発推進機構 日本文化研究所年報』12号、2019年9月、47-70頁。
- ・「近世大嘗祭に於ける荒見川祓の研究―儀式次第と作法・祓具の分析を手掛かりとして―」『國學院雑誌』第120巻11号、2019年11月、183-203頁。

[口頭発表]

- ・(ミュージアムトーク)「女性天皇の大嘗祭―後桜町天皇の事例―」、〔企画展〕「大嘗祭」、於國學院大學博物館、2019年11月9日。

[その他]

- ・(口絵解説)「御即位図」「御即位式之御図」『季刊 悠久』第157号、おうふう、2019年4月、89-91頁。
- ・「近世の祓の儀礼と用具」『祓の信仰と系譜』國學院大學研究開発推進機構学術資料センター(神道資料館部門)、2019年6月、14-15頁。
- ・(図録論考)「近世大嘗祭の次第―後桜町天皇の事例から―」『〔企画展〕大嘗祭』國學院大學博物館、2019年11月、82-83頁。
- ・(編集協力)「〔祭祀のルーツを追う旅へEP1〕千数百年続く「まつり」はどう生まれたのか―大嘗祭天皇みずから平安を願う意味―」『Discover Japan』Vol.98、2019年12月、134-135頁。
- ・(編集協力)「〔祭祀のルーツを追う旅へEP2〕古代の人々が「鏡」に感じた特別な意味―副葬品や三種の神器から知る神秘性―」『Discover Japan』Vol.99、2020年1月、114-115頁。
- ・(編集協力)「〔祭祀のルーツを追う旅へEP3〕日本各地に広まり、やがて消えた「埴輪」―その存在の歩みをたどる―」『Discover Japan』Vol.100、2020年2月、204-205頁。
- ・「近現代の神社と祭り」『四季の祭りと神道の歴史』國學院大學研究開発推進機構学術資料センター(神道資料館部門)、2020年2月、18-19頁。
- ・(編集協力)「〔祭祀のルーツを追う旅へEP4〕神聖視された「勾玉」の実態―人々がその貴重さに魅せられたわけ―」『Discover Japan』Vol.101、2020年3月、150-151頁。

武田幸也 助教 近代神道史・国学

担当研究事業「〔國學院大學 国学研究プラットフォーム〕の展開と国学史像の再構築」

[論文]

- ・「近代の大嘗祭論と天皇像」國學院大學研究開発推進センター編 阪本是丸責任編集『近代の神道と社会』、2020年2月、527-548頁。

[口頭発表]

- ・(講演)「近代の大嘗祭理解と天皇像―アメリカ派遣研究を踏まえて―」、於院友神職会総会、2019年10月24日。

キロス・イグナシオ 客員研究員 上代文学

担当研究事業「デジタル・ミュージアムの運営および日本の宗教文化の研究と教材の国際発信」

【その他】

- ・(書評)「『古事記』の稲葉の白兔挿話における八十神の身分をめぐる」『劇場文化』静岡県舞台芸術センター、2019年6月 (<https://spac.or.jp/culture/?p=822#more-822>)
- ・(翻訳) Studies on the Kojiki (『古事記学』第4～6章英訳, in cooperation with Kate Wildman Nakai) 『古事記学』國學院大學二十一世紀研究教育計画委員会研究事業文部科学省市立大学研究ブランディング事業成果報告論集、第6号、2020年3月、245-308頁。

丹羽宣子 PD研究員 宗教社会学

担当研究事業「デジタル・ミュージアムの運営および日本の宗教文化の研究と教材の国際発信」

【口頭発表】

- ・「『〈僧侶らしさ〉と〈女性らしさ〉の宗教社会学』書評会&若手研究発表会」「仏教と近代」研究会、於國學院大學、2019年7月14日。

【その他】

- ・「天皇代替わりに伴う諸儀礼とそれをめぐる議論」『ラク便り』第83号、2019年8月、45-50頁。
- ・(コラム)「連載〈23〉色香美味 次世代のトップランナー紹介 研究から見えるのは、未来への道すじ 宗教社会学者 丹羽宣子さん」『教誌 正法』第159号、2019年9月、40-43頁。
- ・「大嘗祭」『ラク便り』第85号、2020年2月、39-43頁。

高田彩 PD研究員 宗教社会学

担当研究事業「デジタル・ミュージアムの運営および日本の宗教文化の研究と教材の国際発信」

「國學院大學 国学研究プラットフォーム」の展開と国学史像の再構築」

【論文】

- ・「武州御嶽山の社会組織—女性の役割に注目して—」『宗教と社会』25号、2019年6月、81-95頁。
- ・「宿坊を支える人々—武州御嶽山と山麓地域に注目して—」『次世代人文社会研究』16号、2020年3月、211-231頁。

【口頭発表】

- ・「近現代における山岳聖地の生存戦略」日韓次世代学術フォーラム第16回国際学術大会、於ハンシン大学校(韓国)、2019年6月29日。
- ・「武州御嶽山と山麓住民—宿坊運営における女性従業員に注目して—」日本宗教学会第78回学術大会、於帝京科学大学、2019年9月14日。

河合一樹 PD研究員 日本思想史

担当研究事業「國學院大學 国学研究プラットフォーム」の展開と国学史像の再構築」

【研究紹介】

博士論文では、本居宣長の思想と近世の「正名」を巡る議論との関わりについて思想史的研究を行った。近世においては日本と中国とを比較して、様々な事物・制度の名称をどのようにするべきかということが、「正名」という言葉とともに多くの儒者・国学者によって論じられたが、宣長について考える上でも重要である。具体的には、第一に宣長が儒学を否定しながら孔子のみを高く評価する理由を「正名」との関わりから考えた。第二には、宣長が『古事記伝』において構想する古代日本の「名」の在り方と近世の「正名」論との関係を考察した。その中でウヂカバネの問題を扱ったことをきっかけに、今後は近世における『姓氏録』受容の研究を行いたい。

【論文】

- ・「死者の名を呼ぶ:本居宣長における諱の問題」『倫理学年報』67号、2018年4月、277-291頁。
- ・「宝暦期の「正名」:留守希斎『称呼弁正』を手掛かりに」『求真』21号、2019年3月、17-29頁。
- ・「『古事記伝』と『姓氏録』:本居宣長における「ウヂカバネ」の成立」『日本思想史学』51号、2019年10月、64-81頁。

[口頭発表]

- ・「孔子はよき人—本居宣長の孔子観とその周辺」第15回日韓次世代学術フォーラム、於静岡県立大学、2018年6月30日。
- ・「姓氏・天皇・政—本居宣長の描いた古の社会秩序」第77回日本宗教学会、於大谷大学、2018年9月8日。
- ・「本居宣長の孔子観と『古事記』序文解釈」日本思想史学会2018年度大会、於神戸大学、2018年10月14日。
- ・「『古事記伝』における神の注釈と名の注釈」第36鈴屋学会、於本居宣長記念館、2019年4月21日。

大場あや 研究補助員 宗教社会学

担当研究事業「デジタル・ミュージアムの運営および日本の宗教文化の研究と教材の国際発信」

[研究紹介]

地域社会における葬制が、近代化とりわけ戦後の社会変動のプロセスにおいてどのような変容を遂げてきたのか、葬儀の執行を支えた互助組織に着目し、検討している。これまでは主に山形県最上地方にてフィールドワークを行い、契約講と呼ばれる互助組織の変容を、地域特性や葬法の違い、社会組織・社会関係との関連において分析してきた。最近では、生活改善運動・新生活運動などの官製運動が各地域でどのように展開され、冠婚葬祭に影響を与えたのか、地元の新報・雑誌等の文献資料を中心に調査を進めている。今後は、東アジア圏における比較を視野に入れ、生活の改善・儀礼の合理化を推進する政策・運動と葬送墓制の関係についてアプローチしていきたい。

[論文]

- ・「契約講研究の成果と課題—分野横断的な検討から—」『大正大学大学院研究論集』42号、2018年3月、116-94頁。
- ・「地域社会と葬儀の互助組織—農村と町場の契約講の比較から—」『宗教と社会』24号、2018年6月、49-63頁。
- ・「葬儀をめぐる新生活運動の現在—群馬県・栃木県を中心に—」『株式会社冠婚葬祭総合研究所論文集 平成30事業年度（葬祭編）』、2019年5月、43-50頁。

[口頭発表]

- ・「『宗教浮動人口』と骨仏—その先駆性と意義—」（テーマセッション「『現代人の信仰構造』の成果と課題」第3報告）「宗教と社会」学会第27回学術大会、於京都府立大学、2019年6月9日。
- ・「『生活改善』と葬儀の簡素化—戦後山形県における新生活運動の展開—」日韓次世代学術フォーラム第16回国際学術大会、於韓神大学校、2019年6月29日。
- ・「葬儀の簡素化と香典—群馬県・栃木県における「新生活」の定着—」日本宗教学会第78回学術大会、於帝京科学大学千住キャンパス、2019年9月15日。
- ・「新生活運動と『冠婚葬祭の改善』—山形県における展開—」第92回日本社会学会大会、於東京女子大学、2019年10月6日。

[その他]

- ・（研究動向）「世俗化論・合理的選択理論」寺田喜朗・塚田穂高・川又俊則・小島伸之編『近現代日本の宗教変動—実証的宗教社会学の視座から—』ハーベスト社、2016年6月、147-161頁。

小高絢子 研究補助員 宗教社会学

担当研究事業「デジタル・ミュージアムの運営および日本の宗教文化の研究と教材の国際発信」

[口頭発表]

- ・「観光政策における「仏教らしさ」の活用—柴又帝釈天とその周辺地域を事例として」観光光学学会第8回大会、於立命館アジア太平洋大学（APU）、2019年7月7日。

宮澤安紀（旧姓：内田） 研究補助員 宗教社会学

担当研究事業「デジタル・ミュージアムの運営および日本の宗教文化の研究と教材の国際発信」

【研究紹介】

私が取り組んでいる研究の目的は、現代社会における葬送文化の変容を対象に、それらと相関関係にある社会構造や死生観の変容を含めて分析することにある。近年では研究対象を日本からイギリスへと移し、近代化や世俗化がもたらす、異なる歴史・文化・社会制度を持つ地域において同時期に進行する葬送の変容の圧力と、それぞれの地域におけるその現れ方の違いに関心を持っている。現在の研究では特に、1990年代以降世界各国で環境に配慮した葬送が登場し定着した現象に着目し、伝統宗教の衰退や環境保護の倫理観の台頭を踏まえ、日英を事例にその背景と現状を比較の視点から分析している。

【論文】

- ・（内田安紀名義）「現代日本における葬送と自然—「自然に還る」というイメージをめぐる—」『宗教と社会』23号、2017年6月、15-29頁。
- ・（内田安紀名義）「イギリスにおける自然葬の出現と普及—その社会的要件から—」『宗教学論集』38輯、2019年3月、3-24頁。
- ・「現代イギリスにおける死生学の特徴とその動向—雑誌Mortalityの分析を中心に—」『現代宗教2020』、2020年1月、209-238頁。

【口頭発表】

- ・“Tree Burial in Contemporary Japan: What are the commonalities and differences from British natural burial?”, 14th International Conference on the Social Context of Death, Dying and Disposal, University of Bath, 2019.9.4-7.
- ・“Japanese tree burial and its social context: cemetery management issues in contemporary Japan”, New Research on Death and Dying Trends in Asia, University of Bath, 2019.11.27.

木村悠之介 研究補助員 近代日本宗教史・神道史

担当研究事業「『國學院大學 国学研究プラットフォーム』の展開と国学史像の再構築」

【研究紹介】

近代を生きた人々が、神道は「宗教」になりうるか／なるべきか、「言挙げ」すなわち言語表現・教義形成との関係において模索しつづけた過程を研究している。これまでは、明治中後期における教派神道や大学の周辺で、新仏教運動やユニテリアニズムを意識した「神道改革」の動きが起こり、当時は教派神道に局限されていた「神道」概念が、他領域にも拡張していったことなどを論じてきた。現在は、神道改革や神道青年運動など、神道学という学知の成立にもつながる知識人宗教的な動向を狭義の「近代神道」と概念規定したうえで、大正期以後の神道界において「学」なるものの位置づけがどのように変動していくのかを検討したいと考えている。

【論文】

- ・「明治後期における神道改革の潮流とその行方—教派神道と『日本主義』から「国家神道」へ—」『神道文化』第31号、2019年6月、47-81頁。

【口頭発表】

- ・「近代神道における革命・出版・青年—神風会から会通社へ—」第20回「仏教と近代」研究会、於國學院大學、2019年7月13日。

【その他】

- ・（研究ノート）「近代日本キリスト者の神道観に関する資料目録（1）」（齋藤公太と共著）『國學院大學

研究開発推進機構日本文化研究所年報』第11号、2018年9月、106-113頁。

- ・「附録」(入倉滉太・藤田大誠と共著) 山口輝臣編『戦後史のなかの「国家神道」』山川出版社、2018年11月、附録1-61頁。
- ・(資料紹介)「一八九六年における「国家神道」の用例―道生館『闇夜の灯』の神宮教批判とその反響を通して―」『神道宗教』第253号、2019年1月、77-104頁。

井上順孝 客員教授 宗教社会学、認知宗教学

担当研究事業「デジタル・ミュージアムの運営および日本の宗教文化の研究と教材の国際発信」

[論文]

- ・「新興宗教から近代新宗教へ―新宗教イメージ形成の社会的背景と研究視点の変化」堀江宗正編『宗教と社会の戦後史』東京大学出版会、2019年4月、267-293頁。
- ・“Violence and How to Recognize Perceptual Bias: Reflections on Twenty Years of Research” *Japanese Journal of Religious Studies*, 46-1, 2019.5., pp.129-136.
- ・「現代における葬送儀礼の変容に関する認知宗教学的分析の試み」『中央学術研究所紀要』48号、2019年11月、3-33頁。

[口頭発表]

- ・(講演)「グローバル時代に宗教文化はどうなる？」於川内高校、2019年4月16日。
- ・テーマセッション「宗教をめぐる調査・研究の倫理」(コメンテータ)、「宗教と社会」学会、2019年6月9日。
- ・「現代における葬儀の変容に関する認知宗教学的な分析の試み」日本宗教学会、於帝京科学大学、2019年9月15日。
- ・(講演)“Contemporary Religious Movements in East Asia,” 於西江大学校(韓国)、2019年11月4日。
- ・(講演)「宗教と食文化―イスラム教、ユダヤ教、ヒンドゥー教からグローバル化を学ぶ」アジア太平洋フォーラム、於赤坂エクセルホテル東急、2019年11月21日。
- ・(講演)「ボーダレス化する世界と日本の宗教文化」於名古屋学院大学、2019年12月1日。
- ・(講演)「宗教研究のシナプスの発想―つなぐことで生まれるもの―」嘲風会、於東京大学、2019年12月22日。
- ・(講演)「宗教社会学」於警察大学校、2019年6月6日、8月21日、11月27日。

[その他]

- ・ワークショップ「生活の中で直面する世界の宗教文化―食・服装・忌避などへの理解」(コメンテータ)、國學院大學、2019年6月29日。
- ・企業研修講師、肥後銀行、2019年7月18日。
- ・(寄稿)「リベラルな知識人の集い実感 米芸術科学アカデミー入会式出席」中外日報2019年11月15日。
- ・国際シンポジウム「暴力・過激思想と社会はどう向き合うのか：パキスタン、インドネシア、オウム真理教の事例から考える」(コメンテータ)、笹川平和財団、2020年1月17日。
- ・(書評)四方田犬彦『聖者のレッスン』、読書新聞、2020年1月27日。
- ・(研究抄録)「現代における葬儀の変容に関する認知宗教学的な分析の試み」『宗教研究』93巻別冊、日本宗教学会、2020年3月。
- ・(テレビ出演)「Abema Prime」アベマTV、2020年3月4日。
- ・(書評)レザー・アスラン著『人類はなぜ(神)を生み出したのか?』、週刊読書人、2020年3月27日。

櫻井義秀 客員教授 宗教社会学 アジア宗教文化論

担当研究事業「デジタル・ミュージアムの運営および日本の宗教文化の研究と教材の国際発信」

[単行本]

- ・ Fenggang Yang, Francis Jae-ryong Song, and Sakurai Yoshihide eds., *Religiosity, Secularity and Pluralism in the Global East*, MDPI, Basel Switzerland. 2019.6., pp.1-145.

【論文】

- ・ (依頼論文) 「カルト・脱カルト」『臨床心理学—人はみな傷ついている—トラウマケア』第20巻第1号、2020年1月、82-85頁。

【口頭発表】

- ・ 「カルト視される教団への調査と圧力の諸相」テーマセッション「宗教をめぐる調査・研究の倫理—現代的課題にどう向き合うか—」「宗教と社会」学会、於京都府立大学、2019年6月9日。
- ・ Convener and presenter of Thematic Session, “Well-being and Well-dying in medicalized longevity society: How do our religious culture consider the dignity of life and death?” International Society for the Sociology of Religion, Barcelona University, Barcelona, 2019.7.9.
- ・ “From ideological right to survivalist’s right: Two case studies of the religious right since the 1960s in Japan” Thematic Session of Religious Right, International Society for the Sociology of Religion, Barcelona, 2019.7.11.
- ・ East Asian Society for the Scientific Study of Religion (EASSSR) 2nd Annual Meeting at Hokkaido University 主催 Yoshihide Sakurai, “East-West Encounters and Religious Change in Modernizing East Asia” as opening address; Yoshihide Sakurai, “Sociology of Religion in Japan and its current situation”, as the Panelist at the Presidential Panel, Hokkaido University, 2019.7.27-28.
- ・ (招待講演) 「大学のカルト問題—アレフへの対応を中心に」全国大学保健管理研究集会、於札幌コンベンションセンター、2019年10月9日。
- ・ 大谷大学フェアシンプोजウム「人口減少時代の現在と次世代の育成」パネリスト「人口減少時代の生き方—フルスベックの人生を問い直す」於札幌国際ビル、2019年10月20日。
- ・ (講演) 「人は宗教でしあわせになるか」北海道大学大学院文学院人文学カフェ、於紀伊國屋書店、2019年11月9日。
- ・ “Religion and Modernity in East Asia: For understanding historic arche and legitimization in postcolonial times”, 2019 SNU-HU JOINT SYMPOSIUM, 21st Century Sociological Imagination and Thinking: How can we facilitate the reconciliation and dialogue in East Asia?, Seoul National University, 2019.11.23.
- ・ “Religion and Wellbeing: Viewpoints and Perspectives of Recent Research in Japan”, A Symposium on Measuring Religiosity in the Global East, Purdue University, 2019.12.2-3.
- ・ “Engaged Buddhism in Thailand and Japan: “Development Monks” and Disaster Relief”, International Japan Studies, Working Group 2: Religion by Godart, Clinton, Tohoku University, 2019.12.14.

【その他】

- ・ (評論) 「現代日本の宗教最前線71 「自己完結型人生観で真の幸福になれるか」『月刊住職』2019年4月号、136-139頁。
- ・ (評論) 「現代日本の宗教最前線72 「家を失った現代の葬儀はどこへ向かうのか」『月刊住職』2019年5月号、134-137頁。
- ・ (評論) 「現代日本の宗教最前線73 「女性僧侶に女性らしさは必要なのか」『月刊住職』2019年6月号、138-141頁。
- ・ (評論) 「現代日本の宗教最前線74 「家族葬時代になる家族墓のゆくえ」『月刊住職』2019年7月号、150-153頁。
- ・ (評論) 「現代日本の宗教最前線75 「これからの遺体・遺骨はどうすればよいか」『月刊住職』2019年8月号、156-159頁。
- ・ (評論) 「現代日本の宗教最前線76 「樹木葬という墓がなぜうけるか」『月刊住職』2019年10月号、148-

151頁。

- ・(評論)「現代日本の宗教最前線77 「おとなのひきこもりをどうしたらよいか」『月刊住職』2019年11月号、140-143頁。
- ・(評論)「現代日本の宗教最前線78 「安楽死尊厳死の自己決定権問題」『月刊住職』2019年12月号、142-145頁。
- ・(評論)「現代日本の宗教最前線79 「全世代に心のケアが必要になった」『月刊住職』2020年1月号、136-139頁。
- ・(評論)「現代日本の宗教最前線80 「何を学ぶべきか 老後レスを生きる覚悟と知恵」『月刊住職』2020年2月号、136-139頁。
- ・(評論)「現代日本の宗教最前線81 「誰にもサポートが必要な時代になった」『月刊住職』2020年3月号、142-145頁。

土屋博 客員教授 宗教学

担当研究事業「デジタル・ミュージアムの運営および日本の宗教文化の研究と教材の国際発信」

ナカイ・ケイト (NAKAI, Kate W) 客員教授 日本思想史

担当研究事業「デジタル・ミュージアムの運営および日本の宗教文化の研究と教材の国際発信」

ノルマン・ヘイヴンズ (HAVENS, Norman) 客員教授 日本宗教史、日本の民間信仰

担当研究事業「デジタル・ミュージアムの運営および日本の宗教文化の研究と教材の国際発信」

山中弘 客員教授 宗教社会学

担当研究事業「デジタル・ミュージアムの運営および日本の宗教文化の研究と教材の国際発信」

林淳 客員教授 日本宗教史

担当研究事業「[「國學院大學 国学研究プラットフォーム」の展開と国学史像の再構築]

天田 顕徳 共同研究員 宗教社会学・民俗学

担当研究事業「デジタル・ミュージアムの運営および日本の宗教文化の研究と教材の国際発信」

[単行本]

- ・『現代修験道の宗教社会学—山岳信仰の聖地「吉野・熊野」の観光化と文化資源化』岩田書院、2019年9月。

[論文]

- ・「Notes on the Revolution of the Image of Shugendō —Centering on the 1970s and 1990s—」『中央学術研究所紀要』48号、2019年11月、141-152頁。

[口頭発表]

- ・「モノが立ち上げる宗教伝統—現代の山伏を事例に一」（パネル「人とモノの現代宗教—意味づけから消費へ—」）日本宗教学会第78回学術大会、於帝京科学大学、2019年9月14日。
- ・「文化資源としての山岳霊場—霊山の観光化・現状と課題」相模国霊場研究会、於ユニコムプラザさがみはら、2019年11月19日。
- ・「観光資源としての「講」—現代の視覚資料を通じて講研究を考える」講研究会、於駒澤大学、11月23日。

[その他]

- ・(書評)「白川琢磨『顕密のハビトゥス』」『宗教研究』第93巻、第2輯、2019年9月、264-270頁。
- ・(コメンテータ)「メディアと東アジア」研究会、於北海道大学メディア・コミュニケーション研究院、

2019年12月13日。

今井信治 共同研究員 宗教社会学

担当研究事業「デジタル・ミュージアムの運営および日本の宗教文化の研究と教材の国際発信」

【その他】

- ・(書評とリプライ) 小池靖「今井信治著『オタク文化と宗教の臨界—情報・消費・場所をめぐる宗教社会学的研究』『宗教と社会』第25号、2019年6月、151-155頁。

ガイタニディス・ヤニス (GAITANIDIS, Ioannis)

共同研究員 日本学・宗教社会学・医療人類学

担当研究事業「デジタル・ミュージアムの運営および日本の宗教文化の研究と教材の国際発信」

【論文】

- ・「「背景化」するレイキー—現代のスピリチュアル・セラピーにおける位置づけ」栗田英彦・塚田穂高・吉永進一編『近現代日本の民間精神療法: 不可視なエネルギーの諸相』国書刊行会、2019年9月、269-291頁。
- ・“More than just a photo? Aura photography in digital Japan”, *Asian Ethnology* 78 (1), 2019.7., pp.101-125, Special Issue edited by Erica Baffelli and Jane Caple.
- ・“Jobbing as methodology: Victor T. King’s involvement with Area Studies and some implications for Japanese Studies and beyond”, in OOI Keat Gin (ed.) *Borneo and Sulawesi: Indigenous Peoples, Empires and Area Studies*, Routledge, 2019.12., pp.176-193.
- ・“Spiritual Apostasy’ in Contemporary Japan: Religion, Taboos and The Ethics of Capitalism”, *Silva Iaponicarum* 60/61, 2020.3., pp.41-65.
- ・ガイタニディス・ヤニス・小林聡子・吉野文編著『クリティカル日本学—協働学習を通して「日本」のステレオタイプを学びほぐす—』明石書店、2020年3月(はじめに、序章、第2章、第7章、第11章執筆)。

【口頭発表】

- ・“Datsu-supi: Heretical Discourse and Spirituality in Contemporary Japan,” in Panel: Transforming Taboos: Challenging Hegemonic Prohibitions in Japan’s Past and Present (organiser: Julian Biontino), Asian Studies Japan Conference, Saitama University, 2019.6.29.
- ・“Criticizing spiritual presumption from within: the case of the anti-spirituality discourse in contemporary Japan,” Thematic Session: The marketization of religion: transnational and global developments. International Society for the Sociology of Religion Bi-Annual Conference, University of Barcelona, 2019.7.11.
- ・「異端論としての脱スピ論—内からのスピリチュアル批判—」日本宗教学会第78回、於帝京科学大学、2019年9月14日。

イヴ・カドー (CADOT, Yves) 共同研究員 日本文化と武道

担当研究事業「デジタル・ミュージアムの運営および日本の宗教文化の研究と教材の国際発信」

塚田穂高 共同研究員 宗教社会学、日本文化論

担当研究事業「デジタル・ミュージアムの運営および日本の宗教文化の研究と教材の国際発信」

野口生也 共同研究員 宗教人類学、ペンテコスタリズム研究

担当研究事業「デジタル・ミュージアムの運営および日本の宗教文化の研究と教材の国際発信」

[口頭発表]

- ・「ペンテコスタリズムと伝統宗教」日本宗教学会第78回学術大会、於帝京科学大学、2019年9月14日。

ジャン＝ミシェル・ビュテル (BUTEL, Jean-Michel) 共同研究員 日本民俗学
担当研究事業「デジタル・ミュージアムの運営および日本の宗教文化の研究と教材の国際発信」

チャールズ・フレール (FREIRE, Carl)

共同研究員 近代の日本史 (特に社会史・思想史)

担当研究事業「デジタル・ミュージアムの運営および日本の宗教文化の研究と教材の国際発信」

牧野元紀 共同研究員 ベトナム キリスト教史

担当研究事業「デジタル・ミュージアムの運営および日本の宗教文化の研究と教材の国際発信」

[論文]

- ・Native Priests in Christian Societies in the Northern Regions of Precolonial Vietnam: The Appearance of Glocal Elites?, HIROSUE Masashi (ed.), *A History of the Social Integration of Visitors, Migrants, and Colonizers in Southeast Asia*, The Toyo Bunko, 2020.3., pp.35-73.

[口頭発表]

- ・「近世ベトナムにおけるキリシタンの受容と弾圧」シンポジウム「近世東アジアにおけるキリシタンの受容と弾圧」、於早稲田大学、2019年6月22日。

村上晶 共同研究員 宗教社会学、民間信仰研究

担当研究事業「デジタル・ミュージアムの運営および日本の宗教文化の研究と教材の国際発信」

[論文]

- ・「白百合女子大学における情報教育の30年 (1988-2018) —創造的学習としての情報教育—」(松前祐司、大久保成、高田夕希、長屋和哉、三日市紀子、阿久戸義愛、房賢嬉、村木桂子、倉住修、山内宏太郎と共著)『白百合女子大学研究紀要』55号、2019年12月、59-88頁。
- ・「生活仏教論再考—Lived Religion研究との比較から—」『國學院大學研究開発推進機構紀要』第12号、2020年3月、65-90頁。

[口頭発表]

- ・「モノが生み出すつながりとその変容—津軽地方を例として—」日本宗教学会第78回学術大会(パネル「人とモノの現代宗教—意味づけから消費へ—」)、於帝京科学大学、2019年9月14日。

[その他]

- ・「記憶としての死者」『ユリイカ』2020年3月号、青土社、2020年2月、181-184頁。

矢崎早枝子 共同研究員 宗教学

担当研究事業「デジタル・ミュージアムの運営および日本の宗教文化の研究と教材の国際発信」

[口頭発表]

- ・“Religion and politics in modern Japan: continuity and change in the clothing of Shinto deities”, Centre for the Study of Religion and Politics, University of St. Andrews, 2019.4.4.
- ・“Understanding Sufism: Dances of Universal Peace UK and its Syncretic Approach” (パネル“*What is Sufism? – An exploration of Sufi studies and Sufism in the West*”), British Association for Islamic Studies Annual Conference, University of Nottingham, 2019.4.16.
- ・“Religion and politics in modern Japan: clothing of Kami (Shinto deities) in manga comics”, Fantasy and the Fantastic Symposium, University of Glasgow, 2019.5.10.

- ・ “The Zionist as an ‘Oriental Jew’: A.S. Yahuda (d. 1951) and his work on Jewish-Muslim relations”, Department of Politics, Philosophy and Religion, Lancaster University, 2019.5.29.
- ・ “We are what we wear: clothing of Shinto deities in manga comics as an ongoing process of Kami definition”, European Association for the Study of Religions Conference, University of Tartu, 2019.6.26.
- ・ “‘A cup of humanity’: the Japanese tea ceremony (the Way of Tea) as portrayed by Tenshin Okakura and its reception and practice in contemporary Britain”, International Convention of Asia Scholars 11, University of Leiden, 2019.7.17.
- ・ “Translations of the Qur’an outside of a monotheistic context: the case of Japan”, Alexander Ross and the first English translation of the Qur’an (1649) : Book history, censorship and religion, University of Glasgow, 2019.9.12.
- ・ “More than a gaijin (‘outside person’) : Nicolas Bouvier and his Chronique japonaise”, Reinventing Modernity: Franco-Scottish Encounters with Japan, Alliance française de Glasgow, 2019.9.17.
- ・ (講演) “Shinto and nature”, Interfaith Glasgow “Faith to Faith: Faith and Nature”シリーズ, St Mungo Museum of Religious Life and Art, 2019.9.22.
- ・ (講演) “Engineering the future: Glasgow and Japan in the 19th century”, Henry Dyer Memorial Event, University of Glasgow, 2019.9.23.
- ・ (講演) “Kimono culture, beyond ornamental beauty”, Kimono Exhibition and Study Session, House for An Art Lover, 2019.10.9.
- ・ “Al-Andalus as the foundation of the Zionist vision: A.S. Yahuda and his work on Jewish-Muslim relations”, Religion and Society Seminar, Durham University, 2019.11.12.

[その他]

- ・ (イベント共催) Thistle and Sakura: Glasgow-Japan Networking Event, University of Glasgow, 2019.4.24.
- ・ (テレビ監修) Sacred Wonders of the World, エピソード “Nachi Falls, Japan”, BBC ONE, 2019.8.30.
- ・ (シンポジウム共催) Alexander Ross and the first English translation of the Qur’an (1649) : Book history, censorship and religion, University of Glasgow, 2019.9.12.
- ・ (イベント共催) Passion in Stillness: Traditional Nohgaku Performance & Workshop “Discover Samurai culture in pre-Shakespeare era”, University of Glasgow, 2019.11.9.

井関大介 共同研究員 日本宗教史、宗教思想史

担当研究事業 「「國學院大學 国学研究プラットフォーム」の展開と国学史像の再構築」

[研究紹介]

近世日本における三教論、とくに儒教の経世論や礼楽論の影響下にある神道論について研究している。具体的には、熊沢蕃山や荻生徂徠、増穂残口といった論者達について、彼らが儒教・仏教・神道その他をどのような理論的前提のもとで論じ、何をあるべき姿として実現しようとしていたか、彼らの言説が後の国学者達における「道」の議論へとどう引き継がれ、あるいは変容していくのかを明らかにすることを目指している。また、そういった近世的な宗教理論が、西欧の「宗教」概念を受け入れていく近代においてどのように展開していくのかという問題意識から、近年は井上円了の宗教論や妖怪学についての研究も進めてきた。

[論文]

- ・ 「秋成の「神秘思想」における二つの神語り」『文学』岩波書店、第10巻第1号、2009年1月、169-180頁。
- ・ 「熊沢蕃山の「大道」と「神道」』『宗教研究』日本宗教学会、第92巻第1輯第391号、2018年6月、1-26頁。
- ・ 「円了妖怪学の基本構造について」井上円了研究センター編『論集 井上円了』教育評論社、2019年4月、184-213頁。

[口頭発表]

- ・「国学者における礼楽論」第78回日本宗教学会大会、於帝京科学大学、2019年9月。

[その他]

- ・三浦節夫監修、井関大介・出野尚紀・北田建二・竹中久留美編『CATALOG 井上円了一モノから見る思想・活動・人脈—』東洋大学井上円了研究センター、2019年12月、16-26頁。

一戸渉 共同研究員 日本近世文学・学芸史

担当研究事業「『國學院大學 国学研究プラットフォーム』の展開と国学史像の再構築」

[論文]

- ・「復古というモード—和学から国学へ—」『近世文学史研究三 十九世紀の文学』ぺりかん社、2019年11月、48-64頁。
- ・「稲荷社祀官大西親盛の和歌 続：京都学・歴史館蔵『〔歌日記〕』翻印と解題（一）」『斯道文庫論集』第54輯、2020年2月、19-55頁。

[口頭発表]

- ・「寛政九年十一月二十七日付蒔田必器宛橋本経亮書状について」第34回鈴屋学会大会、於本居宣長記念館、2019年4月21日。
- ・（講演）「吉田家三代と学芸活動」国立歴史民俗博物館 共同研究「『聆濤閣集古帖』の総合資料学研究」報告会「住吉の豪商・吉田家のお宝—まぼろしの聆濤閣コレクション—」、於白鶴酒造株式会社本社、2019年12月1日。

[その他]

- ・（項目執筆）「笑いで処世訓を学ぶ—落語の源流『醒睡笑』（笑話集）」『〈奇〉と〈妙〉の江戸文学事典』文学通信、2019年5月、57-62頁。
- ・（コラム）「みやびといましめ一定信の文雅を読み解くために」『なごみ』第474号、淡交社、2019年6月、38-39頁。

今井功一 共同研究員 歴史民俗資料学、富士信仰、教派神道

担当研究事業「『國學院大學 国学研究プラットフォーム』の展開と国学史像の再構築」

[研究紹介]

富士講系教派神道のひとつである実行教と、地域に残された富士講関係資料の2つを主な対象として、近代における角行系富士信仰の展開を考察している。前者については、教団による書籍・雑誌の出版活動を中心に、近代宗教界における実行教と、教団を支えた人々の果たした役割について検討することで、富士信仰史・教派神道史上に改めて位置付けることを目指している。後者については埼玉県南部で活動していた富士講とその明治期の指導者による著作の分析から、地域社会における富士信仰の教義及び情報の流通や伝達について検討している。

[論文]

- ・「柴田花守と実行社・実行教の書物出版」佐賀大学地域学歴史文化研究センター『花守と介次郎—明治を担った小城の人びと—』佐賀大学地域学歴史文化研究センター、2016年10月、43-49頁。
- ・「富士信仰と東照宮をめぐる研究ノート—戸田市新曾南の新曾浅間社に祀られた東照宮から—」『埼玉民俗』第42号、2017年3月、80-87頁。
- ・「本橋源兵衛『不二道一字開の説』の影印と翻刻及び解題」『研究紀要』（戸田市立郷土博物館）第27号、2017年3月、1-14頁。
- ・「富士講系教派神道・実行教の雑誌刊行—実行教本館内唯一社『惟一』目次」『書物出版と社会変容』第21号、2018年10月、67-99頁。

[口頭発表]

- ・「実行教の組織化における非富士信仰的要因」（パネル「越境する教派神道—組織化における交渉・葛藤・分裂—」）日本宗教学会第78回学術大会、於帝京科学大学、2019年9月15日。
- ・「明治期実行教の教師養成制度形成における国学者・漢学者」神道宗教学会第73回学術大会、於國學院大學、2019年12月8日。

荻原 稔 共同研究員 教派神道

担当研究事業 「『國學院大學 国学研究プラットフォーム』の展開と国学史像の再構築」

【研究紹介】

井上正鐵と禊教を中心にして、近世の庶民教化の活動や、明治期以降の教派神道の展開を研究している。法政大学文学部を卒業後、特別支援学校の教員を33年間してきた。かつて、神道学科で「教派神道概説」の兼任講師を6年間ほどしたが、今度は日文研の共同研究員にさせていただいて嬉しい。今年は調査に出歩けないので、文献中心にして井上正鐵と気吹舎・平田家の関りを調べたりしている。井上門中で平田門人になったという人もおり、信州伊那では同じ村に平田門人と井上門中がいるところがある。日文研では、平田門人で井上門中にも関わった大武知康関係の文書の研究も始まりつつあるので、何が見えてくるだろうかと楽しみにしている。

【単行本】

- ・『井上正鐵門中・禊教の成立と展開』思想の科学社、2018年7月。

【論文】

- ・『「特別支援教育の生涯学習化」の現場から—一つの子の会ひまわり広場の事例—』『SGU 教師教育研究』（札幌学院大学）34号、2020年2月、66-71頁。

【口頭発表】

- ・「大成教に包括された近世教化活動」第78回日本宗教学会学術大会、於帝京科学大学、2019年9月15日。
- ・「平成30年度・令和元年度旧ソ連抑留中死亡者遺骨収集派遣（ハバロフスク地方第1次）報告」シベリア抑留体験の労苦を語り継ぐ集い、於全国強制抑留者協会、2019年10月6日。
- ・「井上正鐵門中・禊教と国学」令和元年度第1回国学研究プラットフォーム公開レクチャー、於國學院大學、2019年11月14日。
- ・「井上正鐵の杉山秀三宛書簡」第73回神道宗教学会学術大会、於國學院大學、2019年12月8日。
- ・「教員・家族・住民としてワクワクしながら生きる—ある養護学校教員の来た道と願い—」令和元年度札幌学院大学教師教育研究協議会講演会、於札幌学院大学、2020年1月11日。

【その他】

- ・（コラム）「青峰学園における学校に地域の人びとを招くカフェの取組」『これからの特別支援教育の進路指導—共生社会に向けたネットワークづくり』ジヤース教育新社、2019年12月、106-107頁。

小平 美香 共同研究員 日本思想史

担当研究事業 「『國學院大學 国学研究プラットフォーム』の展開と国学史像の再構築」

【口頭発表】

- ・『「穂積歌子日記」にみる「慈善」』「近現代日本における「皇室と福祉」研究会」、於皇學館大学、2019年9月4日。

小田 真裕 共同研究員 日本近世史

担当研究事業 「『國學院大學 国学研究プラットフォーム』の展開と国学史像の再構築」

【その他】

- ・見学記「流山市立博物館開館40周年企画展 小金牧—絵図・古文書・発掘調査から見た牧と村—」『千葉史学』第74号、2019年5月、51-53頁。

- ・展示評「(展示評) 記憶をつなぐ—津波災害と文化遺産—」歴史学研究会編『歴史を未来につなぐ—「3・11からの歴史学」の射程—』、東京大学出版会、2019年5月、133-140頁。
- ・歴史随想「台風の後にICOM京都大会を振り返る」『千葉史学』第75号、2019年11月、6-8頁。

芹口真結子 共同研究員 日本近世史

担当研究事業「[國學院大學 国学研究プラットフォーム]の展開と国学史像の再構築」

[単行本]

- ・『近世仏教の教説と教化』法蔵館、2019年6月。

[論文]

- ・「宗派間対立における政治交渉—宗名論争を事例に」『人民の歴史学』222号、2019年12月、1-13頁。

[口頭発表]

- ・「宗派間対立における政治交渉—宗名論争を事例に」東京歴史科学研究会第53回大会、於早稲田大学、2019年4月20日。
- ・「安永期宗名論争における仏教教団と藩権力の政治交渉—姫路藩領を事例に一」第58回日本女子大学史学研究会大会、2019年11月30日。
- ・(講演)「宗名論争の再検討—対幕府交渉ルートに着目して—」2019年度真宗大谷派東京教区東京一組住職・寺族研修会、於円照寺、2020年2月12日。

[その他]

- ・(書評) 西田かほる著『近世甲斐国社会組織の研究』『日本歴史』862号、2020年3月、90-92頁。

問芝志保 共同研究員 宗教社会学・日本近現代宗教史

担当研究事業「[國學院大學 国学研究プラットフォーム]の展開と国学史像の再構築」

[論文]

- ・「過疎地域における合祀墓の設立と他地域への広がり—新潟県糸魚川市を事例として—」冠婚葬祭総合研究所編刊『論文集—冠婚編・葬祭編—(平成30事業年度)』、2019年5月、104-111頁。
- ・「寺院と墓地の現在—「墓じまい時代」の課題—」相澤秀生・川又俊則編著『岐路に立つ仏教寺院—曹洞宗宗勢総合調査2015年を中心に—』法蔵館、2019年7月、137-164頁。

[口頭発表]

- ・「近代日本における墓地観の変容と墓参り」「現代ムスリム社会における風紀・暴力・統治に関する地域横断的研究」研究会、於東京文化財研究所、2019年6月1日。
- ・「都市の墓地問題の再検討」(パネル「『現代人の信仰構造』の成果と課題」)「宗教と社会」学会第27回学術大会、於京都府立大学、2019年6月13日。
- ・「宗教実践としての墓参りと先祖観の現在—2010年代の開運・自己啓発・スピリチュアル本の分析から—」「宗教とツーリズム」研究会、於北海道大学東京オフィス、2019年8月7日。
- ・「調査をとおして見えてくる寺院と葬祭・墓地問題のこれから」(パネル「宗勢調査の可能性と個別課題へのアプローチ」)日本宗教学会第78回学術大会、於帝京科学大学、2019年9月15日。
- ・「宗勢調査からみる寺院と墓地の現在」(パネル「岐路に立つ仏教寺院」第3報告)曹洞宗総合研究センター第21回学術大会、於曹洞宗檀信徒会館、2019年11月26日。
- ・“Transformation of the Burial System after the Great Kanto Earthquake”, in Workshop: The Practices and Ethics of Dealing with Disaster Remains and Cultural Heritage, Tohoku Univ., in Sendai, 2020.2.20.

[その他]

- ・「寺院に建てる家墓の正しい歴史から見る未来(1) 江戸東京の寺院に庶民はどのような墓を建てたか」『月刊住職』2019年10月、112-119頁。

- ・「寺院に建てる家墓の正しい歴史から見る未来（2） 明治以後の墓所がカロート式になった経緯に学ぶ」『月刊住職』2019年11月、108-114頁。

原田雄斗 共同研究員 日本近代史、日本宗教史

担当研究事業「『國學院大學 国学研究プラットフォーム』の展開と国学史像の再構築」

[研究紹介]

近代日本において神道がいかに解釈されたのかを、日本近代史の文脈に即して明らかにすることを目指している。具体的には、日露戦争前後に神職に就任した河野省三の神道解釈を分析することで、世紀転換期では、神道解釈の根拠が時代状況から個人の境遇に変化していったことを示した。

近年では、河野が所属していた埼玉県神職会の動きを追いつつ、大正天皇の即位を契機とする神社界の反応を事例に、社会の「応答」としての神道の様相に迫っている。また、台北帝国大学で法学を担当した増田福太郎による台湾宗教研究の特徴を析出しようとしている。

以上の点を明らかにすることで、人々は自らの生きる社会や自らの境遇をどのように認識し、どのように意味づけようとしたのかという問いに接続することを試みている。

[論文]

- ・「世紀転換期における在地神職の神道解釈と宗教観—河野省三を事例に—」『次世代人文社会研究』第12号、2016年3月、109-132頁。
- ・「研究動向 国家神道研究」寺田喜朗・塚田穂高・川又俊則・小島伸之編著『近現代日本の宗教変動—実証的宗教社会学の視座から—』ハーベスト社、2016年6月、382-397頁。
- ・「天皇の代替わりと神社界—大正期における『全国神職会会報』の論説を中心に—」『國學院大學研究開発推進機構 日本文化研究所年報』第11号、2018年9月、88-105頁。

[口頭発表]

- ・「大正天皇即位礼と埼玉県の神社界」第5回国家神道・国体論研究会、於國學院大學、2016年9月24日。

古畑侑亮 共同研究員 日本近世史・思想史

担当研究事業「『國學院大學 国学研究プラットフォーム』の展開と国学史像の再構築」

[論文]

- ・「刊行物にみる金沢甚衛の横顔—社会事業の実践と歴史研究を中心に—」『大倉山論集』第66輯、2020年3月、213-268頁。

[口頭発表]

- ・（講演）「好事家の旅と小田原北条氏研究—福住正兄と小室元長の交友から—」第558回報徳ゼミナール、於報徳博物館、2019年6月9日。
- ・「幕末維新时期における「好古家」の情報蒐集と歴史意識—武蔵国の在村医小室元長の『窺天録』を中心に—」近世史フォーラム7月例会、於聖心女子大学、2019年7月20日。
- ・「明治10年代における考古学的知識の受容と歴史意識—埼玉の「好古家」の書簡集の分析から—」近現代史研究会11月例会、於名古屋大学、2019年11月30日。

[その他]

- ・（書評）「工藤航平『近世蔵書文化論 地域〈知〉の形成と社会』から考える」『書物・出版と社会変容』23号、2019年9月、133-147頁。

三ツ松誠 共同研究員 日本思想史

担当研究事業「『國學院大學 国学研究プラットフォーム』の展開と国学史像の再構築」

[単行本]

- ・『京の雅と小城藩』（村上義明と共編）佐賀大学地域学歴史文化研究センター、2019年10月。

[論文]

- ・「帰って来た王室家—明治初年の攘夷派の位置をめぐって—」『明治維新史研究』17号、2019年11月、70-76頁。
- ・「『当世百歌仙』の刊行とその周辺」『近世文藝』111号、2020年1月、49-66頁。

[口頭発表]

- ・(講演)「歌人としての古川松根」第175回歴史館ゼミナール、於佐賀県立佐賀城本丸歴史館、2019年4月13日。
- ・「西川須賀雄の初期思想」日本山岳修験学会山寺立石寺学術大会、於山形大学小白川キャンパス、2019年9月1日。
- ・(講演)「明治新政府と丸山作楽」島原市第214回市民文化講座、於森岳公民館、2019年9月16日。
- ・(講演)「小城から考える近世の朝廷・幕府・藩」佐賀大学・小城市交流事業特別展「京の雅と小城藩」記念講演会、於小城市歴史資料館、2019年10月26日。
- ・「平田国学における幽界交渉実在論の系譜」東アジア恠異学会第125回定例研究会、於関西学院大学梅田キャンパス、2019年11月17日。

[その他]

- ・(資料紹介)「小城鍋島文庫蔵『和学知辺草』翻刻稿(上)」(中尾友香梨、白石良夫、日高愛子、大久保順子、沼尻利通、中尾健一郎、村上義明、二宮愛理、進藤康子、亀井森、土屋育子、田中圭子、中山成一、脇山真衣と共著)『佐賀大学地域学歴史文化研究センター研究紀要』14号、2019年9月30日、95-115頁。

出版物紹介

櫻井義秀編著『宗教とウェルビーイング—しあわせの宗教社会学』

(北海道大学出版会、2019年3月)

内容紹介

日本社会は歴史上初めて持続的な人口縮小期を迎え、社会の維持・発展を自明のものとした救済論や現状認識は通用しない時代が到来した。転換期にある日本社会において現代宗教の課題は何か、人々の求めに応じる宗教実践のあり方とはいかなるものか。また、つながりの希薄化や個人化傾向に抗う社会的絆再編が求められる中で、現代宗教はソーシャル・キャピタルやしあわせの基盤づくりにいかに寄与しうるのか。以上の問題意識から第Ⅰ部で宗教とウェルビーイング研究の理論的検討が行われ、第Ⅱ部においてアジア・西ヨーロッパ・日本の地域間比較となる宗教意識・行為の主観的幸福感の計量分析、第Ⅲ部では主観的幸福感の局面として女性・高齢者・過疎地域・移民の事例分析から宗教的信仰や儀礼、継承、教団活動に媒介された宗教的幸福感が考察される。



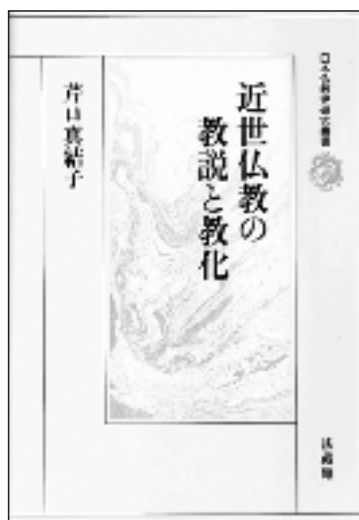
芹口真結子『近世仏教の教説と教化』

(日本仏教史研究叢書、法藏館、2019年6月)

内容紹介

近世仏教史についての研究は、思想史研究や政治史研究、地域社会史研究など様々な観点から行われており、近年は書物研究の成果を踏まえた宗教知や信仰に関する研究も盛んである。しかしながら、こうした実証的研究は個別の分析に留まっており、それらを総合的に理解しようとする動きは活発ではない。

以上のような問題意識のもと、本書は近世の東本願寺派教団を主な分析対象に据え、その教学論争の展開や教説の拡散過程を通して近世宗教の特質の解明を試みている。教学研究の発展は、経典の解釈の相違に伴う僧侶間の対立や自宗派の優越性の主張による宗派間の論争を引き起こし、幕藩領主がそれに対応する例もあった。また教説は、僧侶や書物によって民衆層にも広く受容されていった。本書は近世日本の社会構造や諸階層の思想の特徴を総合的に捉える上で、このような教化・教説にかかわる諸事象への注目が重要であることを主張する。



天田顕徳『現代修験道の宗教社会学—山岳信仰の聖地「吉野・熊野」の観光化と文化資源化—』

(岩田書院、2019年9月)

内容紹介

本書は、「明治維新以降の大転換期」にある現代の修験道のありようと、変化の諸相を奈良県の吉野と和歌山県の熊野地域をフィールドとして論じたものである。

著者の博士論文に基づく本書は、研究課題として、修験道の「担い手」である「行者」と「講」を提示し、その数や社会的性質の動態に注目しながら、山岳修行の変化や修験者の意識の変容を考察した。また、修験道の文化財化・文化遺産化が進展している状況に、「ツーリズム」という補助線を引くことで、「信仰」が「伝統文化」へと読み替えられている現状を明らかにし、それが地域や行者に与える影響を検討した。そのような分析を通して、本書全体のキーワードでもある「霊山の解放化」のあり方や特徴を析出し、現代修験道という研究対象を宗教社会学の研究史上に位置づけることを試みている。



黒崎浩行『神道文化の現代的役割—地域社会・メディア・災害復興—』

(弘文堂、2019年12月)

内容紹介

産業化、都市化、グローバル化が進んだ現代日本社会においては、地域コミュニティの衰退や、貧困と格差の拡大、自然災害の頻発とその復興などの困難な問題が生じている。

本書は、現代日本社会が抱える問題に対して、宗教がどのような役割を果たすべきかを、多様な当事者の期待や課題認識および、それらをめぐる実践に着目し、検討している。特に、祭りや伝統芸能などの神道文化（神社神道に関する文化）と、その担い手を対象として、当事者への聞き取りや参与観察などの調査をもとに、彼らの具体的な実践のあり方を明らかにした。そのような試みを通して、宗教の持つ社会的統合機能や、究極的関心への説明機能を問いただしている。

なお、本書は「令和元年度國學院大學出版助成（甲）」の交付を受けて刊行されたものである。



テレビ放映・番組紹介

趣味どきっ！「幸せ運ぶ！ニッポン神社めぐり」

講師の平藤喜久子教授と山里亮太（お笑いタレント）・パンサー（お笑いトリオ）がゲストを迎え、各地の神社を実際に訪れて、奉斎する神々の神徳や由緒、神社・神道に関する語句・情報を解説しながら、参拝・紹介する番組。2019年12月から2020年1月にかけて、Eテレで毎週火曜日の21：30～21：55（再放送は翌週火曜日11：30～11：55）、全8回にわたり放映された。

放映にあわせて番組テキスト『NHK趣味どきっ！幸せ運ぶ！ニッポン神社めぐり』（NHK出版、2019年12月）が刊行され、講師として平藤教授が全体を確認するとともに、本研究所の吉永博彰助教が編集協力に当たった。



各回の放映日とテーマ、対象神社とゲストは、下記のとおりである。

第1回 災難を乗り越えたい！【災厄よけ】 近江国一之宮建部大社（滋賀）

ゲスト：橋本マナミ（女優）

〔放送〕 12月3日（火） 〔再放送〕 12月10日（火）

第2回 良縁に恵まれますように！【縁切り・縁結び】

安井金比羅宮（京都）・地主神社（京都）

ゲスト：橋本マナミ（女優）

〔放送〕 12月10日（火） 〔再放送〕 12月17日（火）

第3回 母は強し、子は宝！【安産・子育て】 大宮八幡宮（東京）

ゲスト：深川麻衣（女優）

〔放送〕 12月17日（火） 〔再放送〕 12月24日（火）

第4回 足場を固めて大成したい【出世】 日枝神社（東京）

ゲスト：崎山つばさ（俳優）

〔放送〕 12月24日（火） 〔再放送〕 1月7日（火）

第5回 今年も福よ、来い！【商売繁盛】 日本橋七福神（東京）

ゲスト：川島海荷（女優）

〔放送〕 1月7日（火） 〔再放送〕 1月14日（火）

第6回 平穏に暮らしたい！【安全】 鹿島神宮（茨城）

〔放送〕 1月14日（火） 〔再放送〕 1月21日（火）

第7回 心身ともに健やかに！【健康】 神田神社（東京）

ゲスト：川島海荷（女優）

〔放送〕 1月21日（火） 〔再放送〕 1月28日（火）

第8回 パワーをもらいたい！【諸願成就】 熱田神宮（愛知）

ゲスト：崎山つばさ（俳優）

〔放送〕 1月28日（火） 〔再放送〕 2月4日（火）

國學院大學研究開発推進機構 日本文化研究所年報 第13号

令和2年9月30日 発行

発行者 平藤喜久子

編集担当 吉永博影

武田幸也

印刷所 株式会社 丸井工文社

発行所 國學院大學研究開発推進機構 日本文化研究所

東京都渋谷区東4丁目10番28号

郵便番号 150-8440

電話 03-5466-0104 (研究開発推進機構事務課)

FAX 03-5466-9237

